

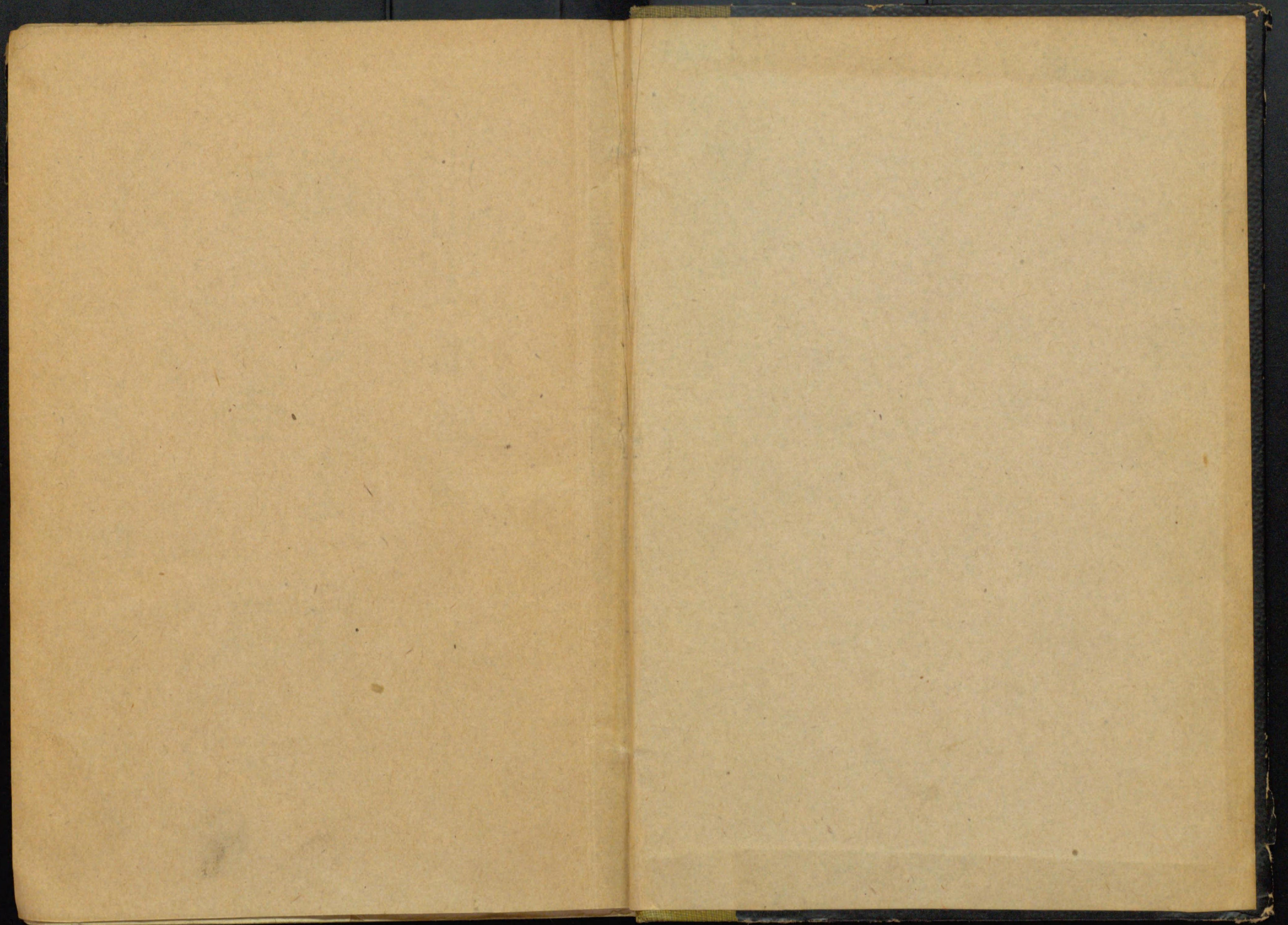
583

583-15



1200501523059





中山太郎校訂



こ
告
よ
鳥み



東京
博文館版

解題

中山太郎

天保三年に「梅曆」が發行せらるゝや、江戸の讀書界は偉大なる衝動を受けたのであつた。從來の稗史小説といへば術學者風の馬琴の勸善懲惡のものか、三馬や一九が書いた穿ちと駄洒落の陳列に過ぎぬか、それか、それなれば鹿爪らしい顔して堂上の習禮などを説いた種彦の草双紙であつて、所謂「大御所様時代」の爛熟しきつた江戸文化の空氣を呼吸してゐる者は、何としても是等の讀み物では刺撃が鈍いので、更に一段と自分等の生活としつくり合ふものを要求してゐたのである。勿論、江戸幕府では曩に流行した「黄表紙」が風紀に害があるとして之を禁止したので、多くの作家は此の禁令を避けて心ならずも孝子傳や烈女譚に筆を執つてゐたのであるが、その折に爲永春水が「人情本」として梅曆を著述したことは、文壇の寂寞を破ると同時に讀書子は驚異の眼を睜つたのである。

當時「梅曆」が如何に讀書界に熱狂的の歡迎を受けたかは、此の書と馬琴の八犬傳、種彦の田舎源氏、一九の膝栗毛と併せて四大奇書と言はれた一事に徴するも、その尋常でなかつたことが知られるのである。故齋庭篁村翁はこれに就いて左の如く述べられてゐる。

梅曆が發賣さるゝや、是に通ぜざれば野暮と譏り話せぬ奴といやしみしより、若き者は新道の師匠の家に煙草箱を枕として是を讀み、顔に當てゝ眠る時は夢にも其身の丹次郎たらんを願ひ、勤番の石部金太夫もお腰の物を預けて湯屋の二階にて之を誦してお蝶米八が輕羅とならんことを欲す、儒者の書生は端本の唐詩選を捨てゝ之に換へ、醫

者の代脈は傍訓の手引草を抛て密かに復す、苟くも三味線の音の聞える家、格子作りに猫の見える所、此の本の行はれざるはなし（出版月評第一卷第一號所載摘要）。

又以て洛陽の紙價を高からしめたことが窺はれるのである。而してかくの如き好評を博した「梅曆」の著者である爲永春水とは、抑々どんな人物であり、併せてその著作の動機は何であつたか、それに就いて少しく記すとす。

春水は江戸の人、姓は佐々木、名は高貞、俗稱を越前屋長次郎といふた。春水もと書籍の仲買（俗にセドリといふ）を營んでゐたが、一目眇たるの故を以て、人或は綽名して「目長」と呼んでゐた。家業柄として書籍に親しむ機會が多かつたのと、性來多少の讀書癖があつたので、餘暇あれば稗史野乘の類を好んで讀み、當時の本屋としては先づ物識の部に數へられるやうになつた。かうなるとセドリなどして汗水流して暮らすよりは、樂をして世を送りたいと思ふが人の常で、春水も講釋師にならうと企て伊東燕晋の弟子となり、爲永正介と稱して舌耕の藝人となつたが、空板をたゞいて本當に修業したのでないから聽衆を捉へるこつが分らず、正介が高座に上ると軒が出る欠伸が起るといふ次第で失敗に終り、今度は戯作者にならうと志し、式亭三馬の門人となつて三鷺と號し文筆に親んで見たものゝ、本屋仲間での物識り位の力で書いたものが、さう何處の板元でも出版を引受ける譯もなし、それに三馬門下には徳亭三孝、古今亭三鳥などの先輩が控へてゐるので事志と違ひ、間もなくこゝを去つて振鷺亭の表徳を繼ぎ、二世振鷺亭として著述に従事したが、これも初代に及ばぬとの悪評を受け遂に失敗に終つてしまつた。

春水の處女作が何であるかは今に判然せぬけれども、察するに文政五年頃に書いた「八百や萬神樂の大鼓」と「小糸佐七紫のゆかり」のうちの何れかゞそれであらうと思はれる。文政五年といへば京傳は夙く故人となり、此の年の正月に三馬も歿したが、曲亭馬琴の文名は海内に響き、柳亭種彦また日の出の勢ひを以て騷壇に鳴らしてゐた。此の兩文豪を向ふに廻して太刀打をすることは、世才に長ずるも文才に恵まれなかつた春水としては不可能のことゝ言は

も事かゝぬほどの生活をしてゐたのであるが、それでも殊更に貧乏を装ひ、常に飯櫃を左右に並べそれへ板を渡して机の代りとして執筆し、戸外に初鰹の賣り聲がすると、着てゐた羽織を脱いで値段にかゝはらず之と換へるといふやうなことをして、特に奇行を銜つて俗人を驚かしたものである。辨慶橋に居た頃には自から情界の老仙なりと見せかけ、妻女とも下婢ともつかぬ色よき婦人——俗にいふ苦勞人を多く家に置き、色のもつれの捌き役として、その身も仇々しき出立をして世間を驚かしたものだと思はれる。然しかうした僞善も春水に言はせると一種の廣告であり宣傳であつて、かうまでしても世間から忘れられぬやうに努めてゐたのである。

「梅曆」は全篇を通じて、別にこれぞと取り立てゝ言ふほどの結構も趣向もあるものではなく、鎌倉幕府の重臣である畠山重忠の家來榛澤六郎成清の隠し子である夏野丹次郎といふ男が、曩に吉原の遊女屋に養子に往き事を以て出され、後に唐琴屋に養子に入り、こゝで同家の抱へ藝妓米八と相思の仲となり、これに配するにお蝶といふ江戸季世の娘氣質を代表した婦人を以てし、更にこれを助くるに米八の妹分なる藝妓仇吉、通客の千葉の藤兵衛その他を黜出して、三角關係の戀の葛藤を寫したものに過ぎぬのである。従つて文學的の價值から云へば極めて低級なるものであつて、新聞の三面記事を引き延ばしたやうなものに外ならぬのである。それにもかゝはず此の書が甚大なる好評を博したのは、時代の頽廢期の思潮に投じたことゝ、馬琴流の脚色の怪奇に飽いてゐた讀書界の嗜好に合したからであつた。換言すれば春水の無技巧と無脚色とが時流に迎へられたまでである。

然るに此の「梅曆」の流行が時弊を助長するに大なる影響があつたので、天保十三年水野越前守の改革に際し、春水は第一番の槍玉にあげられて手鎖の刑に處せられ、併せてその著書は絶版を命ぜられた。その時の宣告文は左の如きものである。

其方儀、繪本双紙之類、風俗之爲に不相成、猥ケ間敷事、又は異説等書綴り候作出し候儀、無用可致旨町觸相背き、地木屋共より誂候迎、著述いたし、右之内には婦女之勸善にも可相成と心得違いたし、不束之事共書顯し、剩遊所放蕩之體を繪入仕組遣し、手間賃請取候段不埒に付手鎖申付之、

更に罰科は版元にも及び七名の出版者は賣上げ金を殺收された外に各過料五貫文づゝに處せられた。爾來、春水は快々として樂まず日夜劇飲して遂に病を發し、天保十三年七月十三日（一に廿三日ともいふ）に刑期中悶死した。築地本願寺内妙傳に葬る、享年五十四、著作は梅曆、いろは文庫、梅見船、貞操婦女八賢誌、風俗女西遊記、花鳥風月、梅花春水など合計三十二種ある。

春水は生前にも死後にも、かなり苛辣なる批評を加へられてゐる。即ち無學であつたこと、文藻に乏しかつたこと、賣名に急であつたこと、人格が低級であつたこと、交友に人がなかつたこと、彼の著述はその悉くが他の摸倣であつて、獨創の少なかつたこと、然もその著述は男女間の情痴を寫したままで、高遠の理想のなかつたことなどが、その重なる非難の點である。而して是等の批評は悉く事實であつて、九泉の下から春水を起して聽かせても恐らく肯定するより外は致し方があるまいと思ふ。殊に彼が文壇の一角に地步を占めた出世作である「梅曆」においてすら、主人公たる丹次郎の年齢が不明だといふので昔から攻撃されてゐる。成る程丹次郎の境遇から云へば十八九歳の青年であるべき筈だに、その言行から見れば三十歳以上の人物としか考へられぬのである。更に米八にあつても此の點が明瞭を缺いてゐて捕捉するのに苦むのである。更に彼の著書の讀者が所謂下町の一部の者に限られてゐたことなどは、何としても彼に文豪の巨匠のといふ榮譽を與ふることは出来ぬのである。又た勿論彼とても「人情本の元祖」などと

大きなことを言うてゐても、それで世間が承知するものとも考へてゐなかつたやうである。「梅曆」に現はれた千葉の藤兵衛とは、津ノ國屋藤兵衛（俗に津藤と稱へ、號を香以といふ）と稱する幕末切つての道樂者で、遠く紀文、奈良茂の豪奢を學び、近く十八大通の遣り口を慕ふたものであるが、遂にその糟粕を嘗めるに終つてしまつた。春水がこれを篇中に現はしたのは、津藤の花柳界における勢力を利用して賣らんことを計り、津藤は利用させて益々通客の名を賣らうとしたので、早く云へばお互ひに利用しあつたにしか過ぎぬのである。此の外、堀の清元の師匠延津賀、幫間の櫻川由次郎などは、共に實在の人物で、春水と遊び仲間の者であつた。

春水を無學の故を以て責むるのは當つてゐるかも知れぬが、不行跡だとか、娘を大名の妾に出したとかの故を以て責めるのは蓋し當を得たものとは思はれぬ。賢者顔してゐる馬琴の素行はどうであつたか、彼が家庭における亂倫は實に言語に絶してゐるではないか。饗庭篁村翁が在世中に語られたところによると、馬琴は悴が死んだ後にその姦と浮名を唄はれたとのことであつた。更に娘を妾に出したのも決して春水ばかりではなかつたのである。江戸期の考古學者として「埋鬢發香」を著した穂井田忠友は、その娘を奈良奉行の妾に出し、此の傳手によつて正倉院に入ることを許され、かくて彼の學問は大成されたのである。所詮は斯くの如きことは時代の風潮であつて、これを以て春水を責めるのは少しく酷に過ぎたものと言ふべきである。

それにしても一部の「梅曆」は、春水をして不滅の人として永久に傳へさせるに至つた。無學であるにせよ、人格に缺くるところがあるにせよ、此の一事こそ春水の期したところである。此の點から言へば彼は完全にその志を達成した者である。

目次

梅こよみ

春色 惠の花……………一

春色 梅兒譽美……………五七

餘梅 曆春色 辰巳園……………二六

娜春 抄英 對 暖 語……………二八一

春色 梅美婦 禰……………四三

春告鳥

花風 情月 春 告 鳥……………五四九

春色 籬の梅……………六八

閑梅 解春 の 若 草……………八三

— 目次終 —

梅こよみ

春色 惠の花

自序

浮世に遠き山住の春をかぞへて雪中にまづ頼母しき冬至梅其香もゆかし白梅の闇をてらせし紫折戸に臥龍が隆中の才智ならねど節知り貌の梅一りんその花びらの五年以來版元畫工の丹誠に木ぶりも仕上し枝から枝やうやく香をりの高くなりて来る年毎に看官のまだかくととひたまひし御ひいき故に深山木を園にうつして文永堂が壽梓の中に一株の根強き一品となりたるこのよろこびに此花の根分か繼補の手入をせよと文好なる御得意のすゝめに任せてまたさらにひらく連中の花ごゝろ若やく春の一寸趣向過日へ歳とる梅ごよみいとめづらしく溪齋が久しぶりにて溪扉をいつる雪間や初音の鶯のやさしき美姿うつしたる米八於蝶此糸がまだ蒼なる恵の花恵は則看官の恵を祈る發端六册全傳拾遺の實入にならつて粹なる人の氣にもいり鹽梅のよき御評判をいく枝にも願ふことになんありける

金龍山下狂訓亭

申の孟陽

爲永春水誌

春の恵色

梅ごよみに猶

愛敬を添へんとて

香をふくむ梅の恵顔も春風に

ほころびて匂ふはなの口紅

乗合の袖の薫りの梅が香を

むかふへわたす隅田の船長

琴通舎英賀

春色恵の花巻之一

江戸 狂訓亭主人著

第一回

萬葉集に花といへば梅の事ぞと定められし櫻を花と稱するははるかに後の事ぞかしそは兎も梅が香のかほりを戀ふてゆかしくもこゝに説おこす一回の物がたりはむかしのことにして鎌倉の北の方にいと賑はしき五街一廓ありけるが其中に唐琴屋浦右衛門と聞えしは廓に名たる青樓にて繁昌いはん方もなく殊に仁慈のこゝろ深く抱へし遊女を我子のごとくいたはりて不便をくわへそだてけるがいかなる前世の約束にや種々の薄命かさなりまた他の業にて損失つづきわづかの間に内外の不都合となり浦右衛門はこれを氣やみに世を去りその妻お賤といへるもの萬をまかなひ月日を過せしがいよく内証むづかしく借金のみ多くなり心をいためありけるが養子丹次郎といふものあれど元貴人の種にして生得心やさしきばかり利をむさぼる事はたゞ賤しき業と思ひ慈悲ふかければ何ごとにも哀れ不便が先に達敷きて無心などいはるときは親疎を論ぜずこれをすくひ徳を積こと數々なれども當時は損失多くなりて後の榮

へを看まては婢俗のそしり少なからず土地に似合ぬ母子の仁心がかへつて唐琴屋の衰とはなりしなりされどさすがに家業がらにて表をかざる廓の意地娘お長に踊りの稽古また浄瑠璃の稽古にも連立抱への宅唄女三人あるがかはりはりにさし添通ふぞ立派なれ今日も稽古に立出る時刻は巳刻を早起と自慢は廓の人の常長谷の觀音の中見世を通りながら藝者勝次お長にむかひ勝「お長さん此間の人形の似貌は出來ましたかへ長「イ、エまだだは芝蕪ならば他へ遣るの

来たのだ。米「そんなにお長さんがこわいかねへ。丹「こわいわけもねへが勝次や何か口がやかましいはなぞして母人さんがいろ／＼身上の事で氣をもんてお出なさるのに榮耀らしく遊んで歩いてもわりいはナ。米「それだからモウ私をやめてしまつてはやくお長さんと御婚禮をなさるが宜こさいます。丹「さうかそんなら左様しよふが手めへどふする米「どうもしませんは。丹「いゝ心あたりでも出来たか。米「こゝろ當のねへでもねへがまさかそんなにしたくもないのサ。丹「ナニ／＼遠慮はないから勝手にするがいゝトいはれて忽ち米八はくやしそなる顔色にて。米「わちきの勝手にしようといふのではありませんがおまへさんのお爲にならない事をくよく／＼と思ふ中へ今のやうにおいひなはるからさ。丹「そして手めへはどうするといふのだ。米「死んでしまひますのサト云はなして涙をこぼしうつむいてあるさしが跡のかたへ引歸すそも／＼米八が生質かゝる奉公するといへども正直一途にして心やさしくまた發明なれども此年ようよう十七歳なればなか／＼唄女の風にあらずたゞの娘のこゝろにて其中にも抱へられたる主の息子なればすこしは奉公人といふ遠慮もありて愚智の出るも無理ならずされど今日は思ひきつて我まゝにすねて見せるも戀の智恵けしきをかへて早足に跡へかへるは身でも投るといふ風情を口にはいはて丹次郎にそれと思はする手くだなり丹次郎もすねるとは知りながら米八の跡をしたひ人目を憚りつゝも前後見て。丹「コレサお米／＼ライ米八コレサ／＼ト付てゆく子供喧嘩に等しけれどもこゝろが戀路のならひにて理窟も道理もこの道は別なるものといふ事はかならず諸君のごぞんじなるべし。

第二回

丹「ライ／＼儀助や今のものを平岩へそう言付て置いてそれからちよいと向ふ越をしての。丹「これはつだづみよりさんや眞乳山の表門の際に花井觀光さんといふ人相を見る先生の所へこれをもつて往てどうぞお願ひ申ますと言て見て貰つて來

て下せへ。儀「ハイ／＼ト墨色の一字を書たのをうけ取出てゆく。米八はせんこくより。米「若旦那こゝの宅は何てございませすへ。丹「こゝは百姓家サ。米「どうして知つていらつしやるへ。丹「ナニ今の親仁は養父さんの時分に居た臺所の下ばたらきをした男でして毎時街へさうぢに來るは米「ヲヤ左様さいますかさつぱり氣が付ませんは獨身者かへ。丹「インヤ鼻は土手の際へ團子茶やを出して居らア。米「ヲヤさうてございませすか。丹「そりやアいゝが手めへ今途から何處へゆかふとしたのだ。米「川へでも飛込ふと思ひましたは。丹「べらぼうめへとき／＼狂氣を起しやアがるそれほど死たかア殺してやらうサアこゝへ來ねへト手を捕へて引よせる折から村の若衆四五人。わかいしゆ「ハイおたのみ申ます牛御前さまの月集でございませすトいひながら臺所の土間へどろ／＼と這入るゆへ米八はビツクリして飛退丹次郎も周章で立出。丹「ハイ／＼只今留守でございませすが何なら私がつて置ませういか程でございませすか。わかいしゆ「ハイさやうならばまた參じませうそれとも下されませすならば六十八文つゞてござります。丹「そんならば亦おあるきなざるも御面倒だらうから私が出して置ませうト出してやれば村の人々禮をのべつゝ歸りゆく。米「ア、引びつくりした。丹「ナニびつくりする事があるものか。米「それでも大勢來ながら足音もしませんものを。丹「それはそのはづさ土のやわらかいの雪踏ははかすみんな草履だからヨトひながらまた米八の側へよりしがあたりを見て庭へ立出藪垣の入口にある無細工なる竹の木戸を押し繼にて柱へ結びつけて元の席へ入り笑ひながら米八を押し倒してわき指を抜持。丹「サア死たくば殺してやらう。米「ア、嬉しいはサア／＼はやく殺しておくれその方が氣がもめなくつてよいト脇差の下をくぐりて笑ひながらしがつく。丹「コレサむやみな子だぜあぶねへト脇差を片わきへほふり出す米八は麥藁細工の多葉粉の篋を枕にする所へ此家の女房は亭主が言つけたると見へ片手に茶の土瓶片手に焼團子もちて脊戸の方なる柂木の垣根の破れをくぐりて臺所より入來りしがおどろきて。女房「これはしたりマアあなた方は双物を抜てトいはれて二人は亦ぎやうてんうろたへながら丹次郎。丹「ナニ／＼じやうだんだ／＼それはいゝがおめへは見世をあけてどうして來

り米アイどうせ通り道だから畑のお津賀さんの所へちよいと寄てもおそくはありませんヨ 丹延津賀さん所へ往たら 米お長さんにも清元を教えてくれろといふ言傳かへ 丹べらぼうめへエ、なんだつけろ、それ／＼兼さんに此間の月並の摺本はまだかといつて聞てくんなをしてあんまり長く居ちやアわりいぜ 米ナニサ辨天さまの御靈像をいただいて貰ふはづだからそれを聞ておきに歸りますヨ 丹さうかそんならばいそいで歸んねへ 米アイト丹次郎の貌を珍らしさうに見て莞爾と笑ふそのかわいらしさ丹次郎が眼には衣通姫も小野の小町もこれには過じと思ふなるべしだきよせたきをこらへて 丹サアきり／＼いかねへか 米アイそれぢやアきつとてございますヨ 丹なにを 米アレサ今のことをサ 丹ム、上谷町のはなしか承知だ／＼ 米だましちやアいやでございますヨ 丹しれた事ヨトち別れるをまた引止め 米アレサマア 丹なんだト寄添折から畑より土菜を擔ひし人來れば米八は丹次郎が手をちよいとつめり笑ひながら早足に別れゆく

春色恵の花巻之一了

春色恵の花巻之二

江戸 狂訓亭 主人 著

第三回

こゝに唐琴屋のおゐらん此糸が深く契りし半次郎といふものゝ其なれそめをたづぬればまだ此糸がこの廓へ來らぬまへに半次郎と思ひあふたる事ありてそれがたがいの縁なれとかはらじものとやくそくも變るならひの世の中に儘ならぬ事もありしゆゑたがいに程を隔たりしがまためぐり合て命もと深く心を通ぜしなりそも半次郎は武家の種にて正しき身分にありけるが繼しき母の悪みによりて爺親へ讒言なし番場の町の庄屋なる中野郷造といふ縁者の許へあづけられしばらく閑居して在しころ鎌倉の町の大火によつてこの庄屋郷造の許へ逃來りし親類三四人ありけるがその中に十六七歳の娘あり姿形容のうつくしき事たとへるにももなくまた心さまもやさしくて實に絶世の美人なりこの節半次郎は二十三歳の當世風の息子にて女にすかるゝ容體なりしがたがひに思ひは内心にあれども遠慮がちにて過せしが或るとき家内は不殘他行かの娘お糸といふものと半次郎のみぞ留守居をなせりその日は夕方より大雨にて嵐のごとく降ければ出行し者もかへり來らず主人郷造さへかへらざる由を我門通る人に言傳なしたり夜に雨は雨はいよ／＼はげしく詮方なければ半次郎は表の木戸より玄關臺所諸方の雨戸に／＼をなし要心をよく念入れて座敷にいたれば彼娘も勝手しれたる家内まご／＼しながら其邊を片寄あんどをてらし油を次居る所へ半次郎はやう／＼と手を洗ひ拭ながらこゝへ來る娘は少し笑顔にて 糸まことにモウ／＼勝手がしれませんかからどういたしたらよからうとぞんじま

すヨ 半「イヤモウ出しぬけに留守居をさせられるものだからおたがひに大まごつきサヤウ／＼の事で諸方をへてしまひやしたトキニマア大そうにつよい降だ子へ 糸「まことにこわいやうでございませすヨ 半「何か怪物でもするのでございませうマアどうも仕方がないから今夜は早く寝る方がよからうといった所が自分々々に此方の座しきと遠方のざしきへ一人づゝ寝るのだからどうか少し氣味がわりいやうだトあたりを見まはすお糸も火鉢のそばへすりよりながら身をぶる／＼とふるはし 糸「ほんにこの様な廣い宅は人がすけないと隅々が見れるよふてこはふございませすヨ 半「さうさとして鎌倉の中とちがつてこゝは半分田舎だから人がすけないと直に狐や狸がつけ込で出て来るしまた舊家には物の祟や恨の念などが在てわるくすると幽霊なんぞが出たがるものだからまことにモウそれが否さねトさも氣味わるそのうにいふ 糸「イヤ／＼氣味のわるい實正でございませすかへ 半「ナニ大ぜい人が居ると何の事もないがさみしい陰氣な所へつけこんで出るからこまるのさトまじめにいへば娘はおど／＼にわかには脊中のかたを見かへりて 糸「イヤ今なにか奥の方で音がいたしましたヨトいふ顔いろあどけなくもかわゆらし半次郎はわざと身を縮め 半「エ音がしたとへアアいやだ／＼ 糸「どういたしたら宜ございませうぬへ 半「左様さどうもしかたがないからマア觀おんさまでも信心して居るより外は仕様なないのサイヤ何かわすれたと思つたらお夜食をまだ給ないやつさ 糸「ほんにねへ雨のさわぎとこわいのでお飯のことも忘れて居ましたはして何が何處にございませすか私には知れませんけれどマアお臺所へまいつてお膳の道具をたづねて参りませう 半「ドレわたしも往て手傳ひやせうナニ／＼何でもかまはず引ずり出してやらかすのサどうも仕方がねへ 糸「ヲホ、叔父さんや何かとお歸りなざつたら叱られませう 半「ナニかまふものかこわいから夜通し起て居たゆゑ何も角も喰てしまつたといひやすト笑ひながら二人して勝手の方へゆき膳茶碗その外飯菜の品々をたづねだしやう／＼と座しきへ運び茶をほうじて土瓶にいれ 糸「わたくしはよいがおまへさんのあがるものがないからわるふございませすチへ 半「ナニどうもしかたがねへどれといひつゝ蓋物を不慮あけて 半「イヤ／＼鐵火

味噌に坐禪豆梅干こりやアなんだ鹽押のなすびと二荒とうがらしかまるで金山寺やが荷をおろしたやうだ 糸「ヲホ、ホ、それでも納豆はありませんヨ 半「イヤわたしは何よりのおかづがあるからいゝ 糸「イヤおまへさんのお菜があるならばそれを少し私にも下さいませ 半「わたしはあげたくつてもおまへの方にあるのだからどうもしかたがねへ 糸「イヤ／＼私のはうには何もお菜を隠して持てはをりません 半「イヤ、エ澤山ありやす 糸「何所にへ 半「コレこゝにありやす何より美味愛敬をもつてお出じやアないかわたしはそのかわいらしいかほを見ながらお飯菜をたべれば蒲焼も玉子もいらねへおまへは氣障だらうが今夜ばかりは雜交膳でたべておくれ此様なことは亦とないからトをみふくんで少ししじめにいへばお糸ははつと貌あからめしが思ひ切て 糸「おまへさんこそその人愛て諸方の娘や女郎衆をお迷はせなさるだらう 半「此方ではかりまよつてついでぞ女の方で迷つたことはないのサ 糸「啞ばツかりト笑ひながら半次郎の茶碗へ茶をかけ 糸「サアお茶をかけましたヨ 半「オヤ／＼これははゞかりア、美味々々どうぞすこしの間でもいゝから斯して食事を喫たいものだ 糸「おまへさんの好女とかへ 半「さやうサおいとさんといふまことに／＼かわいらしい娘ごさしかしおよびもねへことだ此様なことをいつて氣障がられるよりあきらめてはやくおまんまを喫てしまはふトいへども娘は心のうちなんとあいさつしてよいやらまたなぐさみのじやうだんにいふやらしれぬ男の心なまじいなる返事をしてさげしまれんもはかられずと用心すれども惚心かほにあらはれて何となく溜息をつくその中にまんざらでなき戀の情自然と知れて半次郎が心のうちに悦べどまさか手出しもならざれば言葉途ぎれてさし向ひやう／＼食事もすみけるが雨は漸々につよくなり風吹あれてすさまじく雨戸に當り植込の木ずをならし鐘の音も遠近にしてものすごくうしろ見らるゝ片明り淋しきまゝに揺立る瘦燈心に數をまし百物語にあらねども底ごゝある半次郎は化物ばなしの實録らしきを二ツ三ツ四ツかぞふればはや子刻の鐘きこえ間が悪けれど娘氣のこわさに絶兼男にむかひ 糸「半さんお否でも今夜は此おざしきへ私の床もしかして下さいませしヨ 半「どうぞぞそうしておくんなせへ何だかうす

奥に開ゆる淨瑠璃もこれ此糸のつち占とも知らねど新造糸花が好た男と一言のうわさもこゝろにたのもしくやがて
一間をさし覗きピツクリおどろく胸のうちはや涙ぐむ女の情おもひ亂るゝばかりなり
これより一間に入るさまは次の五回にくはしくしるす

春色惠の花巻之二了

春色惠の花巻之三

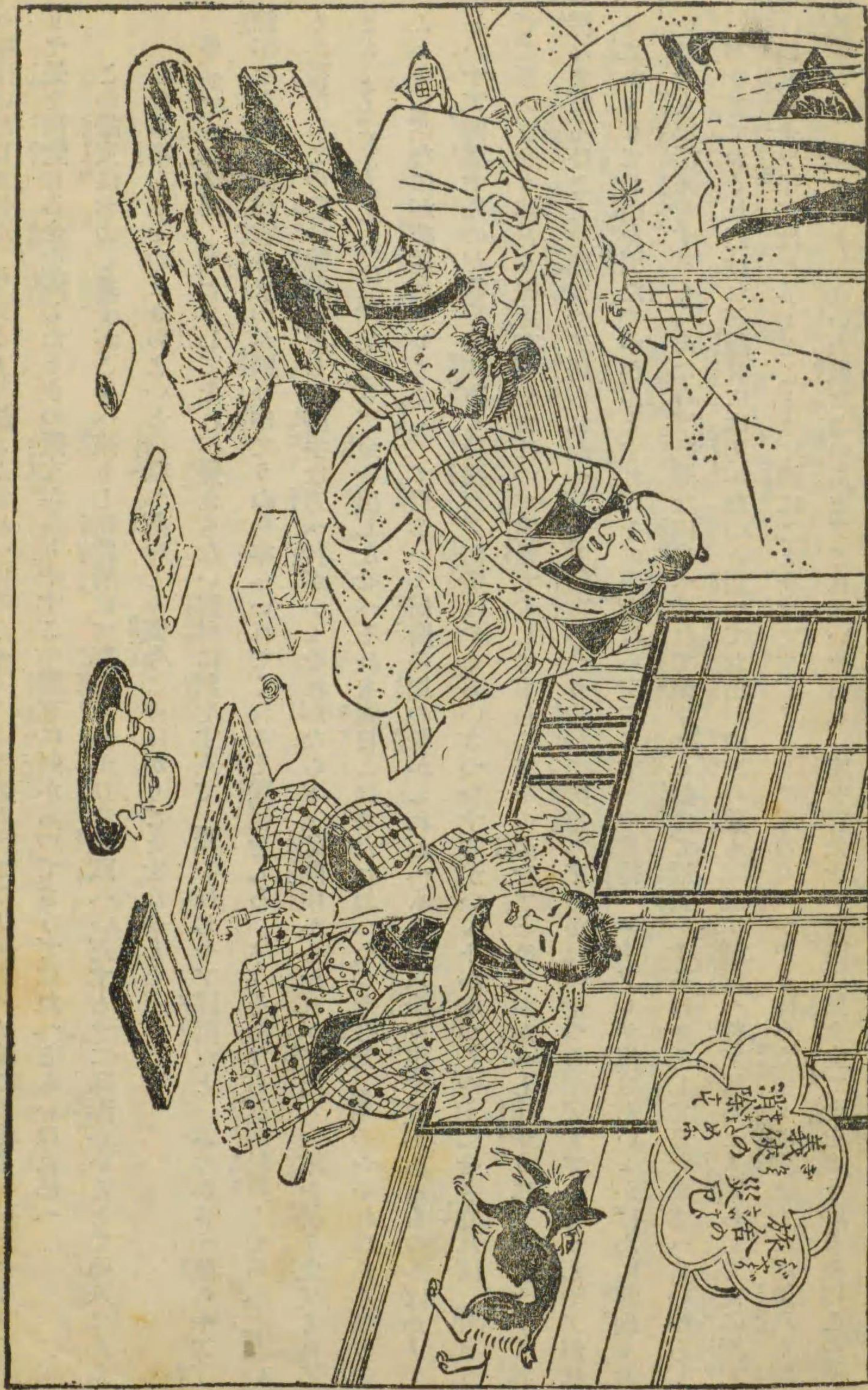
江戸 狂訓亭主人著

第五回

そも吉田屋よりおくられて此糸名ざしの初會の客は番場にありし半次郎久しく田舎行たりしがこのほど僥倖なる事
ありていさゝか都合も直りしかば田舎より鎌くらへ立かへりお糸が身のうへをたづねし所薄命ゆゑ憂つとめ今は唐琴
屋のおるらんと此糸といふ全盛にてさとに名だかき指折なりと聞て心にこゝろよからず思へど人の吉祥不祥さだ
めがたきが常なるによんどころなきことよりして遊君契情となるものを貞女ならずとにくむのは屈かぬ此方の勝手づ
く便りなき身とすゑかけて頼まれしこの半次郎が田舎へゆきて音信もせざりしゆへにさぞかしな恨みもしけん戀しく
も思ひしならんと尋ね來てそれとはいはず初會から廻し座しきの淋しさをこらへて宵から待たびし〇〇〇〇〇あんど
うを枕元にひきよせつゝ懐中硯をとりいだし鼻紙ひらいてむだがきの姿を障子の外面よりしてさし覗きたるこの糸
が飛たつばかり嬉しさをまた恥かしき此姿たとへいかなることありても操を破りて多くの人にまみゆる事はせぬはづ
とはらたゝしくもあらうのに心ながくも宵よりしてやさしき噂は糸花が知らせに聞いていとゞなを戀しさまさるその人
とも思ひがけなき半次郎ゆへなからはなしてよからうやら別れて後の過越かたもまた今さらに悲しさの數をそえた
る女の氣胸に一ばいせき來るなみだこらへかねては聲たてゝむせかへりツ、障子の内へまるびいりしが床の側 此半
さんまめで居なましたかトいふたばかりに泣伏せば半次郎はかねてより承知ながらもびつくりししばらく言葉もなか

作者曰この類の事は春雨日記にもしるして後人の用心とはなせり今太平の御代なれど利欲のためにおのづから燈臺の元くらき愚痴に迷ひ千金を尊しとせぬ繁榮の市中を捨高利を求めんとする心よりその手筋のものにたばかられ旅へ家業に出て田舎人のために身をいやしめられ損をなしてくやしき事に出會ものすくならずされば鎌倉の美婦をつれ出しそれを餌となして金銀を双方よりむさぼる曲もの多しかならずくだまされて繁花故郷をよそよそしく旅へ活業に出給ふな男子は格別娘御達の藝ある方々はくれぐれも要心ありたきことぞかし

さて土屋に逗留の唄女およしは爺親と二人さしきにさしむかひ今日しも雨のつれづれにいとどわびしき中庭より空を詠めて哀れげによし爺や林雨とやらになるといけなふ親さうヨたどさへ旅はつらひといふのに金はなくなる活業は出来ず他の宿へゆくにはこゝの借財を拂はねへけりやアならずどうもこまつたものだよしそれに此間は傳八さんが種々な事を言てこまるヨ親さうかこまることだのどうぞしてこゝを早く立てへものだといふ折からに彼傳八さん聞なせしか出し抜に障子をあげてずると這入り傳八さんおめへ等アむしのいゝ事を相談するなふエ、コウ左様うまくはいかねへぜ櫻の傳八が相場をつけた女をたゞ通したことはねへぜよしオヤ／＼をかしいねへ傳八さん何もう相談をしはしませんヨたゞ活業が出来ないから自由になるなら他の宿へ往てかせいでそれからまたこゝへまいつたら丁度よからうと思ひますからその咄しをしたのでございませすヨ傳八さんやアどうでもいゝサどうでもいゝがこの間の三兩の金を月またぎで三月になるから利が三分世話賃をいれて四兩にならアその勘定を今するがいゝそれに宿の方にも三兩ほどはたごちんがたまつたといふから此傳八が口入のことだからはらせねへければならねへ兩方て七兩だアきつい事もねへスア其勘定をしてもらひやせうよしエトびつくりする親モシあの金が利ともに四兩になりませへ傳八さんヨそれに松戸の親方にかりた金だから日限が極つて居らア今日勘定をしねへけりやアおよしばうを松戸へめしりにつれてゆくと言ておらが宅に待て居らア親八さん私どもは其様なやくそくであの金をおか



り申はいたしません 傳「ワイ、爺さんおめへはそのやくそくを忘れたかアしらねへが此方は證據がとつてあらアソ
 リヤ是を御覽じろ金を渡したときの證文がありやすこの證文に判があつてさうではねへともいはれぬへ
 この證文はおよし親子がこゝへ來りし時當所にて興行のねがひを地頭へい出すときに印形がいて傳八にわた
 したる事ありそのときちよいと白紙へ判をとり置今このはかりごとをなせしとぞ

傳「サアどうだ 親どうしてそれが覺えもない書付に判をすゑて 傳「それぢやア謀判だといふのかさう聞ぢやア了
 簡がならねへ御代官さまへお願ひ申てうぬを牢へ入れてくれるぞ覺悟をしろ よし「そんなら私が松戸とやらへ 傳「い
 くが否ならこの宿の總勘定をして勝手な方へ行がいゝそれがならざア此間中からおれが言出した事を貌を立てくれる
 ともよし「どうもそれは傳「ならざア金を出しなせへそれも明日とはまたねへたつた今だ 親「モシそれはあんまりな
 ことを 傳「なにが非道だコレよく考て看がいゝ何所の馬の骨かしれねへものに只金を出す奴があるものかばかゝ
 しいサア何様するのだ松戸の親方も待遠だア何道はやくあいさつをするがいゝトかみつくやうにせき立れば 親「さう
 でございませうがどうぞ近在でもまはつて座敷でもしてもらつてその金をまとめておかへし申やうに 傳「イヤゝ其
 様なまだるひことを聞ぢやア居られねへどうて諸方わたり歩行て美言ぢアいかねへやつらだアサアゝゝしやアがれ
 ト立かゝりてお由を引たてゆかんとすればその手をはらつてさすがの生得 よし「アレサ傳さんいゝかげんに無理もお
 いひな女郎活業をするくらゐならば此様な田舎へ流れて來ずとも鎌倉で活業をするは子そしてまたおまへもいやらし
 い事を言ておくれだけれど鎌倉には男がないと思つてお出か山家の猿も二三年鎌倉へ往て居ると人間らしくなる所だ
 はね其繪土ツ子がはるゝとこゝまで男にことを欠てまごゝしに來るものか手トはら立まゝに言まくれれば傳八も憤
 然となり 傳「ワイゝきいた風なこのあまアこれへいやらしい事を言たナア當座の興よ女で金をまうけるのはこの傳
 八が活業だアコウ爺さんおめへ親の役だアどうともかたを付るがいゝ 親「いづれどうかいたしますがマアしやうばい

をいたしてから 傳「エ、イむしのいゝ其様なきのながいことを待れるものか金が出来ねへければ手足をしばつて抱て
 寐るとも女郎にするとも二ツに一ツ理をつけねへて置ものかサアどうするのだうしやアがれト遠慮會釋もあらくれ男
 親父を突退およしを引たて既にさしきをつれ出さんと腕まくりして傳八がきそひかゝれば親子の難義口惜ながら馴染
 もなきこの旅宿のことなれば争そひ勝べき道理もなく殊には金づくさしあたり途方にくれたるおくざしきの隔紙あけ
 て此中へ別入る一人の繪土氣質勇壯はだなる富者株 旦那「まづしばらく傳八をしづめて其座になをりける
 そのこの人は何者ぞいつも久しき筆癖ながら第四の巻をよみ得て知るべし

年毎に恵の花やまたひらく

襟のこよみを雪の夜著述

金龍山人狂訓亭

春色恵の花巻之三了

春色惠の花二輯の序

勅なればいとまかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞたへん。紀氏の才女が古事は彼相國寺に美名を残す鶯宿梅それ曹操の先途の梅は口を酔する軍務の早即鹽梅の臣とは執事の古名そも梅曆を開版て文永堂が常に吉日良辰となりしことは是看官發賞人遊行の袖にも携へられてよく見南枝の御風聽御ひいきの香を傳へて萬家にもてはやさるゝは貸本屋家の軒端の梅追々繼穂の賞言それが作者の幸福と成て寢初は裏家中の郷ちり塚の傍邊に實生の趣向今は辰巳の園にうつして粹な尊に實入もよく前後八編の梅曆またも餘蔭の種を下して六冊となせし陸の花その雪中の寒紅梅色香も深き溪齋が筆にも穿し髪を風眼前と流行五分も透ざる新著の魁惠の花由可里にたよる御縁日の植木屋ならて室咲の根は覺束なき鉢を並べ此花を召せ給へ求め給へと一向に袂を引て願ふになん

于時天保六未初冬來陽を待新板にとて筆を狂訓亭の東椽に採れたる意懈先生東都人情物の本を流行初し作者の元祖

南仙笑楚滿人六年以來改名してますく發行の詮索家爲永春水の需に應じ此卷中では初編よりおなじみ深き辰巳の小庵稻荷横町の南窓に

櫻川由次郎謹誌

春色惠の花二編上之卷

江戸 狂訓亭 主人 著

第七回

さてもお由が難澁の中に立入る其人は弱きをたすけ強を折じく生質を得たる東男千葉の藤兵衛といふものなるが最前より奥の間に始終を才聞傳入が非道親子の當惑不憚に思ひ哀れみてさしかゝりたる金をのこらず立かへ其座を濟して傳入が悪計を除れさせ早々當所を出立すべし路用もかして不自由させまじと残るかたなく親切に世話をなしければお由はさらなり親父は藤兵衛をふしをかみこれしかしながら常々信心する成田山の御利益なりとてはるかに成田の方を拜禮し猶およしと相談して今夜は御山に通夜をなしいよく神徳を蒙らんとますく降來る雨をいとほす櫻の宿を立出て不動尊へと參詣をしたりけるされば此夜およしをば藤兵衛にたのみ置しが藤兵衛も雨天にこまり逗留せしことなれば一日二日はこの家に遊ぶころゆゑおよしを預り宿へもその事をいひきかせしに土屋のあるじも元來心よき者にして傳入の悪たくみを心にく思ひ居たることなれば藤兵衛が男氣を悦び實は旅宿錢も藝人の旅かせぎなれば半減にて傳入との相談なれば半分にてくるしからずと正直なるはからひ別だんに酒肴をこしらへ藤兵衛をもてなしければ藤兵衛も宿へ祝儀をつかはしおよしを相手に酒をばくみかはしけるが既に其日もくれゆきて雨は次第に降つとき物さみしさいはん方なく世間もしんゝとなりしゆゑおよしははづかしそふに三味せんをとりいだし由おまへさんにおきかせ申のは不躰だから内證てひきますヨトしのびごまにて

淨るりへけふのごげんの初昔悪性ときいて此胸がおほろの月や松のかけわたしやおまへの政所いつか果報も一森とほめられたさの身のねがひはほれ過るほどぐちな氣に心の底のしれ兼てはじれつたいでは無か

いな
ト小聲ながらもうるはしく唄ふ節さへ三味せんさへなかく未熟の業ならず藤兵衛つらくお由を看に田舎あるきのくはせものすれツからの旅かせぎ藝も丹田綿紬とはじめは思ひたれどよく見れば自然と艶ある本結城ひけらしたる厚化粧にあらで素貌のうつくしさどうしてこんな藝人が田舎へかせぎに出しやらといぶかしければおよしに向ひ藤トキニマアおめへ達親子はどふして田舎へ出たのだへおめへの藝なり容儀といひ鎌倉の中にも澤山にはねへ藝者何もわざ／＼こゝらまで出て來ねへでもよさそふなものだが何ぞ鎌倉に居にくひわけでも有ての事か色男の手を切に土地をはなれねへじやアわりいとかいふので出て來たのかへ申イエ／＼どふいたしてそんな事ではございませんよとおとつさんが薄命でございませぬから唄女でもしてとおもひ付ましたけれど藝はほんとうでなし衣類はてきませずどふも鎌倉では兎でも世間が立派だから其中へはづかしくつて出られませぬゆゑマア田舎へでもと申てこちらの方へ出てまゐつたのでございませぬ藤じつにさうなら氣のよわい事だ斯いつちやアどふかせじのやうだが誠ににおめへぐれへな繪土唄女はなかくゆびを折てかぞへる程はねへぜ何田舎へ出る事が有ものかチツトはかりだがおいらが繪土でおめへに近付になつて見たがいゝそれこそ立派な立者にして見せらアなんでもマア鎌倉へかへつたらおいらをたづねるがいゝなぞと通人めへた事を言やうだが彭簡にも唄女にも相應に近づきもあるしまた友達の座敷をつとめさせても一日に二會や三會はなんでもねへぜ請させるやうだが櫻川の由でも新孝もおいらがひいきの唄女だといやアまさか川向を通る人を見るやうにやアしねへぜ繪土ツ子どうしが土地をはなれてこんな所で心やすくなるのも何かの縁だらう是非おれが一肩いれてやるふからとつさんにさういつてはやく鎌倉へかへるがいゝといはれてうれしきおよし

が心どふしてこんな頼母しい人と此家に泊り合して難儀を退るゝのみならず今よりするたよりにもとさも親切なる男氣にほれ／＼とすれど遠慮しておよばぬ事といく度かおもひなをせど凡惱のわれからくるふ心のこま亂れそめにし娘氣の看まじとすれど貌ながめ溜息をつくその風情かの藤兵衛もそれぞとは知つて居ながらよそ／＼しく藤でへぶあきたやうすだサア寝て休みなせへなんだかおいらもじれつてへやうだサア寝よふ／＼大きに心なく意屈をさせたのふ申アレたいくつしたの倦たのと言のではございませぬヨトすこし涙ぐむ藤ヲヤ此子は泣のか何ぞ氣にさわつたか申イ、エどふいたしてさうではございませぬが藤出すぎて何かをさばいたのがくやしいかへ申どふいたして勿體ないなかくさういふ氣ではありませぬヨあんまりお前さんが信切におつしやるからうれし過て何だか悲しくなつたのでございませぬ藤なぜ人に信切にされると腹の立やうな心持かへ申アレさうではございませぬが是まで一人もあなたやうなお方に出合た事もなしどうぞと存じましても私のやうなたらはぬ者は直にあいそがおつきなされるだろふと思ひますとそれもまた苦勞でございませぬト愁いの貌にて藤兵衛を見る眼はいとゞかはゆらしく又藤兵衛が心の底にほれた欲目で思ひはかればもし此むすめを今一際みがきをかけて存分なる好みの衣裳を着せたら辰巳に名高き唄女でも折江町の何某とてもなかくこれにはおよぶべからず自由にならばまづ此所にて着替たいと胸の中に詠へる氣の一重ね

極上あつらへ織の白七子を御納戸の紋付に染め江戸襦袢様にこぼれ梅紅白の上繪彩敷銀糸にて松葉をちらしに縫せ野暮なるやうでも細密なるもやうにすれば御納戸に松葉の銀糸も古風に見へず梅の色どりも紺屋でならず畫工英泉の筆意を頼み下着は縮面鼠のさや形これは大きめだつくらゐの中帯は花色勝山に色糸をもつておらんだ模様を立島のごとく縫せたらば類がなくつてよかるふか黒のごろふくに雨龍の飛形をすがぬひにさせたらばどふだろふと流行穿つ心から粹な苦勞も樂みか岡目で思はゞばか／＼しからずや

けいこをしわへか ▲「イヤじやうだんじやアねへい、藝者だまづけんばんにあのくれへない、女はねへぜ大かた辰巳
 だらう×「インニヤいたちかもしれねへ ●「ねこだろふぜ×「なるほど猫の縁ははなれねへの ●「にやんと違へ、有め
 へが ■「まだか〜い、かげんにしねへな ▲「しやれじやアねへあんまりい、女で氣にもなるの ●「ム、ウしれた〜
 唐琴屋の内唄女だろふまだ年のいかねへ發明らしい顔の女だぜ ▲「さうヨ〜まことに言ふんのねへ女だが隣の家へ
 なにしに來たるふ ■「へん其身々々にきいた風な口をきいても世間の穴はさぐられめへおいらはその女の好男まで知
 つて居るぜ ▲「サア〜それは知らねへてもい、からモウチツトけいこをやらかそうじやアねへか ●「さうヨ〜
 ▲「モウ日限がなくなるから氣がせいてならねへ ●「きがせいて。それだからせかねへ日にやア思ひやられるぜ
 ×「夫こそすこしもできめへ ▲「おめへの色とおなじ事だ ■「またまぜる種をまくのかサア車輪でやるぞ〜トまた
 つきかゝる粟もちのけいこのさわぎ賑やかなるそれにひきかへ隣の二階しんとしたるさしむかひ家内の人ははづせ
 しなからかの唐琴屋の米八は男のひざによりかゝり額をおさへてすこしうつぶき 米「ア、いそいで來たらせつなふ
 ざいますは、いひながら丹次郎の貌を見ながら 米「ヲヤおまはん酒をおあがりか 丹「ム、さつきからまつて居るのに
 間がわりいからちつとばかりつまらねへものを取てもらつて一人で猪口に三ツ四ツのんだがナゼぞんだ 米「ナアニ
 顔があかいからサ 丹「あんまり又ながいじやアねへかおいらアモウかへろふかと思つた 米「それだつてわちきも誠に
 誠にじれつたくつてならないけれど藤さんを大門までおくり出してしまつて來ないといわゆるいから 丹「山しろ川岸のか
 米「ナアニ津藤さんは此頃じやア近所にかかはい、人が出來てさツぱりこつちへは來なさいませせんは 丹「さう
 かそれにしても長かつた 米「それでもどふてもおもふ様にはなりません子おいらんは今夜アあんなにおちあつてい
 るもんだからきげんをわるくかへしてしまふとわるといつているもんだから新造衆や何かを大勢つけてよこさしつ
 たものを首尾よくおくり出してしまはないとまた何だの角だのとやかましいからどんなに氣をもみましたろふ堪忍し

ておくんなさいナ子へ 丹「そして出て來る時鬼兵衛は内所に居たか 米「ア、ゐましたよそれだが私きやア藤さんにつ
 いて出たからい、がおまはんはい、かねへ 丹「ナニおいらアおツかさんの用で出たんだからまだ歸らねへとおもつて
 ゐるからい、のサそしてみんなは宅へけへつたか 米「ア、けへりましたが私きやアまだ仲町に居るつもりにさういつ
 てやつたからよいヨ 丹「さうかそんらい、ト横になる 米「しかしとなりでみんなが見て居るだらうとおもつてまこ
 とに這入にくかつたが子はいつて見るとうれしひねへトいへば丹次郎はにつこり笑ひ 丹「さうだが今朝はまことにび
 つくりしたツけなふ 米「ア、子エまことにすこしの間だつねへ 丹「おいらア○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○ゆふべ釜をかけた儘ておいたのをかたづけに往うとおもつて○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 米「オヤ
 ツイもよいねへツイは私きがいふことだは子エ 丹「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 丹「それでどうした 米「それから
 ○○○○○○ 丹「あのもねへもんだア○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 丹「それだつたものヨ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 いろ〜に逃口上をいつたじやアねへか 米「ナニにげ口上をばいふものかねへそれでもこはかつたものヨ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○ 丹「ナアニおいらアすぐに藏へいつてしまつたからよかつたあれはほんに思ひもつかなかつたおめへはよんどころな
 しだらうトわらつて居る

春色恵の花二編卷之上了

を着替て部家の次の間より丹次郎の貌をちよいと見て 米「まゐりますヨト小聲にていふ丹次郎も傍を見ながら 丹「ヲイト返事をしながら線香を立るたゞ一言の間答もおほき人目の關の中思ひは深き戀情なるべしさて又表二階には此糸の客藤兵衛居續けと見て本間のれんじへちよいと腰をかけ黒ぬりに金時繪をせし大なるはんぞうへ貌をうつむけ楊枝をつかつて居る中の間には番頭新造鬼面火鉢の大きなるを二ツならべて兩方の灰をきれいにして櫻炭をつぎながら はん「此里さん本間の火鉢を入れておくなんしそして次の間の火鉢へも澤山炭をついで銅壺の涌様にしておいてくんなんしヨこんな花野や藤さんのうがひ茶碗をもつて往たかヨきり〱片付てしまやヨトいひながら中の間の火鉢を直し はん「此里さんサア片方引ておくなんし 此里は二はんしんぞう也本間の床の間そのほちがひだなくゑのかざりつけをのこら手片づけながくるはのなら 藤「この火鉢をこゝへもつて來るといつて大さはぎをやつたのかト笑ひながら居る 此「ヲヤ藤さん蒲團の上におすはんなんしな 藤「ナアニおいらア野良の撫牛といふ通り句はきらいだサア〱酒にしよふじやアねへか 此「ヲヤさうさますかそれじやア蒲團をあげてきれいにしよふじやア有ませんか 藤「さうヨ〱さうしてもらはふ今にまた末社が來ると大さはぎだから 此「こんな花野や吉兵衛どんを早く呼んで來て床をあげさせやそして吉野はどうしたのヲ誠に〱ながいよウトいひながら次の間へ立出 此「ヲヤさしきじやアことなり 何の間に湯から上つて來さつしつたへうがいの水はありますかへじまをしながら 此「アイいま上つて來ましたヨ水も有ますが子藤さんはへ 此「藤さんは子今楊枝を遣つてしまはしつたばかりさますヨマアはやく身ごしらへをしておしまひなんしヨ 此「さうさますか私きやアもうじツきさんすヨ米さんは來いしたかへ 此「イ、エまださますヨ何をして居るだろふ内所の貌ばかり見たがつてこれは丹次郎の 此「アレサそんな事をおいひなんすな何だかしれやアしませんは子。マアちよつとサト此里の耳に口をよせ 此「子。子ト何か囁く

これは米八と藤兵衛とわけもあるやうに思はるゝとのはなしにて此糸が兼て米八との云合せとしるべし

此「子それだからあれよりやアその方があやしうござんはアなはんぞうはきもをつぶせしか 此「ヲヤ〱さうござんすか私きやアうツかりさます子ちツとも気がつきませんヨマア〱 此「アレサまたそんなことをいつちやアわるうござんすヨ 此「ナアニそんなことを けつて米八はにっこりとわらひ 米「おいらんトいつたばかりに立て居ると 此「ヲヤどうしたんだよ米さん何をして居るだろふそんなにつくらずともいゝよはやく來なましマアこつちへはいらねへのかヨ 米「ほんにさうでございまして居るだろふそんなに中に斯うかれてはをかしひ子 此「いひながら手つとはいつておいらんのかやう 此「マアいゝよはやく藤さん所へ往なヨトわらひな 米「夫じやアきつとおねがひ 此「アイヨ承知だといふのにんまにゆきて藤兵衛とはなし 米「オヤ此里さんへ 此「アイなんぞんす米さん用があるなら本間へ來なましト大きな聲にていふ 藤「米さんたいそう勿體だのヲこつちへ來てもいゝじやアねへか 米「アレ今そこへ參るのでございませすは子ト本間へはいり 米「藤さんありがたう トおじき 米「モウ〱此里さんの大きな聲で おびへますヨウ 此「それだつてあんまり勿體だからサ。子エ藤さん 藤「ナアニすつかりとめかしておいらに見せようと思つてサ 此「オヤさうさアすかぬしのは赤心らしうさますは 米「オヤ否だ 藤「ナニいやだ 米「アレぬしのことじやア有ませんヨウハ、 此「オヤそれじやア私しのこととてございませう何がをかしうございませすへ ト大きな聲にてわらひながら 藤「サアかんはどうだマアちよいとはじめようじやアねへかの 米「さやうさ子 此「サアもう出來ましたよこれをマアそこへ出してませう ト高いうあしのせんへいろ〱のふ下より藤のも 此「そらなにか來ましたオヤ丁度いゝ常吉どんちよつと蒲團をあげて往てくんなヨ吉兵衛どんはどうしたか來ねへよづるいヨウ 常「ハイ私しがあげませういま吉兵衛は下の夜具をはこんでをります トいひながらはんまの夜具をちづゝ次の間のやぐだなへのせる此 此「こんな此芝さんでもだれても箒木をもつて來てちよいとれんじへあすこの所をはき出里はつぎの間のかたへむかひて 此「こんな此芝さんでもだれても箒木をもつて來てちよいとれんじへあすこの所をはき出した。ライ〱常吉御太儀ながらちよつと揚屋町まで往て來て下ツし 常「へい〱どこへ參ります 藤「アノ秀太夫を

よんで来てくださいませへ 當へイ／＼ト立あがる所へおいらん次の間より本間に入來る

春色惠の花二編卷之中了

春色惠の花二編卷之下

江戸 狂訓亭主人著

第十一回

湯より上りて十分に粧ひし此糸のうつくしさ貴妃も小町もこれに競て看ときは古風と唐の彩色にてなか／＼此姿におよぶべからず但し一座にくらぶる色は米八をもつて對するのみ 藤「イイ／＼常こついでに例もの所へなんぞ美味ものを澤山いひ付て來て下せへ 當へイかしこまりました 藤「イイ／＼大將々々 此はおいらんこの糸にいなんぞうめものを好んでやらねへか米こうもなんぞさう言てやらツし 此糸わちきやア昨夜餘りうなぎをたべたせへか寒氣がしてなりイせんハ 藤ハ、うなぎを喰てさむけがしもしめへくだらねへことをいふぜんぞ温氣のするものをさういつてやるがいゝじやアねへか米こうは何だの早くあつらへねへか 米わたくしはやつぱりいつもの 此糸「米さんは玉子むしざアすは 此糸「ア、きつとさうざんすヨ 藤「玉子むしやア唄女がすぐだろふ 此糸「なぜへ 藤「ナニ樂屋おちよそんならそれを澤山にして外に美味ものをよこしてくれろとさう云てくんなそして秀太夫に早くとヨ 當へイ／＼かしこまりました 藤「ト出てゆく此花は 花「秀さんにおいらんで早やアく來なとおそいと足へ馬といふ字を書てやるといつてくんなヨウ 里「ヲヤあんなくだらねへことをいはツしやるよ馬といふ字じやアいけません 花「なぜざアす 里「うまは脊中へ重いものをしよはせるとらちがあきません 花「ヲヤほんにさうざます子へ牛といふ字にすればようざましたねへ 米「ヲヤ／＼牛はなほのろ／＼してゐるぢやアありませんか駕といふ字の方がようざますは 此糸「ほんとう

に駕がいツち早うさんすは 藤アハ、おかしい手合だぞどれもよくそろつてくだらねへのヲ みなくいちどろに「ヲホ
ホ、アハ、

此頃右のごとく足へ何といふ字をかいてやるヨなどいふこと流行とぞかゝるたわむれがあどけなくておもしろ
かるべし

米「藤さんへおあげ申すヨア、せつねへあんまり笑つたらばくるしいトむねをさする 藤「サア、よこした
よこした トちよく 此糸よしのヤ トきを ける かむろ アイ ト節を 藤「此里さんお勝ばうもよびにやつてんなくよ 此糸おかつ
ばうが否ぎますよ 馬「おいらんどうしませう 糸「さういつてやんなんな 馬「アイそれぢやアおかつばうどんをよこ
してくんたとアレサ此菊さん喜介どんにさういつて来なまし 菊「アイ ト出て 花「こんな米さんちつとならさねへかよ
身にしみねへ唄女衆だヨ 米「ヲヤさうでございますねへ下卑相の方へ身にしみましたから。活業みじゆくて手につか
ぬぢやアいけません子 花「だれにヨウ 糸「米さんこまるヨ 米「おいらん御免なはいましたヨ 花「こんなア 米「ハイ引
トおほきなこゑにてへんじをしながらつぎ 藤「米「さうたいさう浮てゐるの 米「さう見へますかへ 藤「こゝろおきなくふしをつ
けてのろけなせへ 米「ハイ、しかしお勝さんが来てからはじめませうさういへば今朝はまだ一度も貌を見ませんヨ
藤「おれが貌を見てゐればいゝぢやアねへか 米「アレおかつさんの事でございませうアな子へ 花「こんな米さんまたち
つとも樂をしようとおもつて三味線のこととはわすれたやうにして居るヨマア内所てちつと弾なヨ 米「それぢやアマア
ちつと弾ませう 糸「ナゼまたそんなに弾せたがんなんすヨ 花「さうぢやア有ませんが米さんに戀情してやらうとお
もつてますヨ 米「此花さんへ御信切でございませうへトいひながら調子を合る 此馬「米さんしらすつつけぢやアあ
んまりますからかけんをしておくんましよ 米「此里さんなんざいますへ 馬「なんでもいゝヨ 藤「米「さうがうてき
にいぢめられるの 米「どうも流行ますから子 藤「それでもいゝかノ 糸「あんまり氣が多いから 米「ヲヤおいらんまで

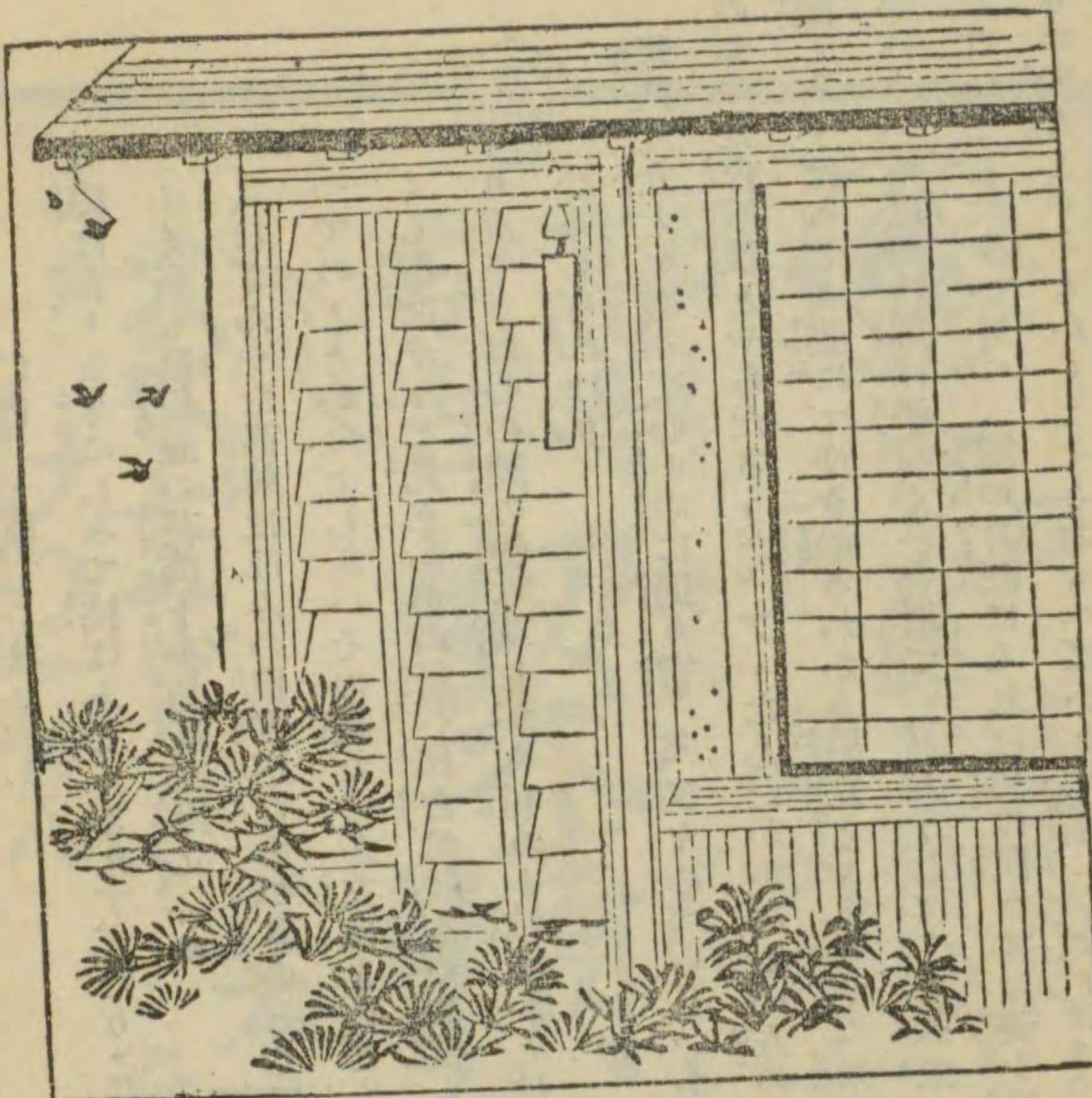
あんなことを 藤「米「さうおぼへて居さつしヨ 米「あれまた 馬「ヲヤ藤さん妬心ぎますヨ 藤「おかじんも大きにおせわ
か おかやきもちといふ事なりすべてあそびどころ 米「なんともおいじめなさいヨウ トみなくからかつてあるうちげい かつ「ごめん
なさいまし トつぎの間のしよじ 馬「おかつさんこつちへ来な かつ「ヲヤ藤さんへ今日は御逗留おいらんありがたう 藤「お
かつさん大さうめかして来たの道理で永かつたぜ 糸「おかつさんきれいだヨ かつ「ヲヤおいらんへありがたうござい
ますヨ米さんお早う 米「おかつさん誠にまつて居たヨ今朝は一度もおまへに合なかつた子へ かつ「ア、わちきもさう
思つてゐたヨ 米「おまへの来るのをまつてゐたからまだ鳴さんだヨ かつ「さうかへ實があるねへ 米「ア、そりやア
ちがふはず かつ「ちよいと出して来やうか子 トさみせんをとり 藤「ナニ、おかつさん米「さういふのはうそだぜ兎角米
こうは樂をしたがツて今までずるけて居たんだ。喃此花さん 米「ヲヤ、うそをおつきなさいまし 花「イ、エ藤さん
のいはつしやるとほりでぎますは私がいくらさういつても三味線に手をかける氣が出ないから憎うさんすは折角人が
のろけさしてやらうと思ふのに 米「さうぢやアありませんはずするけるやうにして引はつてお勝さんの來のをまつて
居たんでございませうな 藤「へんうまくいふぜ かつ「サア米さんちよいとどうもなんとも申されません子へ トさみせん
米「ヲヤ、おかつさんわちきやアまた仲間をよくする方がいゝとおもつてみなさんにいぢめられながらも待て居て
あげたノに かつ「まことに御しんせつといひながら調子を合せる米八もてうしをあはせながら 米「おかつさんおまへ
のあがつて来る時ちよいは歸つて居たかへ かつ「イ、エまだ内所にはだれも居ないヨ若旦那ばかりいつて米八の貌
を見る 米「さうかへトなにくはぬあいつ心の中では。よウく若旦那の事を言たがるヨすかねへ。お勝も心の中て。
よウくないしよの様子を聞たがるヨすかねへ

○米八は丹次郎と情通あればもしやお勝がわがごとくなりもするかと氣をつけてゐるに丹次郎は少しもその念な
けれどおかつは丹次郎に深く惚て何とぞ願ひてをれど米八といふ邪魔あればなかくにできがたく戀のかなは

ぬ心よりいつも米八をねたむ心あり右にしろせし二人の心の。好ねへは看官實にと察し給へ

これはさておき米八お勝は調子を合せてお定りの座付賑やかにいろ／＼のおかしみ座敷の穿ちは人情盡しがたければ略してしるさずこれより二三日過て後かかの此糸が座敷の中間においらんと米八二人のさしむかひなにかひそひそと相談 米「それぢやアおいらんそのつもりにしますヨ 米さうサさうしなよその外の事は其ときまた手段もあるから。もうあんまり座敷へ来てはわりいヨ 米アイ承知してをりますますがまだ今の内はい／＼けれどもい／＼私がその事を言わたされてもするともうおまへさんにも口も利ねへもんだから今の中斗りだと思ふと覺悟をした心の下からなんだか心細いやうでなりませんとすこし涙くむ此糸も眼の中すこしうるみて 米ほんにどういふ縁だか姉妹のやうに思はれてそんな事をおまへがいふとおいらもなんだか氣が弱くなるヨマア／＼願ひが成就するまではかならず他にけどられなさんなヨ 米おいらん死でもわすれはいたしませんヨ 米トいつてお長さんも今いふ通りのわけだからその氣で 米それもよく合點して居ますよ 米サア／＼はやく行なヨ 米アイト紙にて貌を拭てまたちよいと膝を突て坐り 米しかし藤さんはこん夜來さつしやるのかへ 米ナニ今夜藤さんは却つて來てはわるいから内所の前は藤さんてしまつてばかりあるつもりで中の町まで來さつしやれば出て行つものに文をあげたらその約束の返事が來たからよいよそれに多満屋へ往つしやる連衆と一所だからひよつとすると付合にかつしやるかもしれねへヨ 米さうでございませるかへム、あの日奈鶴さんのお客ぢやアありませんかへ 米さうサ多満屋なら付合にかつしやつても心遣ひはなからい／＼ヨいつてもアノ此汐さんが出てくれさつしやるからどんなに酒をたべさつてもよく世話をしてくれさつしやるし何も案じはないヨ 米さうでございませよ一たいアノ座敷の者はみんな能氣めへてございませすはそしてアノ薄菊さんとやらもい／＼女郎衆でありますねへ 米さうサそれだからすぐに文をかいて頼んでやつておかうと思つて居るのサそれに藤さんがたび／＼往てせわになるからなんぞしらへておあげなんしといつたら藤さんがしやれに

入と烟草入をみんな對にこしらへてやらうといはつしつたから此間もん所を聞にやつたらやつぱり五三の桐を付さつしやるさうだからこん夜藤さんにさういつてあげ申さうねへ 米それぢやア何かにつけてマア來さつしつたら中の町までお出なさらねへぢやアいけません子 米さうサマア



なにはともあれおめへは下へおりなヨ。ツイはなしがながくなつたのしかし此節かあいさうな役廻りは藤さんだヨ。それが二階のトこゆびを 米帳場が居ないで丁度はなしをするのにもい／＼ノ。 米ほんとうにもうありがれはたしかに遣り手がびやうきに 米ほんとうにもうありがてやどへさがりあると見へたり 米はたしかに遣り手がびやうきに 米ほんとうにもうありがたくつて／＼私やアなんの因果でこんなにおまはんには苦勞をかけるのみならず藤さんにも氣はづかしい事ばかりどうぞ堪忍しておくんさいヨ 米そりやア最初から覺悟をして居る事だアチマア／＼首尾よくものがいつたならその時たんと禮をいひなましマアそれまではたがひの胸に 米そんなら下へ 米はやくいきなヨ

第十二回

戀に氣もせを上家町かの米八は此日頃思ひがけなき唐琴屋の内所のもめに此糸とはかりし事も前後になりゆく浮世の定めなさまものゝ哀れを身一ツにやる方もなき胸の雲春の朧の夕月夜しのんで來る商人家の路次をはいれば裏家の二

階いかなる人の物ずきぞこの頃世には絶たりし宮古路ぶしの情死もの語るはたしか鶴賀の一曲加賀八太夫が中音にて落をとつたる愁たん場その淨瑠璃は左の通り

○吉原 筏

詞梅は青々と身にしみて桃はふとくこえすぎたりこまやかならずうすからず花はみよしの嵐山千本の花の上をゆく名も高崎屋の花筏下を押し切二挺立 中略

いむさんやな高崎はけふの興吉がたまづさのとくにとかれぬ胸のうち縁をきるとは心得ぬ。なんぞ恨みのあつてのことかたどしあいその盡たのか文はよめどもよめかぬるころのなぞの案じられ二間座しきのらうそくも涙にやみと見えわかぬ所へ興吉は貌もやせ髪もそよけてうっかりとさも哀れなるその風情それと見るより高さは心の關の恨み草しがみ付うか泣うかとはら立ことも今さらにはでのもりの岩つゝじもゆるおもひとしられけり

米八は立とどまりて心の中に獨り言 米「フヤめづらしいありやアたしか加賀八さんが作者に頼んで語り出したと噂のあつた吉原筏とやらださうだ。ア、なんだかかないし人の事とは思はれないとしばしイむ後のかた手拭ひにて顔を隠しみすぼらしき姿にてゆき過るわかき男立とどまりて「米八が 米「エトびつくりすかして見て 米「フヤ若旦那さんかへトいへば丹次郎は手ぬぐひを取て 丹「どうしてこゝへ來たのだ 米「わちきよりはおまはんがどうしてこゝへお出なはいましたトいひつゝ臈の月蔭にみれば男は肌うすな姿を恥てさしうつむく髪もみだれて面やつれ今聞たりし淨るりの興吉とやらもかくこそとおもへばいと悲しくなり 米「丹さんマアどうしてそんなにかなしい姿にお成なはいましたのでございますまだこの寒いのに着物もたつた一ツ着てからにサアマアあすこへお出なさいな子へトつれ立。長家の娘の聲



同 文字大夫
宮古路豊後掾
同 綱大夫

三味線
岸沢三五郎

高崎 契情吉原筏

大字七太夫

正木所

えまほ町

けいこかん

しづや勘右衛門

淨ろりいかくせど色香梅が花合ちりても跡のはなの申いつか故郷へ歸る雁合まだ花寒き春かぜに柳の都跡に見
 て氣も戸塚はと吉田ばし墨繪の筆に夜のふじよそめにそれと影くらき鳥のねぐらをたどり來る
 さても米八丹次郎は此裏屋なる中程の家の二かゝるにいたりしが兼て家内は戀知りゆゑはづして二人がさしむかひ胸
 ふさがりてやゝしばらく言葉もたえてなかりける

これいかなるゆゑなれば唐琴屋の内所色々と混雜なしお蝶の母親も病死して支配人鬼兵衛の悪心より丹次郎を他
 へ再養子につかはしすべて家内は鬼兵衛が思ふ存分にはからひけるが丹次郎は養子に行たる先方も番頭手代の悪
 計によりて忽ち養家は身上立がたくちりくになりゆきあまつさへ丹次郎の身に罪をさせられしのびかくるゝ如
 くなりしゆゑ元來おとなしく慾情にうとき生質なればにはかに困窮難澁して唐琴屋へもよりつかれずと詮方つき
 てまへかた目をかけし上家町の裏に來りて何とぞ米八を呼出しもらはんとせし所に米八も丹次郎を案じて此裏の
 人に頼みやうすを尋ねもらはんためにこゝへ來かゝり丹次郎には逢しとぞ

米「エ若だんなへ丹モウ若だんなといはずと名をよんでくんねへな米アイそれでもどうも不躰らしいものを
 丹「ナニ名をよんだといつてぶしつけな事があるものか米「それじゃアアこれから名をおよび申ませうが子これか
 ら先はおまはんはどうなさるつもりであらツしやるのだねへセ「どうにも斯にもおやしきの方の納金や欠落をしたや
 つらのことがわからねへ中は世の中へ表向出られねへといふものだからしやうがねへどこぞ田舎へでもマアいつて見
 やうヨ米「アレサそんな心ぼそいことをおひなさツちやアいけないはねへそれよりか近い所にお出なさいヨわちき
 がたづねにゆくから遠いとこまりまはアナそしてなぜ養子にいかしつて間もなくそんなにお金がなくなつておまはん
 の難儀になつたんでありますねへ丹「それがだんくはなす通りのわけではやくいへばおれがだまされたのサ米「そ
 れだつてもそのわけが私にやアさツぱりわかりません子他のしたことならおまはんのとがにならないやうにいはい

さうなものぢやアありませんか丹「それができるくれへならにげもかくれもしねへハナ米「なぜだませふ梅しい事たね
 へト膝にもたれて泣て居たりしがやゝありて米「それぢやア子。エ丹さん丹「なんだ米「アノあしたの晩にどうぞこ
 こまで來ておくんないまし丹「ナゼ米「ナニ子今夜實おまはんにお目にかゝられるとはぞんじませんから詮方があ
 りませんトいひながら帯の間からちいさき金を二ツばかり紙にひねりしまゝに丹次郎にわたし米「エあしたは是非都
 合をしてあげ申からどうぞ田舎なんぞへいかないやうにしておくんないヨトいは丹次郎はかのかみにつみ金をちよ米「ア
 ヤなんだ子へいたゞいてサトいはながらまたその心をさつしてみれば米「丹さん丹「エ米「さぞくやしうござませうがしんば
 うして居ておくんないヨ是非わちきがどうかしますからトいふ顔じつと丹次郎はながめて涙をほらく膝にひ
 きよせ言葉さへたがひにいはいはれぬ實と誠そこに倒れて泣伏けるがやゝあつて丹「いゝ氣だと思つたらうが堪忍しなヨ
 米「かんにしなもおかしいねへトにつこり笑ふなみだの笑顔やがてぞひらく惠の花これより後のものがたりは梅こ
 よみといふ草紙につゞりて先年より御高覽をねがひおきて候へばこの巻始六冊を御一覽のうへいまだ梅こよみを御ぞ
 んじなき御方さまは御もとめ遊ばされよろしく高評を賜へとしかいふ

春色惠の花二編卷之下了

春台林泉暮美

梅こよ美の序

梅こよ美の序

南枝に雪の積頃より一輪ツ、の梅の花かぞへて願ふ吉方は三鏡寶珠の恵を祈る春のあしたの賣出しに多願玉女の門出よし色星玉女の利益には袋外題の色摺よし天星玉女の神徳に恵方の買手來そはじめそも八將神の方位にそむかず建とは仕立の切形よく平は表紙に凹もなく晝ばかり除はひやかして破は御免の表昏附立直を定の當日に執とはえんぎに成納卷を開の看官に作者が願御評判満とは 則板元の藏入はふ天恩月徳四季の土用はいふも更春夏秋多止時なく日々の注文追摺とはチト慾心の十千十二支土公をおせばそんな直が出るとは部敷の限なし諸君遊行の間の日にはかならず此冊子をもて遊びて梅が香つたう御風聴今年もかはらず御取立と願ふ心の十方くれ八方金神の中央に座したるこの三四年の災厄もやゝ解そむる薄氷春水四澤にみつるといふ時をゑがほや花の兄文永堂の引立に柳川重信畫の愛敬で何卒あたれ大當日あたりもよき梅の枝を月曜星の尊前に供一陽來福の吉書はしめ

江戸前の市隠狂訓亭

爲 永 春 水 しるす

さては此程御はなしの梅曆の畫上御書入れのたしにもと反古の中より見出しさ
しあげり

月中仙子雪中梅 第一嫦娥第一香

御稿本明キ次第借用申上たく願上り

めてたくもし

清元延津賀

狂訓亭雅兄

春色梅兒譽美卷之一

江戸 狂訓亭主人著

第一 齣

野に捨てた笠に用あり水仙花。それならなくに水仙の。霜除ほどなる侘住居。榎木の垣も間原なる。外は田畑の薄氷。心解あふ裏借家も。住は都にまさるらん。實と寔の中の郷。家數もわづか五六軒。中に此ごろ家移か。萬たらはぬ新世帯。主は年齢十八九。人品賤しからねども。薄命なる人なりけん。貧苦にせまる其うへに。此ほど病の床にふし。不自由いわん方もなき容體もときの吉不祥。いとど寒けき朝嵐。身にしみんとかこ顔。獨わびしき門の戸に女「すこし御免なさいまし」あるじ「アイどなたエ 女「そふいふお聲は若旦那さんといひつゝあける障子さへ。ゆがむ敷居にやうくと。あけて欠込其姿。上田太織の鼠の棒縞。黒の小柳に紫の。やままゆじまの縮緬を鯨帯とし。下着はお納戸の中形縮めん。おこそ頭巾を手に持てみだれし鬢の嶋田鬘。素顔自慢か寐起の儘か。つころはねども美しき。花の笑顔に愁の目元。亭主はびつくり貌うちながめ 幸米八じやアねへか。どふして来た。そして隠れて居る此所が知れるといふもふしぎなこと。マアくこちらへ夢じやアねへか。とおきかへりよね「わちきやア最。知れめへかと思つて胸がどきくして。そしてもう急いで歩いたもんだからア、苦しい。おむねがひつつくやうだ。おまはんは煩つてゐさつしやるのかへ。トかほをつく。寔にやせたねへ。マア色のわるいことは。眞青だヨ。何時分からわるいのだへ。幸ナニ十五六日後からヨ。大造なことでもねへが。どふも氣が閉てならねへ。それはいゝが手めへまア。

どうして知つて来たのだ。聞てへこともたんとある。トすこしなみだが、よねナニ今朝は妙見さまへ参りに来たつもりで宅は出ましたヨ。寔にふしぎなことサねへお前様が此様な所に御在宅といふことは。ほんに夢にも知らなんだが。此頃目見に来て居るしたじツ子がこれいしやしたじの子とありまはアな。その子の宅を聞たれば。本所の方だといひました。それが。それから皆々と種々なことを聞か遊んで居るとき。其子が宅の近所の咄をする中で。どうもはなしの様子が。おまへはんの噂のやうだから。其晩一所に寐かしてよく聞たら。宅に意氣な美しいお内實が居ると言ましたから。夫じやア違つたかと思つて。猶くわしく聞たれば。おまはんの年よりおかみさんの方が年うへのやうだといひますし。またおかみさんは。どうして家には居ないといふし。聞ばきくほどなんだかおまはんのやうな心持で。モウ、どうも氣が濟ねへから其子によく、私の聞たことを口留して。置いて。今日の朝参りには。なんでも尋ねようと思つて十五日を樂しみにして。出て来たんでありますアな。日頃の念力とはいふもの。風としたことからおまはんの。在家が知るといふは。妙見さまのおかげだと。嬉しいに付て氣がよりなは。おかみさんがあるとの噂。今日はどこぞへお他出のかへ。まナニつまらねへ。どうして女房どころなものか。そして其子は其所の娘だらう。よね、なんだか宅は八百屋だといひましたヨ。そりやアアい、じやアありませんか。おまはんマアそれよりか。今じやア私のことなんざア思ひ出しもしてはお呉なさるまい子。そして噂にきいたお内君のことをかくさずとも。い、じやアありませんか。まナニサ隠すぞこじやアねへ。此容だものをよくつもつて見るがい。其子の咄しだつても。何だか知れもしねへ。マアそりやアさうと。宅のやうすはどうだ。よね、宅のやうすは大變サ。鬼兵衛どんの氣じやア。皆に旦那さんといはれてへ心持で居ますのサ。それだけだ。御内室の在世な時さへあのとほりの理窟だものを。どうしてさういふ様にいきますものか。それを何の角のと言つて。三日にあげず内證はもめか絶やアしませんは。私も全體おまはんの。養子に行しつたときから。住かへに出たいと思つて。氣をもんで居ましたけれども。どうもあゝいふ意地わるだから。あ

こちになつて出すめへと。今日まじやア我慢して居たけれど。おまはんの宅は知れるし。そしてマアトあたりを見まはし。此様なはない形身になつてあさつしやるのを見てどうしてあすこの宅に居られますものか。私きやア今日歸ると直に住けへをわがつて。婦多川へでも行て辛抱しておまはんの身を少しも樂にさせ申てへ子エ。トしんじつ見へし女のみで。よね、エモシそして養子に行しつた御宅はマアどふした譯で急に身代がたゝなくなつたのでありますエ。ま、さればサ今さら考て見りやアやつぱり鬼兵衛が先の番頭の松兵衛となれ合て直に戸を塞身上を承知ておれを急養子そんなことは露しらず這入て見れば借金の。山も縁づくどふぞしてと。思つたゆへに鬼兵衛にも判をおさせた百兩の金も養家へいれ佛事それから宅へ出入もならず音信不通とされたのはみんな此方がふつゝかゆゑまたそのうへに養子先の身上はぶんさんしてまだ後日にはこれがあると云て番頭松兵衛が島山さまへ出してある五百兩の證もんはおまへに上ますその代り分散残りの百兩は私が七十兩跡は外の者へつかはしますといつて其身は上方へ登るといつて行衛なし二番ばんとう久入といふ者が信切におれが名代に島山さまへ行た處が随分金子は下げつかはすが先達て松兵衛におふせつけられた残月の御茶入御拂ものとしてわたしおかれしが此ほど聞ば梶原家へ千六百兩に納りしとの事夏井丹次郎よりさしあげ置たる五百兩をさし引残り千兩は。早速に上納いたせと。いはれてびつくり立かへり。相談さい中お屋敷から。久入が宅へ役人衆がござられて殿の御國へ御立ちゆゑ。心づかずにおつたるが。夏井の家分散とあればゆるかせならぬ茶入の金子。松兵衛ならびに當主人。丹次郎同道いたせと大むづかし。それから久入がはからひて。おれはしばらく世をしのぶ身のうへ。松兵衛は行衛しれず段々久入が難儀するそふだ。とはいふもの、おれもまアくやしい難をきたじやアねへか。よね、まことに聞もくやしいねへ。そしてだれがおまはんの病氣の世話をしますエ。まナニ世話といつて居付て世話のしてもねへが。長屋の衆やまたおにも世話になるのは。今はなした。久入といふ人の。かみさんの妹が。女髮結をして。此近所に居るから。それが時を來て。何かのことをしてくれるのサ。よね、そふかへ。其女申

をたがへぬみさほの頼母しく。尋ねて深き中の郷。九尺二間の破疊病の床に敷ものも。薄き縁しとかこちたる。恨み
 泪の玉のこし捨て貧苦をいとほじと。誓ふ寔の戀の欲。これぞ流れの里にある。人の意地とは知られけり 主丹次郎はか
ほをしかめ
 丹「米八その薬を茶碗へついでくん。胸がどき／＼するから よね八はきしぐしで男 ね「ヲヤそふかへどふせうねト。び
 つくりして薬を持来る 丹「何サ何でもねへが トにつこり ね「わりい事をしたねト こりわらふ 丹「そりやアそふとアノ
 お長はどふしたのふ よね「お長さんかエあの子も寔に苦勞しますヨ。それに鬼兵衛どんが。何かおかしらしいそふだ
 から。猶心づかひしてゐるやうすサ。随分わちきも側で氣を付けてゐますけれども。何をいふにもおまへはんのことを少
 はかんくつて居る このかんくるとはすいりやう ものだから實にしにくふございませアな 丹「そふサあれも幼年中からあのよ
 ふに育合たからかはひそふだヨ トすこし よね「さよふサ子。おさな馴染は格別かわい／＼そふだから。御尤でございませ
 ヨ トつんと 丹「何さ別にかはい／＼といふのではねへはな。マアかわいそふだといふことヨ よね「それだから無理だとは
 言やアしませんは子 トすこしめじりをあげて 丹「まぬけめへ直に腹アたつから。何でも聞れやアしねへ よね「さやうサ私
 ア間拔サ。お長さんといふ寔にい／＼なづけのあるおまへさんに。こんなに苦勞をするから間拔の行溜りでありますのサ
 丹「よくいろ／＼なことをいふヨ。そんならどうでも勝手にしる トよこを よね「オヤおまはんは腹をた／＼しつたのかへ
 丹「腹をたつてもた／＼ねへでも。打捨てておぐがい／＼ よね「それだつてもアレサおまはんがお長さんのことをかわい／＼とお
 言だから。ツイさういつたんでありますアな 丹「ナニおいらがさういふものか。かわい／＼ではねへ。かわいさうだと言
 たんだ よね「オヤかわい／＼もかわいらしいもかわいさうだも。同じ事じやアありませんかへ。そんなら私がわりいか
 ら。堪忍しておくんなさいナ 丹「どうでもい／＼わな トいはれてもとよりほれこみし男はとかく氣がお よね「アレサほんとうに私
 がわりいから。どうぞ堪忍して。機嫌を直してお呉なさいな トおろ／＼する丹次郎 丹「そんなら堪忍するが。最おそくな
 るだらうから。おれがことを案じずに。宅へかへつたら。座敷を大事に勤めなヨ トやさしきことにはむねいつぱいわづかなこと

たどうし の戀中也 よね「モウ若旦那おまはんが。そんなにやさしく言て呉さつしやると。また猶のこと歸るのが否になりませア
 な。屹度モウどんなことがあつても變る心を出しておくんなさいませナヨ 丹「何べらほうめへ よね「わちきやアそれ
 ぼつかり案じられてならないヨ。斯して居さしつてもどうぞ時節は。私のことを思ひ出してお呉なさいヨ トあどけなきこ
そなほゆかし
 「わすれねばこそ思ひ出さず候。とは名妓高尾が金言ながら。互に思ひおもはる。深き仲ほど愚痴になり。少
 しはなれて在るときは。もしや我身をわすらる。ことあらんかと幾度か。思ひ過しも戀の癖。其身にならねばな
 かなかに他目に見てはいと／＼しく。阿房らしくも馬鹿らしく。笑ふは實に戀しらず哀れも知らぬ人といふべし
 丹「おもひ出す所か。わすれる間があるものか よね「それでもアノお長さんのことを思ひ出しちや否だヨ トをこの
顔をみる
 丹「ばかばかり言てゐずとも歸る支度をしな。よね「何の支たくがありますものか。着物を端折ばかりだわ子。それじ
 やア最何も用はありませんかへ。アノ子私にまた來るまで不自由なものがあるならどうかして。使をよこしてお呉なさ
 いヨ。是非わちきやア住かへする心だから。さうなるとまたどうでも出来るから案じずに御在なさいヨ。少しは胸の
 法もありますヨ トいひながらそこい 丹「まためつたな業を仕出來して。後へも前へも行ねへやうなことをしてくれるなヨ
よね「ナニサおあじなさんなよ。どうも時節じせつて心にもねへ悪法も。おまはんゆゑなら身を粉にしても 丹「米八や
 い／＼咄しを聞いて呉なヨ よね八はちちか、よね「おまはんナゼそんな顔をしてお呉なはるのだへ。 さんといふをほんといひさる
といふをほんといふすべてか
 つしたまへわちきやア猶心が残つて歸られないはねトなく 丹「なんだか心ほそくなつてどうも歸しともねへようだが。
 どうしても歸らざアなるめへのウ トいはれて見ればよね八もしんをこほれ よね「イツそのことこれから直に 丹「ナニ／＼それじ
 やアわりい。さうすると鬼兵衛がなか／＼すべく。くららがへさせるこつちやアねへサア／＼機嫌よくして歸んな
 ヨ。ヨ米八 よね「さうさねへ。どんなことかおまはんはんに難儀をかけるやうな事になつちやアわりいから。氣を鬼に
 して歸りませう 丹「さうよなんでもすべく出るならよし。無理なことをして手めへの身に。どんなことがあつた特

は。なほくおいらがわからねへから。どうぞおれを思つて呉るなら。ひどい胴居はちかごろはらすめてぜんあくといひ
 いとはしたなけれはつかふべからずしねへがいよ。よね「アイ私だつておまはんの爲にすることだから。どうなつてもとはいふものよ。二人
 が身にとつて末のつまらない胴居はしやアしませんから。案じずちつとも早く能なつておくんさいよ。そんなら
 私きやア最行ますヨ。みついでしけけと貌をながめ。よね「屹度でございますヨ。丹「何を屹度だ。よね「ほかの氣を出すとい
 やだと申ことサ。丹「ム、ヨ承知だからモウ道よりをしねへて歸んなヨ。よね「ナニ途中寄をする所がありますものか
 丹「そして先刻の手紙を手めへ裏前へ頼んであるのじやアねへか。だれにかおれが頼んでやらうよ。よね「アイさうだツけ
 子夫じやアさうしてお呉なさいヨ。よく氣が付て呉さしツたね。トあがつて来てふ。下されしといふをくれきツしやるくれさし。よね「い
 つまで居ても限りはねへから。もう思ひきつて往ませう。トあがり口へおりにはきものを。丹「ア、コウ米八。よね「アイ
 かまだ用があるやうだツけ。イヤいよ。急で行なヨ。よね「アイそんなら。トなごりをしげにいで、ゆくそのうしろか。丹「かわ
 いさうにあんなに苦勞させるのも。何の因果だらう。トなみだ。ほろりア、モウくふさぐめへ。トふとんの上。ホイこれはし
 たり頭巾をわすれて行た。ア、こまるだらう。まだ遠くはゆくめへア、おれが馳ていかれる身だといふがじれツてへ
 ト頭巾を手にもつて。よね「若旦那へ。丹「オイ米八か。よね「私きやア頭巾を落して。丹「いまおるらもさう思つてまごつて
 居る所だ。ト頭巾を手。何所までいつた。よね「なんだか武家地のやうな所まで往たけれども何をして頭巾はなくなつても
 いふけれども。丹「いふけれどもどうした。よね「また鳥渡歸りたくなつたものを。丹次郎はうれしさう。丹「そんならいふから
 はやく歸んなヨ。よね「こんどこそ實に歸るヨ。トおもひきつて出て行ろしるか。丹「ア、憎くねへやつだ。トしやうじをびつしや
 つく。をりからひるあきんどのこゑ。

あきうど「豆腐ウ引イ

嗟愚痴なるに似たれども。またその人の身にとりては。他に知られぬ戀の道。此おもむきにはかはるとも實は

同じ男女の情。色は思案の外とはいへど。物の哀れをこれよりぞ。しらば邪見の匹夫をして。心をやわらぐ一助
 とならんか。

老婆心人 狂 訓 筆 記

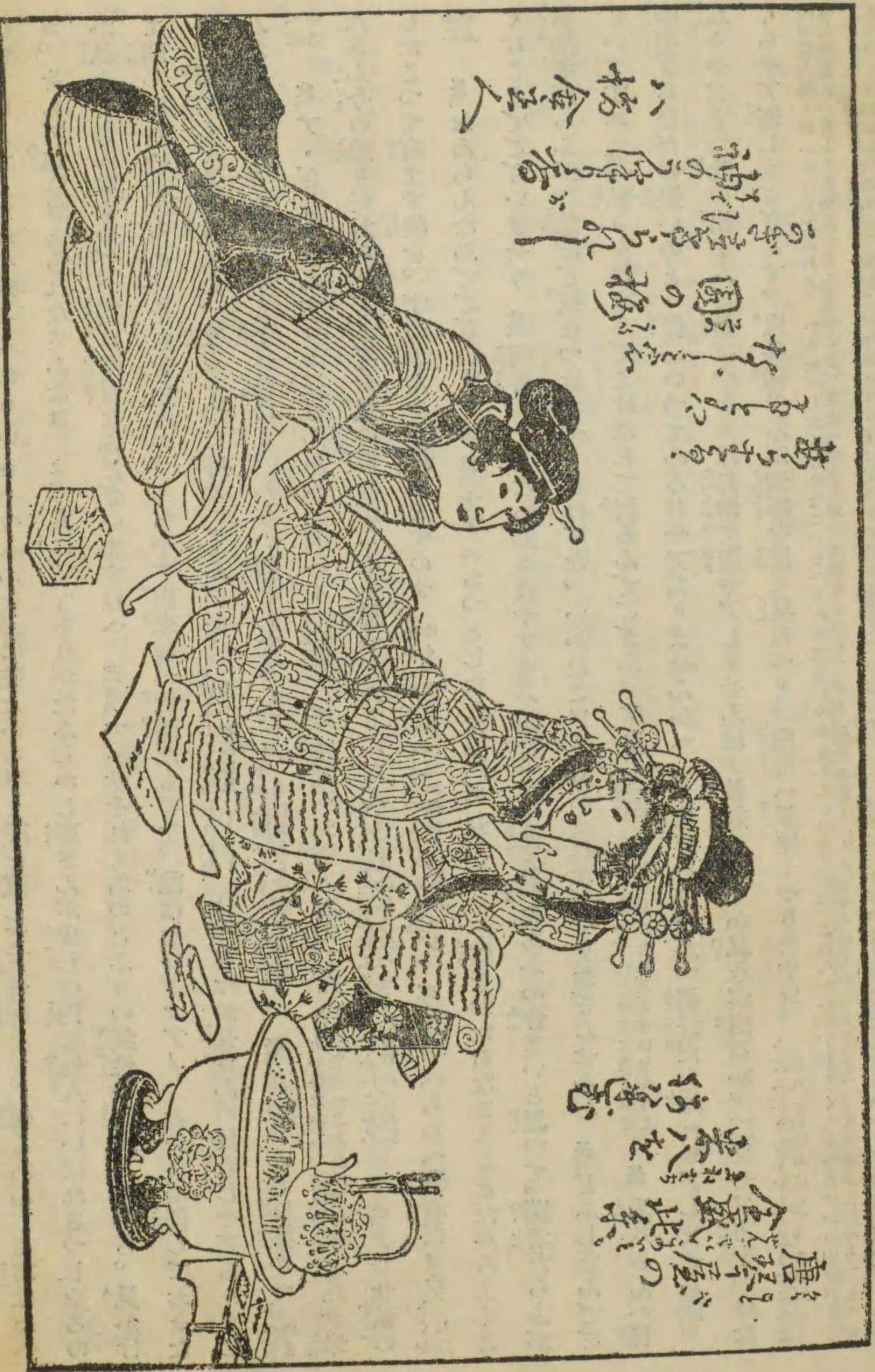
春色梅兒譽美卷之一了

春色梅兒譽美卷之二

江戸 狂訓亭主人著

第三齣

九年なに苦界十年花衣。さとして見れば面白き。色の浮世の其中に。色を集へし一廓。盛久しきこの里に。唐琴屋とか聞えしは。いと賑はしき家なりしが。主夫婦死去て。血筋の娘阿長とて。今年十五の形容艶されど兩親あらざれば。鬼兵衛といへる後見が。心よからぬ動止も。親類縁者あらぬゆゑ。只本店の持同前。その本家へは彼鬼兵衛が。如才なく機嫌をとり。なに事も深切めかして勤めおき。今は唐琴屋のあるじのごとく萬事に我意を行へど。首をおさゆる人もなく。女郎藝者に發明なる者はあれども。給金にかはれし身ゆゑ。後見も主人に同じ鬼兵衛には。流石たてつく者しなく只先主人のありし日を。言出してはつぶやくのみまた詮方もなかりしとぞ。斯て此家のおゐらん此糸と稱お職あり。年まだ若き身ながらも。萬に付て抜目なく。内外の者の思はくは。いふも更なり茶屋船宿。お針が三の和の噂にも。賞る花美好さればとて。はずはにあらぬしとやかさは。にもはぢぬとり廻し。艶色は里の指折にて。殊にやさしき眞情しりなり。頃しも春の梅ごよみ。れんじに開く鉢植の。花の香かほる風寒み身に染紋日物日さへ春は殊更やるせなき。今日ぞ跡着の着染初と。賑ふ時も巳の刻を。過てまつたく起揃ふ。軒に呼こむ朝日紅。色の街ぞゆかしけれ。爰におゐらん此糸が。座敷のうちひそくと。囁くものは内藝者。彼米八と稱ものなり。よね、モシエおゐらん私きやアもふ。おまはんのことは死でもわすれやアしませんヨ。トなきなが。此糸アレサ此子はヨ。そんな



に泣いてひよつとたれぞ來るとわりいヨ。今みんな湯に往たから早く顔を直して下へ行なヨ。何もあんじる事はねへヨ。そして他にさとられなさんなヨ。よね、寔に／＼ありがたふしかし藤さんが少しの内も他人にはれさつしやるのが私きのよふなもので。寔に面目なふございますねへ。此ナニサそれもあのとふりの氣性の藤さんだから。見かけて頼んだわけだもの。それをいつてのちやア出來ねへ世話だものを。能はなヨ。マア／＼おいらに任しておきなヨ。何にしても今夜また。文をやつて呼たいもんだが。トはなしのうちにうかた。よね、ヲヤお長さんの足音じやアありませんかねへ。此系、そふサ早く下へ往な。わりい顔をしなさんなヨ。トいふ所へしやうじをそつと。長「おめらんお座敷かへトつぎいる。此「ア、ざしきざんすヨお長さんかへ。長「ハイト立て。此「本間へお這入なんしなへ。トいひながらかほのいろ。これサ米八さん今の通りだから。どふぞお氣の毒ながらそふ思つておくんなんし。ト心んどんにふくれていふによね八。よね「アレサ私のしたこつて有ます物を。ずいぶんそふ思ひますのサ。トいひながらついとたつてらうかへ出て。此「口のへらねへ藝者だヨウトキヤいふに。長「おめらんなんでございますエ。此「ナアニちつとしたこつて長「おめらんが腹をおたちなさることだからよくよくなこととございませう。此「何外のことならわちきやアもふ。成ツたけ他と顔をあかめ合まいと思つて。藝者だらふが新造家だらふが。餘ほど氣をつけてやりまはアな。いかなこつてもあきれたぢやアおさんせんか。長「どふしたんでございますエ。此「私きをばまるでこけにして居るんでござんさアなり。お長はとしはもゆかざれどおさなきときよ。長「米八さん八日頃男ざらひだの堅いのと。他がいつてゐるじやアありませんかへ。此「男ざらひだか。男好だか知れやアしませんは。私きやアまた先の出よふて是はつかりは打捨て置やアしませんは。彼奴を出すか私きが出るか。二ツ一ツ方をつけなぐちやア悔しうござんす。鬼兵衛どんが云事を聞て呉ねへと。内所へ長座でやりますヨ。トはらたしくいふ。是すなはちよんの客人藤といふものとよね八と。いろをせしおもむきをこしらへそれを此系がやかましくいひ出して。よね八をやす／＼とくらがへさせかの中のがらる丹次郎は。もとのこのいゑのあとをもちよね八をにくみい／＼きみとおもふゆゑ。長「ヲヤそふでございませうかへ。知れないもんでありますね。し。すこしはやきもち心もあればよね八をにくみい／＼きみとおもふゆゑ。長「ヲヤそふでございませうかへ。し。たへおいて。長「おめらんそりやアそふと話にうかれて。薬をあげもふさなんだ。おめらん湯呑へつぎませうかへ。トくすりをつぎ。長「おめらんへ。今よふにお言だがね。私はおまへが内所へすわつたり何かすると寔にこまるから。どうぞ左様しなひで世話をしておくんさいヨ。ひよつとおまへさんがさういふことだと。私しやア心ほそいヨ。トほろりとこぼすなみだのしづく。兩おやこ手をさげてたのまれう。およそおさなきをりからにおやにはなれてそだつほど。かな。此「ほんにおまへんはかわいさうだね。斯して居さしきもの、あるべきかと。わかりし心におめらんは。ひとしほふびんとなみだぐみ。此「ほんにおまへんはかわいさうだね。斯して居さしつてもおかみさんが達者な時の姿はちつともなし。禿衆同前の形をして此様に二階へ薬を持て來さつしやるのを見ても泪のたわておツすト。お長を膝に引寄て。思はず泪にむせかへる。眞の歎きは傾城の。やさしき鑑となりぬべし。作者此草稿するす時しも。菊月初の七日の夜。丑滿の頃になん。はじめて雁の告るを聞て

かくばかりやさしき君がたまくらに

ことづてやらんはつ雁のふみ

わがひなげせし丹次郎と米八と。わけのありしことをかねてさつ。長「ヲヤそふでございませうかへ。知れないもんでありますね。し。すこしはやきもち心もあればよね八をにくみい／＼きみとおもふゆゑ。長「ヲヤそふでございませうかへ。し。たへおいて。長「おめらんそりやアそふと話にうかれて。薬をあげもふさなんだ。おめらん湯呑へつぎませうかへ。トくすりをつぎ。長「おめらんへ。今よふにお言だがね。私はおまへが内所へすわつたり何かすると寔にこまるから。どうぞ左様しなひで世話をしておくんさいヨ。ひよつとおまへさんがさういふことだと。私しやア心ほそいヨ。トほろりとこぼすなみだのしづく。兩おやこ手をさげてたのまれう。およそおさなきをりからにおやにはなれてそだつほど。かな。此「ほんにおまへんはかわいさうだね。斯して居さしきもの、あるべきかと。わかりし心におめらんは。ひとしほふびんとなみだぐみ。此「ほんにおまへんはかわいさうだね。斯して居さしつてもおかみさんが達者な時の姿はちつともなし。禿衆同前の形をして此様に二階へ薬を持て來さつしやるのを見ても泪のたわておツすト。お長を膝に引寄て。思はず泪にむせかへる。眞の歎きは傾城の。やさしき鑑となりぬべし。作者此草稿するす時しも。菊月初の七日の夜。丑滿の頃になん。はじめて雁の告るを聞て

かくばかりやさしき君がたまくらに

ことづてやらんはつ雁のふみ

これはさておき彼お長は。此系がいとやさしき言葉に。わアつトこゑをたて身をふる。長「おいらんエおまへさんがそんなに言ってお呉なさると私はモウ。母人でいもあるやうに思はれてかなしいヨ。トまたとりすぎるひざのうへ肩ぬひあげのみはゞさなほいとしさみ。此「わたしも何の因果だか一人ならず二人まで。飽まで世話をしてやらすは。長「エ一人ならず二人とはエ此「エ何サおまへさんも若旦那をもサ。トいひまぎらし。そして此ころは下のは鬼兵衛がことなり。機嫌がようおざんすかへ長「ナニ私しやア寔にこまりますヨ。いふことをきくのは否。聞ないければあの通り。いじめて朝晩やかましく。マアどふしたらよからふねへ。それにつけてもお兄いさんはこれ丹次郎がとにして心におつと、おめへどもい何所にどふして御在なさるか。こんな私がつらい思ひをするとはちつとも知らずにおいでだらふ。トはをくひしはるくやしさを。此「ナニサお案事でない。どふかして法をかいて。ト言かけてなほ。小こゑになり。爰を身拔をさせもふす。手段もまたありませうは子。かならずなき

な思はずに。ずいぶん今の内は機嫌よく用を足なんしヨ。座敷のものが今湯から上ツて来るとわるふざんすから。早く下へ。往なんしヨ。かならず案事なんすなエ。長ハイおありがたふ夫じやア下へ往ますヨ。トたつて次の間へ出る。ちうかをはあけ。禿ヲヤお長さん今下。の方でたいそふ呼んでいますヨ。はやく裏階子から下りてお出なまし。アノ意地悪根性がおそろしい貌をしておまはんを呼ますは。顔が憎いヨ。此しげりやなんだ其口は。お長さん早く下へ往なんしヨ。何もこわい事はおざんせんは子。トいへどお長はおどくしけらひにひとき鬼兵衛をおそれ。しげりや一連に付て往て見て来や。小言が出るわりいふ。長おらんしかられたら来てお呉なんしヨト。トおろく涙に。此かわいそふにいぢらしい子だのふ。ほんに米八さんあの子も。どつちをどふともいはれねへから二人ともにこんな苦勞してやるといふのも。何の因縁やら。トひとりごとをいひながらほつとためいきを。ばんしん「ながい湯ぎましたろふ子。此糸はにつこり。此アイサ相應にながふざんした子。おまはん今あがつて来るとき。下でなんぞまた小言が出やアしましたかへ。ばんイ、エ氣が付ませんヨ。禿かけて来て。禿アノウおらんエ。又子あの意地わるがおこりましたから。早くいつておあげなましエ。此そふかどふもこまるヨ。トうはそらうをはき。ばん「またお長さんのことさますか。かわいそふにさぞくやしからふ。此それだから私もちつとは力になつてやるんざんすは子。トいでゆくばんしんはかんざして。ばん「しげりや。書附をとつて来や。そして夕ア書て置した。藤さんの文を巴屋へちよつと持て往て来やヨ。そして金曾木の柏屋が来たら。翁草の後篇と。拾遺の玉川を持て来なとそふいふのだヨ。ドレおらん來さツしやらねへうち。トいひながら茶ほうじを出して茶をいれる。

作者曰この草紙は米八お長等が人情を述るを専らとすれば。青樓の穿を記さず。元來予は妓院に疎し。依て唯そのおもむきを略すのみ。必しも洒落本とおなじく評し給ふことなけれ。且筆のついでに申す。此一條お長が苦心のくやしきを見て父母のことを大事になし。必ずしも仰にそむき給ふな。豈世の中只此お長に限らんや。父母にはやくはなれし人は。他人の爲に恥しめられいぢめらるゝことこれにまさされる人もあらん。成長まで父母の此

世に在ぞ千金にもましていとありがたきことと尊み給へかし

あるときはありのすさみにつらかりし

なくてぞいまは人のこひしき

第四 齣

雲介ども四五人。くも「サア〜お娘や出なせ〜」かごのうちよりむ。娘「ハイ〜大きに御苦勞でありがたふ。そんなら爰が金澤の。くも「サアその金澤へはまだ一里。金澤よりか金になる。おめへの艶色に棒組も。仲間の奴等も息杖に。氣をもたせたる永丁場。息つぎなしにいそひだは。棒ぐみ「みないひあわした信切仲間。さいわひ此所は同樂寺といふ。無住のあき寺。お娘を正坐に取まいて。念佛講をはじめつもあり。何と憎くもあるめへが。くも「サア〜お駕籠を出なせ〜」トかごのすだれをはねあげられお。娘「エそんならこゝはお寺じやとへ。そしてマアこんな淋しい墓原で念佛誰とやらお言だけれど。私が坊さんではあるまいしどふして正座にお念佛が。くもとなへられぬといふことか。さつても野暮なおぼこ娘。此節そんな世間見ずわりのわりい子があるものか。みんながおめへを相手にして。百萬遍を勤るのだ。サア〜早く出なせ〜」ト引出されてなき聲に。娘「それでもわたしはこのくらがり。こわくつて〜」なりません。百萬遍をなさるなら。私を金澤の親類へ送つて跡でゆるりツと。棒ぐみ「どふで直に抱れて寐よふといはれるよふな好男は。一人も見へね〜この仲間。くも「さふよく。いづれにしても泣せる仕業。邪魔のねへうち少もはやく。棒ぐみ「泣せるならば本堂へ。サア天井持にかついだ〜」ト四五人よつてぶる〜と。ふるへる娘の手をとれば。娘「アアレどうぞ堪忍して下さいまし。年もゆかいて高慢など。なを憎しみもありませふが。私はいゝなづけのお方の爲に神さんへ願をかけ。辨天さまへ立ものして。男の手にもさはるまひ三年の中は戀しひ人にめぐり逢ても一所へ

は寄ますまいからどふぞして尋ねあはしてくださいましと。誓ひをたて、深いねがひ。どふやら私を手ごめにして。なくさみでもなさるやふす。どふぞ後生でござります。堪忍してお呉なさいヨ。くもなるほどなアそう聞て見りやアかわいそふに。こまつちやくれた姿をしてもまだやう／＼に十四か十五。花も咲たかさかねへ生娘。しかしそれだけなを執心。それ／＼宿場々々の飯盛さへ。杓子あたりのわりい此方等此様なこともねへ日には。無鹽のお娘の手いらずを。賞翫など、は此すゑにまたあらふとも思はれねへ。サア／＼本堂へ引ばれ／＼ト。たちかゝられて身を縮め。齒の根も合ぬふるへ聲。唄、モシ／＼どふそ此中できのつくお方があるならば。あやまつてお呉なさいヨ。手を合して拜みますアレヨウ引。たれぞ来てお呉なさいましヨウ引。泪は顔に玉の露。折から朧の雲はれて。明光々と照月に見わたす方は遙々と。目もとどかざる田圃道里をはなれし荒寺の。なほ物すごくおほへけり。これサ／＼お娘やおがんでよけりやア此方がおがむ。どふて叶はぬ此原中。自由になつて少しのうち。抱れて寝れば直にすむ。そふヨまんざらわりいことでもねへト捕ゆる袖をふり拂ひ。前後左右へ逃ながら。唄、アレヨウどふぞ堪忍してお呉なさいヨウ。そのかはりにわたしがあひらんにもらつて来た。お金か五兩ありますから。是と私が此着物も。みんなおまへさんたちに上ますから。おゐいらんに貰つた紅鹿子の此肌着。これをひとつもらへばよいから。跡はみんなおまへたちのものにして。どふぞ一所に寝ることはアレ／＼後生だからト。逃げ廻るを。追取まはして悪漢ども。手取足取引かつき軒もる月の本堂へ。遠慮會釋もあらくれ男。どよめきわたつて連立行。

そも／＼此娘は何ものぞ。これ唐琴屋の娘お長なり。いかゞして此所に来りしとたづねれば。彼おるらん此糸がはからひなり。そはいかにとなれば後見の鬼兵衛多くの借金を引請唐琴屋の家を相續なすを恩にかけ。お長に迫りていやらしく難儀させ。所詮おさまらざるを推量して。お長が艱難辛苦を退れさせんがため。以前唐琴屋の番頭なりし忠兵衛といふもの。金澤の商人となり居る由を知り。殊に其身の親元も金澤なれば兩方へ文を添て

師さまへ參詣の時を得て途より直に落せしなり。これしかしながら途中の用心まで心づかざりしは。發明なれども廓育わづかなれども旅といふに心のとどかざるは流石あどけなき傾城氣質。前後わからぬお長が娘心と察して。ふかくとがめ給ふことなかれ。

はや告渡る初夜の鐘遠里小野にこだましていと物淋しき古寺へ。かつぎこまれし彼お長。驚にとられし小鳥にもなを増りたる哀れさも。情を知らぬ雲介ども。寺の破戸を引はなち。お長を横に押倒し。サア／＼まんがちをするな圍取だぞ／＼ト。既にあやうき地獄の責。薬を數へて立さわぐ。時に後のくらがりから。そつとお長が耳に口。こなたへ来いと言葉は。たしかに女とこわ／＼ながら。引れてしりぞく娘のよふす。雲介どもは氣もつかず。鬨を争ふ最中へ。ワアツト聲かけ五六人手に棒を迫取て。雲介どもをなぐりたて／＼つ／＼聲々に引引の盗人めら。片ツばしからふんじばれ一人も逃すなくと。呼わり／＼走かゝられ。元來無道の人非人みなちり／＼に逃出す。折からお長の手を引て。あらはれ出る勇みはだ。されど月夜にぞつとする。素顔の意氣な中年増。月諸ともに横にさす。櫛も野代の本檜木。秋田といふは鼈甲か。洒落た出立の旅姿。としま、ヤヤ／＼おまへたちは最そんなにりきまなくつてもいじやアないかへ。みんな逃てしまつたのに。五六人、ばかなつらな東ツ子だぞ。コレうぬらアとほうもねへ頓智きめらだア。ヤイウしやアがれ。エへ。だれだと思ふ業法人め。つれ、ヤイ耳のあなをかつぼちつてよく聞きやアがれ。忝けなくも尊くも。小梅の姉御お由さんの弟分。古風なよふだがくりからの。龍吉さんアおれさまのことだ。また一人、こともおるかやそれがしは。小梅の里に人となり。瓦の煙にふすほれど。元業平のまふし子にて。梅のお由が一番子ぶ心。女たらしの權八さまだそ由縁のいろの。女、これサ／＼おめへたちやアあきれるヨ。きはどい所て茶番をすらア。五六人、違へねへまるで立まはりさせやアがつた。女、ほんにおまへはマアさぞこわかつたらふ。モウ／＼氣を大丈夫におもちヨ。私は小梅の女髮結。お由といはれるおてんばもの。江の島の辨天さまへ大願で月参り。役にた

ずも行過が。若イ衆達の氣にいつて。姉御々々と立られるが。嬉しいと。いふもちつと自惚。しかし今ぢやア人にも知られ餘りまけたこともねへ。女伊達らのおちやツびい。江の島からの歸り道。みんながたいそふ道くさを喰てとふとふ往來を間違たのがおまへの仕合野道畔みち森の中。藪から棒に此お寺へ。來るとおまへがすてのこと。それから急にわかいしゆと。言合した此始末。まことにあぶないことだつけ手ト。聞てお長はやう／＼に。心をしづめ胸をなで。嬉し涙に禮さへも。噎かへるこそ道理なれ。や／＼しばらくありて長まことに／＼私ハ生かへつたよふな心持になりました。どふぞ申かねました。とてものことに。私を申往ところへ送つて吳とおいひのかへ長ハいどふぞ申そりやアかならずおあんじてない。此様に若衆が大ぜいだから。おまへの身のうへもよく聞たうへは。送るはおるか行先の。請でもわりいよふならば。私の宅へ連れてかへつて。どいつが來よふがどのよふな。尻が來よふが受合て公儀へ對した不法がなけりやア。理屈のわかつたけんくわなら。憚ながら尻おした。マア何にしる夜が更ちやア。旅宿にこまるわけになる。サアみんなが此子を中に取かこんであいつらが。仕かへしの用心して。わかいしゆ「ナニ／＼も來る氣づけへはございやせん。なんなら私がおぶつて上やう。申イエ／＼兼さんや源さんには頼むめへ。榮さんか金太さんか。次郎ならば丈夫だが。其外へ娘ツ子の番は覺束ねへト。笑ふときしもまた曇る。朧月夜にやう／＼と。里ある方へ打連て。たどり行こそ頼母しけれ。

春色梅兒譽美卷之二了

唄女三四人寄合し中に米八　よね「梅次さん今の噺しにどふしてもしておこふの　うめ「そふよわりいことはいはねへから。そふしねへヨ。側に眉毛をぬいてゐる政次　まさ「ナニサまた其所の座になると捨罪をいふわな　よね「ナニもふ今日はみんなの異見について。程よくいふ氣よ　うめ「いふ氣ばかりじやアいけねへぜ。しかしおあらもおぼへがあるよ。おらアもふ幸さんの時にやアノウまのじとなり　まさ「そふよ手／＼ツツたつけ。大津屋の内儀にたいそふ世話になつたのウトいふうち米八は帯おしめて仕舞　よね「ライめのじとなりちよいとト茶碗をいだす。梅次は火鉢のわきに下てゐる土瓶をとつて　うめ「これか　よね「アレサどふも請のわりい　うめ「ワツトしやうちだト。そばにある爛德利をとり。湯吞へなみ／＼とつぐ。米八はぐつとのんで胸をたゞき。フウと息を二ツ三ツ外へはづし。齒をかち／＼とならし　よね「サアお出かけなはるんだ　政次梅次「うまく言ツて來ねへよ。米八は莞爾として出て行。

第五 齣

初といふ名に客人はあくまで。跡をつけたる雪の中。裏。それかあらぬか知らねども。何れあだなる婦多川の色の湊に情の川岸藏。戀の入船迎船。たれ棧橋といふ聲と。意氣な調子の騒唄。たえぬ世界に爰はまた。閑幽とした船宿の。二階に二人さし向ひ。酒もさへなき不調子は。どふいふ譯かわからねど。且那らしき風俗の人。藤「コウ米八手めへマア。そふ意地をはるものじゃアねへぞ。義理と人情をかんがへりやア。少しはどふかそつちから。嬉しい返事もしずはなるまめへじやアねへか。マア〜それはそふと一盃吞つし。盃猪口をいだす。米八はふせう〜に手を出して猪口をとり。だんまりで出せば。藤は銚子をとつて。藤「ドレお酌をト笑ひながらつぐ。藤「ちよつびり生姜といきやせうかねト生姜をつまんで出す。米八は莞爾して。またつまんでとり。藤「ハイ藤さんト猪口を出す。藤「イヤモウやう〜口を聞いたの。ヤレ〜骨の折たことだ。ドレと猪口をとる。米八は銚子をとつて。藤「ドレお酌をかねト酒をつぎ「ちよつびり生姜たア。私は行届かねへヨ。藤「コレサそつちはどふもそふ癪をいふから恨だといふ所をやつぱり根づよく恨まねへの。藤「そりやアそふとだれぞかけてやらふじやアないかねへ。さむしいヨ。藤「また返句をいふよ。そりやアいくらでも呼にやるがい。何とか返事してもい。じやアねへか。ホイまた言出した。われながらどうもわりい。藤「そりやアおまはんだれが来たつて。しよふと思ふ返事ならしまはアな。まただれがゐなくつても。否

ならしやアしませんわねト。いふうち下から。女「ハイお看がまりましたト。ひろぶたを二階へあげる。藤「イ〜一ツ飲ねへな。女「ハイありがたふございます。米八さんんだかまじめでゐなはいます子。どふかなすツたかへよね「ナニサどふもしねへが全體このごらアさはりよふじてゐたんだは子かたごぞんじなるべし。女「そりやアわりい子。癖になるもんだヨ。藤「マアいゝわな米こふはどふもおれせへ来りやア。あのとふりヨ。ワツト氣障をいつたの。堪忍さつし。女「ハイ藤さんありがたふト。盃を藤にさし。下へおりにかゝる。藤「マアもふ一ツのみねへな。女「下がいそがしいから。まためへりますト下へゆく。藤「いつでも賑やかだの。女「ハイト階子の段をおりながら「米八さんト聲をかけ。どふもしうちがわるいヨと心でいつて眼としかた。米八も心に合點。藤「ありがたふ。サア藤さん何か来たからお呑な。私も呑ますはト。茶碗をいだす。藤「またひさしいものよ。今日はもう何も言ねへから。落着て呑ね。茶わんもちつと恐ろしすぎるの。トやさしくいふ。藤「ナニそれ呑のじやアねへは子。二三日よふじて居たから。さツぱり酒氣がないから。今日は丁度よいヨ。マアついでお呉なせへな。藤「そんならどふでもお心任せサ。トついでやる。米八はうけて莞爾笑ひ。藤「死なざ止まひおつな持病だといひながらぐつと干て「藤さん湯呑じやアお否かへ。藤「隨分いゝのさ。藤「よかアおあがりなサアつぎますぜ。藤「マア酒と討死をするぶんの事ト請て「コウ米の字手めへ廊に居る内はこんなに酒は呑みやアしねへとおもつたつて。藤「マア呑たでも呑ねへてもなしさ。藤「コレサ〜此これへのは。誠に返事してもいゝじやアねへか。おらア今日はこふおとなしく。何もいはずにゐるのに。そつちからおかしくすると。どふもツイ疝癪にさわつてならねへ。藤「ヲやおつな事をお言だヨ。何もおかしくもどふもしやアしないは子。私も一體おそろしい我儘ものサ。そりやアもふ他人にはれるまでもなく。ずいぶん手めへでも知ツて居るのサ。それだけれどマアよくつもお見なせへな。此糸さんはあのとふり明理お方。それなればこそはじめから。何も角も打明して。ぬしにたのんだわけじやアありませんか。實におまはんの深切は。身にしみ〜と嬉しいけ

れどトすこしうるみごぞんじのとふりのわけゆゑに。どふも返事へんじがなりにくし。といつて恩おんのあるおまはんに。無得心むとくしんな
 あいさつもならずと。いろく考かへても。思案しあんの出でよ様もなし。實じつにわちきやアとつおいつ。思案しあんしてばかりいま
 はアなト泪なみだをふく。臍へらコウよしねへ延喜えんぎがわりいな。泣なてもらつちやア近頃ちかごろ氣きの毒どくだ。いつもく同おなじせりふも最
 聞き倦あた。精進しやうじんものゝこんだてはマア儘ままにして。ちつと惡毒あくどく天獄てんごく羅らか。黒漫魚くろまんぎょのさしみで油あぶらの乗のつた。あいさつが聞きてへ
 の。手てめへ最ちつとは婦多川ふたがはの水みづが染しそふなもんだぜ。まだものいひが少ちは直ちつたのがしゆせうだヨ。おれがおかけ
 て身み拔ひをして。斯かして自前じめい出居でい衆しゆになつてゐて。それ相應さうおうにこしやくなことを言いつて居ゐつた。まだ屋根船やねぶねへ首あたまから乗
 うちのはじまらねへぜ。ト米八よねが膝ひざを喜世留きせりうてつゝく

酒さけがいはする惡口わるくちも。金かねと場ばずれた人の癖くせ。戀こひゆゑえこぢを言い出すは。男をとこの常とねといひながら通者すいめかしては中々なかなか
 に。かなはぬ色いろは藝者げいしやにて。やつぱり男をとこはいくぢなく。金かねをつかつて氣きを能よしばかりしきほどあどけなきが。戀こひ
 の生根しやうねといふべきか。

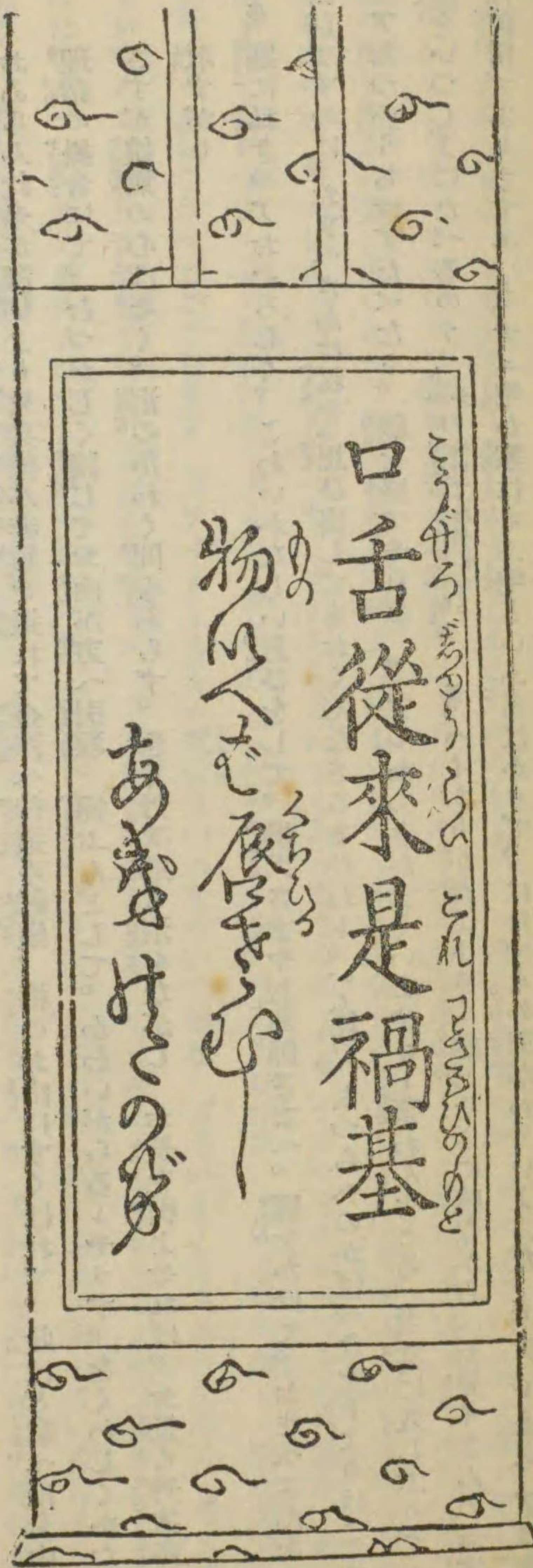
米八よねはちよいと膝ひざを脇わきへよせ。よねア、モシ藤さんあんまりいろくなことを大おほきな聲こゑでいわねへてもいゝじやア
 ないかへ。しづかにお言いなせへなト。
 三味線さんまいせんをとつて爪弾つめびきに。

「明あきの鐘かねと突きや氣きのきいた烏からすアさいも

くのうへで楊枝やうじをつかふそれにこけめが朝あなをし

嗟あ呼い疝癩かんしやくのしのびごま。看官みかんとし汐合しほあひのほどをはかりて。よろしくおかぶらの足あしを洗あひ。引込時ひきこしぶんの間まを見合みあせ。野
 暮よと化物はつものにたとへらるゝことなかれ。そも此この二階にかいの床とこの間に。誰たが筆ふでなるか一幅いっぶくの掛かものありかゝる家いへには似合にあひしか
 らねど。こゝに因よほのあるに等ひし

第 六 齣



行水ゆきみづの流ながれと人のみのさくがト口の内うちにて幾度いくたびか繰返くりかへしつゝ他目よそのめもふらず稽古けいこにかよふ一人ひとりの處女年むすめとしは三五さんごの月つきの
 顔かほ。花はなの口元くちもとうるはしき姿すがたに伊達いだての三升さんしやうじましやんと結むすびし小柳こやなぎの。帯おびも目にたつ當世風たうせいふう。行ゆむかふより年の頃とき。十
 九じゅうか二十にじゅうのやさ男おとこ。首くびをかして物ものあんじ。思おもはずバツタリ行當ゆきあたり互たがひにこれとは顔見合かほみあせ。男おとこ、お長おちやうちやアねへか。女メ、オ
 ヤお兄あにさんマアくどうしてお目に。丹に、ほんにマアふしぎな所ところであつたのふ。マアいろく聞きたい事こともあるが。爰こゝ
 じやア往來わうらいだからどこぞへト近邊あたりにを見まはし「ア、あすこにうなぎやがある。マア久ひさしぶりだから一所いっしょにお飯めしでもた
 べよふト。いはれてお長おちやうは嬉うれしくも。また恥ちかしく赤あからめし。貌かほにおほひし懷紙くわいしの包つみ。只ただアイくと打連うたれて。うなぎ
 やにこそいたりける。うなぎやいらつしやいまし。お二階にかいへいらつしやいまし。お多葉粉盆たはこぼんをおあげ申まなヨ。ト女房にようばが
 あいそに段階だんか子こ。二人ふたりはあがる二階にかいの座ざしき。表おもてのかたは多寡橋たがはしの。往來わうらい賑にぎわふ春はるげしき。丹に、寔まことにおらアおめへの事こと

を案てばかり居たが。今日らこゝて逢ふとは。夢にもおもはねへ。どふしてこゝいらを歩行のだ。何かあの廓にはみ
ないのか。長アイモウいつか中から居ませんヨ。丹をして今じやア何所にゐるのだ。つばくら口の懐紙を持って歩行か
らは。近所にゐるか。何所へ稽古にゆく。長イ、エ此近所じやアありませんヨ。小梅に居ますは。丹、小梅から此所
へ稽古に来るのか。長イ、エ銀座の宮芝さんが月に六齋。近所のおやしきへお出だから節をよく直してもらつて。不
斷は市原のお師匠さんへまいるヨ。丹、そふか銀座の宮芝さんなら節は大丈夫だ。そして市原から今日はどこへ行のだ
長、けふは稽古の歸りに姉さんの名代に。上千寺さまへ参るのでありますヨ。丹、小梅の姉さんとはだれのことだ。ト聞
折から下女茶を汲て来り。下女、いかほど。丹、アイまア中位なのを三皿ばかり焼てくんな。女、ハイ御酒は。丹、イエお飯
お飯。それともお長おめへのむか。イ、エトにつこり下女は階子の手すりの際に寄せありし衝たてを二人の脇へた
て。下へトン／＼おりて行。長、ほんに小梅に居るのも姉さんといふもござんじなひはづだねへト
おらん此糸が深切より鬼兵衛が非義を退れて金澤へ行道の難儀。梅のお由にすくはれて。此ほど廓へはお由が
理詰の掛合にて。むづかしく談じてお由が方へ引取。姉ぶんとして。かわいがらるゝやうす。をくわしくかたり
さすが娘氣の心ほそく。泪のかわく間もあらず。きく丹次郎も涙をながし。お長を引よせれば。お長も丹次郎に
取すがり

長、寔に私きやアおそろしく。こわいかなしい思ひをして。辨天さまやお祖師さまへ。願をかけて。おまへさんをし
たひますのにおまへさんは私を。思ひ出してもおくんなさるまひねト。いふ所へあつらへのかばやきを下よりはこぶ。
サアあついうちマアたべなト。飯を盛てやれば。長、アレわちきがよそいませうト茶わんをとる。丹、寔に久しぶりてお
飯をいつしよにたべるのう。トかばやきのしつぽの所は。長、ハイありがたふトさも嬉しそふに喰ながら「お兄いさんのお宅
は何所でありますエ。丹、ナニ宅か家はもふ宅といふ名ばかりで。はなすも外聞がわりいよふだ。長、アレサマアはや

く言ておきかせよ。ヨウ兄さんト少しあまへるもかわゆらし。丹、ナニほんの假宅だヨ。長、ヲヤそれじやア濱の宿の舟
川戸かへ。丹、ナニサそりやア廓の假宅の場所だはな。おいらの今居る所は中の郷といふ所だ。長、ヲヤ／＼それじやア
私の居る所から寔に近いねへ。寔にモウ／＼何より嬉しいねへ。是から毎日行て見よふヤ。丹、どふして／＼来て見ら
れるものか。長、ナゼエ。丹、なぜといつて。長、おかみさんでもありますのかへ。丹、ナニつまらねへ。そんな所か。ほん
にヨ廓の宅の湯どのより狭ひはな。長、ナニおまはんばかりなら少い宅がよひは手。トいふ所へ跡の一皿を持来り
下女、ハイおあつらへてござります。丹、ライ／＼もふ一皿大きいのをやいて異な。下女、ハイ／＼トおりてゆく。長、そし
てお宅じやアだれがお飯や何かの世話をしますエ。丹、長屋の老女さんがしてくるよ。長、わちきが行て用をたしてあ
げたひねへ。丹、ナニおめへだつても仕つけねへ業が出来るものか。そして獨者の宅へ娘が来るとわるくいはれるから
わりい。長、夫じやア私がいちちやアわりいかねへ。丹、ナニわりいといふわけもねへが。長、わけもねへならば翌は直に
まゐるヨ。丹、あしたは留守だ。長、留守でもよいわね。私の行のをまつてお出ヨ。折角たのしみに思つていまはア子
ヨ、兄さん宅にお出よ。丹、留守でもいゝから宅にゐるよつほどよく出来たおかし子だ。サア／＼さめねへうちたん
と給な。長、わちきはもふ腹中がいっぱいになりましたヨ。丹、ナニまだねつからたべもしないでサアお茶をかけてもふ
ちつとたべな。長、兄さんもたんとおあがりなそして子兄さんどふぞこれからかわいがつておくんはないヨ。丹、知たこ
とよ。長、それでもわちきがいろ／＼苦勞したのも知らずに。わすれてお出たものを。丹、なにすこしもわすれるものか。
いつかもおめへのこととおほきにいぢり合たくらひだものを。長、ヲヤだれとエ。丹、エ。ト少し行詰り「ナニサ夢に鬼兵
衛と言合たくらひだものを。長、うそばつかり。ヲヤ私きやア兄さんに逢たら。何かはなそふ／＼と思つて居たツけが。
ア、それ／＼あのおまはんのひみきな米八さん子とんだことをしましたよ。丹、次郎は。丹、なぜどうした。長、アノ子此糸
さんの客人の藤さんと色事をしたのが知れて。とふ／＼住けへに出ましたヨ。寔におほさはきてありましたツけト。

流石發めいのお長なれども。米八は丹次郎ゆへに。住かへに出しとは。心つかぬも道理なれ。丹次郎は知らぬ顔にて丹、そふかそれじやア此糸が合黠しねへも尤サの。そりやアいゝがたいそふ烟る。出前でも澤山焼そふだ。どふも素焼の匂ひがきらひだ。これには山谷がいゝの。長ア、ねへ裏でも廣くつて二階でないから烟が来ないでよいヨ。丹、下レちつと障子をあげよふト。表のしやうじをかりりと開。何心なく手すりへ手をかけ見おろす往來。米八が梅次と二人てお客をさきだて来かゝり二階を目ばやく見つけ。よね「ヲヤ丹さんまだ宅へおかへりてないか。今に梅次さんと一所にかへるから。ちつと待てお出ヨトいひながら莞爾笑ひ。酒亂の客のともして多寡橋の。方へ過行後かけ。丹はびつくりお長はかけ出し。長「ヲヤ米八さんじやアありませんか。丹「ナニ／＼米八ではねへト。口にはいへど心にギツクリ。今米八が其近邊から。かへり来らば大變と。思へば何かそは／＼して「サアもふよかア歸らふの。長ア、かへるが子。今のはどふも米八さんらしいヨ。かくさずといゝじやアありませんかト。いつたばかりでさしうつむき。泪の露はひざのうへ。袖をくわへて身をふるわし。いはぬはいふに増穂の薄みだれし鬚のほつれかみ。かほにそよぐもかわゆらし。丹「ヲヤこの子はなぜ泣のだ。長「イ、エ泣はしませんヨ。丹「それでもどふもおかしいよふだ。サア貌をふきなト手拭をやればお長は目をぬくひ。男の貌を恨しげに。見れどさすがに娘氣の。まだ添ふしもせぬ中で。おさな馴染のいひなづけ。はしたなひこといふたなら。愛想づかしも出来よふかと。思ひなやむもわりなけれ。丹「サアまたあんまりおそくなツたらわるからふ。長「ナニそれはよいけれど。お邪魔なら早くかへりませうヨト。つんとする。丹「ヲヤ此子は久しぶりて逢たのに。そんなにすねるもんぢアねへヨ。長「ハイ／＼もふすねはしません。何でも翌は兄さんエ。たづねて参ますヨ。丹「ム、来るなら晝過がいゝ。晝前は留守だから。トいふは翌は十五日。米八が妙見さまへ朝参りに来るをおそれてなり。今丹次郎が病氣も直り。身の廻り其外不自由ならざるは。みな米八が仕送りなれば。心配するも理りなり。丹「勘定して吳なヨト。手をたゞく外に客もなく小軒な宅ゆゑ。下へ直に聞え。下女が来れば代を

はらひ。二階をおりるその時しも。客を送つていそがしげに。このうなぎやへ入来る米八。客の座敷へ出ていては百味も物のかづとせぬ。そのぜんせいより自腹の我まゝ。のろけたいのが歌妓の樂屋。よね「ナニ丹さんが居さア。二人でゆるりとやらアな。梅の字サアあがんなナ。うめ「さきへ行な。よね「ナニ小用か。おいらもいこふや○下りかゝりたる丹次郎。續ておりるお長がこゝろ。そも米八と落合て。いかなるわけとなるやらん。作者もいまだ承知せず。嗟かかると時は好男子も。また人知らぬ難澁あり。必竟この後何とかせん。看官よろしき段取あらば。はやく作者に告給はんことをねがふ而已

ぼち／＼とひろみよみする梅こよみ

花の香かほれごひのきの風

清元延津賀

春色梅兒譽美 卷之三了

梅兒譽美二編序

今も昔も世の中の人の心のやさしきは千々の金にますなるべし殊に女子はよしあしに付てやさしう有たけれ家富榮えて何事も愁ひなき日はたれとても心ばへさへうつくしく恨し顔もはしたなき言葉もなく過せども家衰へて昨日より今日は貧しくなりし時誠の心は見え侍れ別て男女のなからひは翠帳紅閨の中に新枕せしその初は借老同穴のかたらしひをなし後世かけて契おくしたしみのあはれにもなつかしく嬉しくも聞きかれし約束も男の身の上おとろへては秋の紅葉と色かはり野邊のちくさとかれかれになりなんことはあぢきなくいとくまさなきわざになんむかしもろこしに孟光といふ女あり富人の娘なりけれどその夫 陵 伯春といへる人しだいにおちぶれて霸陵といふ所に世をのがれさまたのみなき時節となれども孟光はうしとせせず夫とともに彼處へ行田をかへし草を刈または手づからはたを織人にやとわれ賤しきわざをなすつゝも禮義を厚く男につかへて他の富貴を見かへらず誠を盡してつかへしとぞ嗟近世の娘たちこの半をも守り得ず義理と道とにそむきて美衣を着てひけらかし出世と思ふ人てなしも姿の花の色ざかりによしや一度榮ゆるとも凡生としけるもの浮世の秋にあはざらめや身にはつゞれをまとも心清きはめてたくも尊ふとき人といふなるべし典侍 直子の歌に

あまの刈藻にすむ虫のわれからと

ねをこそなかめ世をばうらみじ

おもしろからぬ筆くせながら金龍山人が老婆心巻をひらくの兒女達によくよみ給へと申になん

狂訓亭 爲 永 春 水誌

春色梅兒譽美卷之四

江戸 狂訓亭 主人 著

第七 齣

さて丹次郎は二階より下りかゝりたる段階子登る梅次と米八にぎよつと後を振向ばかわゆき顔に茜さすりんきの眼元露ふくむお長がうらみ米八もそれと見るより角目立こゝろをやうくおししづめ よね「丹さん待てお出といつたのに歸りそうにしておいでだといひながらお長に向ひ「アヤお長さんまことにお久しいねへたいそうに美しくおなりだとしてマア少しの中に背丈も延た事はそれじやアモウ何處へ嫁にお出ても能といひながら丹次郎の顔をじろりと見る丹次郎は知らぬ貌で 丹「ほんにちつと見ねへうち大きくなつたのう今其處で逢て見そくなつたらひだ よね「ナニ見そくなふ事もあるまいねへお長さん男といふものはどうもたのみになるやうで頼にならないもんだのう梅次さんトすこし丹次郎にあてる らめ「そりやアそうだけれどなんでも女の氣魂次第さ此方が惚りやア他もほれるから油斷をするといかないよ〇お長はさすが娘氣に表向をつくるふ愛想のなれば胸におもふ事面に出てやゝしばらく物もいはずにありけるがやがて心を取なほし 長「米八さん堪忍おしよ私は久しく逢ない人にあふと急になくなくつてもものがい はれないからツイだまつて居たヨトわらひ顔する一言は娘心にしかたなく性いづばいの世事なるべし よね「ナニ堪忍も何もしらないは子としてマア廊の方はどうおしだエ 丹「マア今にくわしく咄そうがおめへは兎も角も梅次さんにはやく酒でも らめ「ナニマアよいはねへ よね「上りしなにモウあつらへたはねへ 丹「ハアそふかといふうち誂へのう

めへがあんまりのろけるからよだれをたらすかとおもつてサ よね「フヤくやしい遊ばれるとは氣がつかなんだらめ」氣が付たらモウ出かけやう よね「ム、モウ酒もいゝのト勘定を供の男にさせずおくりなり 二人は何かひそ〜とさ〜やきながら歸り行思ひある身とたれかは知らんいよはま〜と賞らるゝその美しきが仇となり他にまさりし苦勞する娘藝者の浮沈豈岡目のおよぶ所ならんやうたひめをよめる

糸竹にみさほの節は有ながら

手折やすげに見ゆる唄女

これはさて置彼お長はよもやとおもひし米八丹次郎が斯まで深き中となり殊に男を見繼おけば我ものなりとちつけにいほぬばかりの仕こなしのみか丹次郎もまた米八とははなれぬ契りと推量ば彼うなぎやを立出て歸る道さへはかどらぬ姿を見れば猶さらにかわゆらしくもうるはしき荅の花のお長が側往來も稀な武家小路 丹「お長おめなせ泣貌をして歩行エエこれさ機嫌を直しなよトいへばお長は前後を見まはし丹次郎の顔をながめて釣さがるやうに左の手に両方の手をかけてしつかりと引れながら長「お兄いさん 丹「エ 長「おまへさんは誠に憎らしいヨ 丹「なぜ 長「なぜといつて先刻も米八さんのことをいつたら知らぬ貌をしてお出なすつていつの間にか御夫婦になつておいでなさるじやア有ませんか 丹「ナニそういふわけもないがおいらが浪人してこまつて居て殊に病氣の最中來て彼是世話をしてくれたからツイ何したのだ 長「ツイ夫婦におなりか 丹「ナニ夫婦になるものか 長「それでも末には一所になるといふ約束じやアありませんか 丹「ナニ〜夫婦にはなりやアしねへヨ 長「そしてだれをおかみさんになさるのだへ 丹「おかみさんは米八より十段もうつくしいかわいらしい娘がありやす 長「ヲヤ何處にエ 丹「これ爰にさトいひながらお長をしつかり抱寄て歩行お長はうれしくすがりし手に力をいれて二の腕の所をそつとつめり眼のふちをすこしあかくしてにっこりとわらふゑがほのあいらしさ幸ひ往來も絶たれば千話をしながら行道の横小路より出し抜に「鍋エ釜アいかけ

エ引二人はビツクリ早足に左右へわかる割下水誓もかたき石橋を渡れば春の薄氷とけてうれしき縁しぞと思ふ妹音の中の郷粹な小梅の隠れ家へ心で手と手とりかはし柱の垣根藪だゝみ寄ば人目のはね釣瓶覗かるゝかと隔たれば此方の軒に 鶯のほうほけきやうも我うへをわらふ鳥の音はづかしくたどり〜て歸りゆく

鶯の遅しと鞭やうめの花

巴

兮

第 八 齣

花鮎や釣らぬ柳へ刎て行 藤「この扇はだれのだ鮎ばかりじやアねへ餌もねへ針へかゝる藝者や女郎がいくらも有トいひながら横になつて居るところへ米八は元氣らしく二階へ來る 藤「けふは大分御機嫌だの よね「ハイサ酒でも無理にまいらずはとこせへておきますはトすこし鼻であしらひ藤からどんと居る藤は餘程酒がまはりし風情すこし調子高に 藤「ヨイ米八さん今日はどうぞその突かゝり口上は一條抜てもらはふよ突掛てよけりやアとふから此方で突かゝるのだいつても〜和らかに馬鹿になつてゐてやりやア能かとおもつてふざけてへほうでへふざけやアがつてなんのこつたへ面白くもねへ言事がねへと客の店下ばかりこれエたなおろしてたしなませられる藤さんなら小べりへ手をかけて小舟へ乗うつりやアしねへぞ女日照がしめへし自惚のお守やア手めへから出すかあきれた頓智氣だア よね「ヲヤこわいトいつたばかり床の間の柱へ寄かゝり平氣な顔付藤はぐつとせきこみ 藤「ヨいあんまりすました面アするなへト大きな聲をする よね「もし藤さんもふちつとしづかに言てもきこえますはなるほど女日てりがしやアしめへしとはそりやアモウおまへさん方のやうな粹とやら通人とやらいふ人の事亦私どものやうな自惚のとんちきは男日てりのしたやうに丹次郎より外にやアマア私が目をかけてやらうとおもふ者は一人もねへかとおもはれますはまた一人や半分有た所が トすこしおもい あゝ義理の此義理のとトなみだを もふ勿體ねへほどありがたくつても二個人へ義理が トいひかけて

ことなる 其處がやつぱり男日でのした所かへト懐手をしてうつむく藤はすこし考へ 藤コウ奥歯にもはさまつた
 どつちつかずの殺し文句でまた一芝居藤さんをたゞく氣がおつかねへの何ぼ手めへが利口そうに小さい口をき
 いてもナこれよく聞よ土場のちつともまじらねへ黄色な光る餌を付義理と恩との鎖丸をかけたらい年季の長棹を浮し
 て身儘と場所を替はりと意氣地の婦多川へさえねへ面を酒し竹細い元手の糸筋でやう／＼命を纏棹にアだれがお蔭で
 なつたのだ土段場へ直したうなぎの様にびくしやくしても齒はたゞねへぜ よねもしエ藤さんいかに六萬坪が近いと
 いつてあんまりごたくをならべるもんじやアねへは手 藤はぐつとかんし 藤なにこの女ア トきせるをうつてふりあげるよね八はち
 よね藤さんそれほど憎けりやアぶつとも殺ともおしなあんなに事をわけていふのにおまはんの胸にやアまだわからね
 へのかエじれつてへ爰ておまはんころされりやア私も餘程有卦にいつたのだ トまたちや 「そしてマアこゝの内でも金
 もふけた 藤「ナニなんだとうぬアふてへことをぬかすア、時節につれてそふなるものかへ喰染た丹次郎につなが
 つて居りやア根生までゆすりかたりも稽古のためかへ。米八は氣色をかへてかんしやく よねモシエ藤さんよしても
 おくんはないヨ假にもそんな穢らはしい事を言ておくれでないヨ私はんといはれてもいゝがいとしいかわいゝ丹さ
 んに疵がついちやアかんしやくといふも近ごろぶしつけどが命も捨る私がかゝる今私が殺されりやア此所の宅で金も
 うけたと言たのは手よくお聞よこゝの柱は米八さんが御入滅あそばしたのだと義理と實意にからまるものはけつツて
 守にかける人がたんとあろうとおもつてサその時は私も何とやら信女と名弘めをして極樂の新道へ世帯を持すはと
 てものお世話ついでに冥土とやらの店請もおまはんにおたのみ申ますと愛想づかしの有たけをならべたてたる覺悟の
 惡態側にあるあふ湯呑にて手酌のぐいのみあをつきり藤はじろりとこれを見て 藤「イヤハヤあきれてものはいはれね
 へ。折節階子をあがり来る此家の主文藏が年は五十を二ツ三ツこしても流石老こまぬ氣性も土地がらはてやかな三升
 樽子などてらを着紫合糸の細帯を前て結び白の喜世留の重たきやつを袖くゞみに持 文「藤さん今日は 藤「ヤちゃん

か此間はいつ來ても逢ねへの 文「エイ此間はちつと遠くの講釋を聞に行ますから 藤「どこへ 文「木びき町へ良齋が出
 るがまことに日本一といふ晝夜の席が出来て大入サ 藤「そふかしかしあんまり遠いのよね「ハイおとつさんあげますト
 猪口を出す 文「アイト請て下に置藤は急に立あがり 藤「ちゃんやゆるりと呑なおらアちよつと多賀町まで行て来るか
 ら 文「なぜへそれじやアわりいマア よね「ナニ私がわりいからサ 藤「わりいかいゝか知らねへがなんぞといふと義理
 づくも手めへの勝手になる義理はたてとほしても我儘に己への義理は何處でする無理と知つても男の意地おつなはづ
 みに迷つたは此方がわりいと幾度か思ひ直して歸つてもそのうつくしいしやつ面に生れ付たが其方の不運しかし是か
 らモウいはねへ野暮なことだがマア跡でちやんにゆるりとはなして見やまんざら男のおればかり無理だと定が付もし
 めへよね「マア堪忍していつもの通り機嫌を直してお歸りな文「旦那マアもふちつと藤「イエマア歸りにまた來やせうな
 んだかおかしな時宜になつて辰巳婦言の藤兵衛にどうか似よりの役まはり名さへも同じ二枚目がたき金を遣ていやが
 られわからぬ人といはれるも星でもわりい年だらうと氣が付てみりやアばか／＼しいドリヤ行て來やうト出て行男の
 心米八が察して見ればなか／＼に親兄弟もおよびなきその信切は數ならぬ此身を深くかわゆいとおもつてせらるゝ情
 のほど忝ないとおもつても初めをいへば此糸さんのいふにはれぬ情から身儘になつた大恩の金はといへばアノ藤
 さんつく／＼かんがへア、モウ／＼死んでしまひたい 文「コウ米八さんおらアくわしく知らねへがいつか中からちら
 ちらと耳へはいつて氣になつたがマアよく了簡して見なヨ今の浮世で藤さんのやうに實意の有人はめつたにはあるめ
 へじやアねへか。といつて手めへの田へ水を引やうな異見をいふ氣はさら／＼ねへどふかおめへの身の立やう又藤さ
 んの氣の濟やうな法のつけやうが有ふじやアねへか よね「誠にとおつさん有がたふ眞にうれしいおまはんの異見私も
 いろ／＼思案しても 文「サア藤さんがいやならいやにして何でもかでもこれまでは厚く世話にもなつた人あんまり
 おめへが意地ばつちやア愛敬をうしなふばかりか恩を仇てするやうなものだマア／＼おれにまかせへどうか思案があ

りやせうといふ折から米八が迎　よれどうしませうね　文「藤さんかナニ今日はもう寄もなざるめへもしお出なすつた
らいゝやうにいはいふからマア歸んなせへ　よれそんならどふぞおとつさん　文「ム、承知だヨ案じなさんなト斯ること
にはものなれたもやひの舟の解かげん汐のさしひき如才なくもつれし中へ乗込も商賣からの親父役實から柄のかけが
へをも用心する船宿とはいはずと知れし風情なりけり

春色梅兒譽美　卷之四了

春色梅兒譽美　卷之五

江戸　狂訓亭主人著

第九　齣

ことゝは心とも見ぬ憂中にまさる恨をたへ忍びつゝそれにも似たる心かなお長は獨りよ／＼と姉のお由が留守の
宿に思ひわびたる戀の欲まゝにならねばなをさらに戀慕の情のいやまさる男のうへと米八が我形らしき有形も元はと
いへば金ゆへにはど古主の此身までないがしろにするその風情また丹次郎も米八が見繼に月日を送るゆへいふにい
はれぬ中ぞとは口に告ねど心には又捨られぬ時宜なりと思へばどうぞ其身より丹次郎を活業たく思案にくれたる門口
へ見なれぬ若者三人　三人「アイごめんなせへヲヤ姉さんは留守かへ　長「はい今日はチト遠方へまいりまして在ませ
んが何ぞごようでございますか　三人「さよふサ外でもないがこゝの姉御は女達でいろ／＼人の世話をしなざるがひよ
つと此節おたづね者の丹次郎をかくまつてあるもしれぬへ尋ねてこいと代官所から殿しい御詮儀たとへ此宅におかね
へても何處か近所にかくしておき姉御が見繼に相違ないと聞ておいらが捕手の役目しかしおいら達がひ付られたは
こゝの仕合たとへ細目におよんでも又言わけの仕やうも有ノウウお娘姉さんは留守でもおめへが丹さんの在家をば知つ
て居るだらうノ　長「イエ／＼どうして姉さんも私もその様なお方は　三人「ナニ知らねへ事があるものかしもおめへ
はその丹さんといひなつて別れ／＼になったのが又此節途中で出合ていろ／＼咄しをした事まで知れてゐるぜ
長「イ、エどういたして　三人「イ、エどふして知らねへと強説いやア是非がねへそのかはいらしいおめへでもしぼつ

ておいてもいはせるヨ 長「それでも私は 三人「彌々かくしやア斯すると三人一度に立かゝりお長を引すへこゑあらゝ
 げ 三人「ヤイこの女アふさゝしいそのうつくしいしやツ面てまじくくと虚をぬかすかサアはやく丹次郎がゆくゑい
 はねへと斯だぞと雪より白き手をとらへ捻返されて口惜涙 長「アレどうぞ堪忍して下さいまし 三人「そんなら丹次
 郎が在家をいふか 長「イエゝ何とおいひなさつても丹さんとやらの在家はぞんじませんア、いたどぞおゆるしな
 さつて下さいまし 三人「たとへばへ面さらしても男の在家をいはねへければかわいそうだが手めへも同罪お役人さ
 まがお出があらばさぞこわからうと思ふから情心でおいら達がやさしく聞ば情強くしらぬといやアしかたがねへ是
 からお代官さまへ引ずつて行ておもいれ責て白状させるとはいふものゝ夫も金つく丹次郎が落度といふは畠山さまの
 金の一件千五百兩といふ大金ながらこゝで少しも才覚すりやア日延もできめへ物でもねへそれが出来ねへ日になりや
 ア丹次郎は街の頭人しかし丹次郎が身を大切に思つて金の工面をしよふといふ人はめつたに有もしめへイヤこんな事
 はいらざるお世話だサアゝしらさアしかたがねへお代官所て言わけしやれと無斬やお長をいましめて引立んとする
 表の方丹次郎に繩をかけ村の役人附そへば所の目明し二三人お由が宅の容子を見て 目「ライゝモウ頭人が此通り
 したから枝葉の者は追ての御沙汰その女はマア宅へあづけてサアゝ来やれといふ聲にお長は泪の目をはらひ見れ
 ば哀れや丹次郎はわれさへ見にくきいましめの繩もうらめし憂事の斯重なりて来るものと胸くるしくも恥かしき貌
 さしいるゝ懐の泪にしめる道もせやお長は思はずはしりいですがりなげくを押隔 目「これゝ姉へどうしたもんだ
 とが人の側へづかゝと寄たらば己れも同罪と踏かへされて倒るゝお長その間に村の人々は丹次郎を引立ゆくお長は
 やうゝ起あがり 長「アレマア待ておくんなさいヨ引丹次郎さん丹さん引と聲張あげる一生懸命姉のお由が聲とし
 て 由「コレサゝお長コレお長ぼうやこれさ夢を見たのか目を覺したたいそうひどくうなされるノウウお長さんやと呼
 びさる日覺てみれば一ツ夜昔話と流涙の眞夜中にて身は丹次郎の屍と成りてゐる

な聲でもしましたかへ 申「ア、大きな聲で丹次郎さん丹さん 引と二度ばかりいふので私も目がさめたヨ 長「エ、トびつくりは ヲヤおかしい虚ばツかりと口にはいへど胸さはぎ動氣は未だおさまらず 申「ナニおかしいわけもないはずへふしぎな縁で兄弟となつて斯して一ツ寐もわたしは誠の 妹だと思へば朝夕遠慮せず無理を言たりわが儘もおまへに隔てぬ心からそれにおまへは隠してナゼうちあけては咄さぬのだへ 長「ヲヤ何をへ 申「何をとは恨みだよおまへが寐言に言た丹さんは中の郷の當時日影の身のうへて幽にくらす詫居それも女の仕送りではかない容子その中でまた此頃はまとまつた金がなければ畠山の寶の一件でむづかしいわけになるとの事だそうだいらぬお世話のやうなれど人の難儀を身にかへて助たいのが私の心願とはいふものゝ金づくは思ふに任せぬ浮世の常わたしはとうから知つて居る他の事とは思はれまいその丹さんのさしかゝる苦勞をすくふが操とやら心の誠の顯はし所おまへも思案のつけどきじやアないかねトいはれてお長は 長「わたしはしらぬそのおはなし丹さんの身の難儀とはそんなら今のが正夢でト是より今のほなし 申「そうして見ればちつとも早く金をこしらへる都合が肝心エ、じれツてへものだノウ 長「姉さん私が身をどうぞして 申「それじやア私が鬼兵衛とやらおまへの宅の後見に立派につがつた口上がたゝねへわけになるけれどおまへの思ふ人のためとて肌身を汚すやうな勤をさしては女達と他にははれた私が外聞マア、翌夜が明たらまた能智恵も出るだらうしかし私も丹さんの話は噂に聞たゆへ何かの容子はおまへが直にたづねて来たがよからうといはれてお長は嬉しきも亦案じいる男の身のうへ思ひ過してよくと寐られぬ耳に 鐘もかぞへて待あかす戀と意氣地に迫りては粹な小梅の名にも似ず胸の煙は瓦 燒竈に増る朝霧におきて勝手へたち出る折から聞ゆる朝勤めは本中寺の壽量品お長は夫と思ひこむ丹次郎が無事そくさい壽ながかれ末ながく二人一所と量なる品こそかはれ世の中の人さまさまの物あんじ察し心のある人は哀れとしれど欲にのみふける匹婦の情なしには實の戀の要はしれまじ嗟人情を推はかれば人間萬事中庸のほどよくするはかたくもあるかな

一りんの梅に雪ふるじれつたさ
うらゝかな春をかぞへん雪の梅

浦もと 延津賀
珍香樓 小松

第十齣

丹「ヲヤお長かどうして来た大そう早く来たノウおいらは今おきた計りだ何處へ行といつてそんなに早く出て来たのだエら丹次郎がそばへすはり 長「誠にモウノ、どんなにいそいで来ましたらふア、切ない 丹「なぜそんなにいそいで来た長「なぜといつて私はモウおまへさんの貌を見ない内はどふも苦勞で悲しくツてなりましたヨ 丹「何がそのやうに氣になるのだノウ 長「なにがといつて私はマアゆふべ誠にモウいやなこわい夢を見たから氣になつて、そのうへ姉さんが何處てかおまへの身の事を聞てお話だから今朝夜の明るのが待どうて有ましたヨ 丹「またこの子はおかしい事をいふヨ夢を見たといふぐらいてそんなに驚散にさわく者があるものか 長「イ、エ夢ばかりじやアないヨおまへさんなんだが苦勞な事が有じやアありませんか 丹「そうさふだけれど何も其やうに案じる事はないヨ 長「それでも私は聞きました物を 丹「マア何にしても火を拵へやう 長「ヲヤほんに寒くツて淋しいと思つたら火がないのだぞへ私が火をこしらへますヨと立あがりたづねて出す火打箱をそれさへ袋のがま穂くちいぢりまはして笑ひだし 長「ヲヤ兄さんおつなほくちだぞへ私にやアどうもつきそうもないヨ 丹「どれ、おれが打付やう火を焚付るのはおめへも米八も下手だ 長「米八さんは兄さんの宅の勝手がしれてお出だらうが私にやア知れないものを馬鹿だから トすこしすねる是よね八といなり 丹「またすねるヨ何米八がおめへにかなふ物か何でも角でもおめへの方がおいらは能と思つて居らアな 火をたきつけろお長は火はちへすみを つ 長「兄さんほんとうにお金のいる事が有じやア有ませんか 丹「そうさちツとこまつて居るけいで火をおこしどびんをかけ 長「兄さんほんとうにお金のいる事が有じやア有ませんか 丹「そうさちツとこまつて居るけれど何どうかなるだらうヨ 長「イ、エそれでもむづかしいといふ事だから私は覺悟をして居ますヨそして今マアいく

めんじてトおてらが手をとるおもての方 侍丹次郎はゆるしてもゆるされぬはゆすりの悪漢其處動くな トうちにいるわるもの二人
 へた 侍ヤイ盗人ども丹次郎やこの娘をなんとする ●「エイ ▲「サア畠山の寶の一件 侍詮議いたすは譽田の次郎
 この近常が人には頼まぬ ●「エイそんならあなたは畠山の 侍家中としらぬたわけ者 トあみがきたよ ハ「エ、イヤほか
 に詮議の丹次郎 侍あやしい身形で人の詮さくその方どもはいづれの御家來吹貫温袍に三尺帯見れば丸腰五分月代ハ
 テ珍らしい御家風だナ早く目通りを退かずはゆるしおかぬ トてつねの扇子をとつてなきた ●「かたみつやアイ トあくたいをつ
 其跡 侍ヤイ丹次郎其方まつたく存ぜずとも手代がすへたる印形は謀判なりともそちが身のうへのがれぬ落度去なが
 ら右の金子を年々に割付上納いたすならば格別の慈悲をもつて済しくれんと同役の相だんよつて内金二十兩明後日ま
 で金役所まで持さんいたせ迷惑ならんが金高の百分一にもたらざる上納有がたいとぞんじませイさらばと計りことば
 數いはぬはいふに彌増る大家の藩中役柄の人とし見へてゆかしけれ

春色梅兒譽美 卷之五了

春色梅兒譽美 卷六

江戸 狂訓亭 主人 著

第十一 齣

鳥一羽濡て出けり朝櫻露を含し此糸は客をおくりて朝まだき霧屋が家にやすらひし表二階の迎酒とりちらしたる皿
 小鉢下へ持ゆくその跡にかの婦多川の米八が心に思はる戀衣恩に着せるにあらねども胸にあたつて此糸が この「モン
 エ米八さん知つての通り私が自まんで愚智やいやみは願がけをしたよりひどい禁物と心に誓ておりイしたがマアあん
 まりじやアありイすめへかそりやア成ほど藤さんは男心のいたづらに何とか言もなんしたらうが警どういふわけに
 しろ私がおまへに達引でこれまでにした信切を斯いふしぎになりイしてはあんまりじやア有イせんか よね「おいらん
 エそりやモウ何と恨をおつしやりましても少しも無理とはぞんじません今さら私かどのやうに申ても取捨へた言譯ら
 しいと思し召でもありませうけれどさら／＼そうした譯じやアありませんヨ この「ナニサそりやアモウ初めからして
 表むき貌を踏れる合點で世話をして上エしたのが私のあやまりでござますから よね「そふお言なはいましたは誠に私
 が済ません實に夕ア藤さんのお供をして爰まで參つて藤さんはおいらんの所へお出だとは言ずとした事でありませ
 から内所へ遠慮な私が身おいらんエは下へ頼んで言傳を申て堀の舟宿で延津賀さんに逢まして濱の宿へ泊つて今朝藤
 さんのお迎ひがてらおいらんにもお目にかゝらうと思つてこゝへ參つたら藤さんはゆふべ餘所へお出で今モウ歸つて
 おしまひだといはれて私もビツクラしてどうせうかと思つておりましたんでございますものを この「そりやア茶屋衆

となれあつた日にやア何とでも言なまし トすこしくやしき よね「その恨は中々に無理とは思ひませんけれどもまた我が身のくやしきはどのやうだと思しめす始めは實に藤さんのお影で身儘に他所行も遠慮のないと丹さんを見繼はおいらんおまへさんのいふにいはれぬ御信切その嬉しさに引かへてアノ往わたつた藤さんが女にことを搔たやうに日々座敷を茶や舟宿宅はかはれどお客は藤さん尤あゝいふお方だから義理と恩との二道を情で塞く戀の責動きのとれぬさし向ひ手詰の出合をいろ／＼と斷いふも藤さんへは吾まゝらしく思はれてもおいらんの道をたて泣つ口説つ言ぬければまた舟宿の亭主さんや相衆の藝者衆人傳に手をかへ品をかへながらモ一是きりて腹を立て呼てはくれなざるめへと思ふ翌日翌夜勿體ないほど信切にいはれて看てもツイちよつと返事の出来る譯ではなしいつも私が突かゝり愛相づかしの茶わんだけ色氣も戀もさめはてるふて寝のようじて二度三度斷りいへば見廻に來たと部やまで心づかひの土産物自まへ出居衆の私だけ抱への子供のまへもありすげなくすれば己惚が増長すると蔭言をいはれる胸のくるしさも初をいへば丹さんの貧苦をみつぐおいらんの情を仇てかへすまいどうぞすへん／＼おいらんへ御恩がへしの出来るやうと偷伽山への月參り妙見さまへ千扁のおだいもくいふその口で浮た調子の騒唄を弾てもおいらんおまへのお心いきは日に幾たびいはない事はありますヨどぞ今までのやうにひるきにしておくんなさいヨ トいひながらしんじつあこの「かんになんしあやまりイしたまさかそうとは思つても此頃さつぱり藤さんの足は遠し便りはなしうたがひいたがそんならばおめへに心が移たゆへソリヤ藤さんの癖さんす諸事に如在のない人さますが風と心がうつるといふと其處へ一圖にこる氣になるのが藤さんの持まへ夫でおツすゆへ私もマアト言て跡をいはず思ふに此おいらん發明ゆへ藤兵衛の世話にはなれどいまだ極意のまぶとはせざるものか よね「モシエトの耳に口 この「ヲヤそふさますかそれじやア半さんの事をかへ よね「アイサどうして聞イしたか この「それさますからにくふさんすトはいへ手前がつてゆへにこの「笑ふ よね「誠と小密な所へ氣がつかつしやるからモウいけな言ちやア有ませんよあれで この「あれでモ

ウらよとおふやうだと惚なんすか よね「イ、エ否でありますヨといふ折から此糸が新造いと花はいきせきと二階へ來り何か紙に書し物をいだし 花「今お針さんがおいらんにあげてくれるとよこしイしたトみくじをいたすおいらんはうろたへて披きながら この「ヲヤこりやアいつものと違イスね 花「妙見さんのさますとサ よね「アレおみせなさいヨト手にとりてオヤ二十四番であります

二		西 有 白 虎 靈		天 天 天 人 地
四		是 卽 惡 神 形		に し の 方 に あ る 人 が あ く に ん
十		家 中 不 安 穩		な ら ず と も 身 の た め に あ し き
番		萬 事 何 以 寧		そ れ に つ い て か ん な ん を す る
				事 あ ら ん お も ひ あ き ら め て 用
				心 し つ し む べ し

此糸オヤこゝから繪岸は何方に當りイす子 よね「ちやうど西に當りますだらう 花「それじやア半さんがおいらんのために この「アレサしづかになんし よね「おいらんへ何ぞ此節苦勞になさいます事か有ますのかへ この「ナニ今始まつた苦勞じやアありせんが私やアこんなおみくじは嫌ひさます今とはへわるくツても末には嬉しいと思ひがとどくとかなら 樂にもなりイすけれど何だか是じやアわかりせん悪人ではなくツても身のためにはわるいといつてあきらめられるくらゐなら氣を揉ものは有いせん 花「さうさますからおみくじはおよしなましと申イしたに よね「おいらんエ凶は吉にかへると申すかならずお氣におかけなさいますなエトいへどおいらん此糸は胸にあたりて思ひいる戀の山路やいばらの行手浮川竹のながれの身をも傾城の種といふて別に蔭たる畑もなしみな親が兄弟のために苦界の年のうち色を商ひ色をつゝしみ用心しても月と日の永い勤めに短夜の鐘をかぞへて 曉を待夜もあればながき夜の鶏

の音恨む床のうち九分のくるしみ一分の樂みそれさへ男の氣によりて盡せし情をあだにするやからも多くあるなれば
哀れといふもおろかなる嗟傾城に實なしとは板橋雜記の情にわたらず女郎の終身はとりきまらずしてたとへ三十歳の
上はこすともたゞあどけなく花やかにわけのないのが花にして折々の風情あるが眞に契情のこゝろにして素人の操を
守ると日を同じふしていふべからず必竟このすへ此糸が憂身の果はいかならんそは第三編のはじめに解べし

看官藤兵衛此糸が事によりていまだ批評をすることなけれ作者胸中に奇境をまうけてまさりおとらぬ氣ををなら
べ「米八」お蝶「此糸が實情を三幅對としいさゝか新奇の手段あり發市の日をまたせ給へとねがふのみ

第十二齣

八重といふ工手間に遅し梅の花ひらくる時はありながらまだ春風のさそはずやお長はこひのはつごゝろ知つてかな
しき今日の身はかの丹次郎がためにと奉公に出御屋敷へ召るゝ淨瑠璃語となり其名も竹蝶吉と呼かへて月待日待に招
かるゝ娘の淨るり多きなかそも宮芝萬が丹誠に仕あげし藝の間ほどよく延た島田の黒髪をきつて男が對情が今幸わい
な若衆鬻化粧をした美しさ二階の窓にたゞひとり今宵よばれしお客の好出もの浚ふて一心に

淨るりへナヲ〜姉様わしは切れいても死ねば成らぬ事が有ヤアそりやなぜにさればいの此中きた時だん／＼
の咄し。やるせも金故ひんゆへと聞たときの其かなしさどふぞと思ふ心からわしや此金はぬすんできたのじ
やはいのくるとしんじよと思ふたが親方の物ちり一ツ本ソまつにすなとの御ひけんどもやらふとゑいは
て見せびらかしてゐました。たつた一人りの姉様何ほ程かう／＼にしてもしあきはなけれど丁稚の内はしゆ
うにならずぬすんでなりとくを助けあとは直に身をなげてさいごはおぼせの野中の井戸わしやきしなにノ
死る所迄生きてきたわいのとすがり付きしやくり上げたる有縁に小梅は身も世もあらばこそ。其やさしい心

し聞けば聞けばほどなを悲しい二タ親に別てよりそなたもわしもなん行く行。わが身にくら

此家の主は老女にてお阿といへる毒婦なり元はお長が實の親唐琴屋の二階につとめし遣手なりしが強慾非道の曲も
のにてわづかの金より利をかさぬ今はかまくら雪の下寮防まちとかいへるに借宅して音曲の子供をかゝへ渡世とせし
が此せつ其者のたぐひみなそれ／＼に暇をとりてこのお蝶を二十五兩にてかゝへ諸家へ立いらせて祝儀をもらはせ活
業とはいたすなりけり方へおくりしとぞお長は以前つかひたるやり手を母とかしづきてその内證は主人とおそれ朝夕口ぎ
たなく阿らるゝ口惜さ手詰の金とはいひながら抱へらるゝをりからにそれぞと心づかさりしゆゑわが家のやり手とし
らずしてそのめしつかひ同ぜんになりし運の拙なさを日夜に歎くものび泣あはれはかなき世の中なりお阿老女は
いかつがましく階子の段をたゞきながら くまコレサ〜蝶吉々々エ、イツんぼうめコウお蝶けしやらすにて 長およ
びかへ くまいゝかげんに空耳をはしらかせエつんぼうめエ 長オヤさつぱり知れましんだわ くまモウ九ツが鳴
たアナいゝかげんにして支度をしねへか馬鹿々々しい 長それでも今日の出ものは私が語りつけねへものだからよく
浚つて行ないところまるものヲ くまエ、いはねへ事が口がかゝらねへてあるときはさらへ〜といふのにうぢ／＼し
て居やアがつてお屋しきへ出るとか座しきがあるとかいふと足元から鳥の立たやうにさわぎやアがらア何でもおれを
馬鹿にしてゐるからだア假にも親だぞあんまり口返答をしたりわが儘がしたくはしてへやうに何もかもいはさねへ
さんだんをするがいゝどうで手めへの藝ぐらゐるで二十の三十のといふ金の利合もとれるものかそれだから左文太さま
がトひひかけてはしごをあがりお長が側にすわり くまコウよく聞な古鳥左文太さまは大そうに御内福だといふ事は
萬長でも聞たじやアねへかさういふ金もちが世話をしてやらうといはししやるのを今もつて返事もせず。オヤなんだ
モウ涙ぐんで居るのか何がかなしい何がくやしいのだ不吉な 長イ、エ今まで浚つて居た長吉殺しの所があはれだか
らツイ涙が出たんであります くまフウ引手めへて語て手めへてかなしいのかどうぞ聞人がその半ぶん情のうつるや

うならいゝが廣場へ出して押あはしたらだくわしをくれる連も出来めへ少し小長くかたられたら聞人は欠伸で涙だらうまだしも目鼻だちがまんぞくて色の白いがお仕あはせそれゆゑ此人さまがたまにやア言てもくださるのだ藝で立派な身形は出来ねへとサかういふのもおめへの爲だ何の今どき十人なみて旦那の二人や三人ぐらゐとらねへたわけがあるものか 長ずゐぶんお客を大切に勤めて淨瑠璃を精出しませうがどうぞ旦那をとるの左文太さまのお世話になるのといふ事は堪忍しておくんさいヨ くまゝいんにやさういやア此方も意地だ手めへ勝手を言しちやアおかねへコレ淨るりを語り候ウぐらゐて三十兩からの金を出すものがあらうと思ふかまさかの時の用心に受取である二枚の證文旦那がいやなら戀が窪の廓へやつて年一ばい生れ故郷のなじみの中で苦界をするも亦よからう旦那はいやだもふさ／＼しい 女アレサ母さんモウよいわね出がけにおまへが小言をおいひだと氣にかゝつておざしきの機嫌もとりにくいヨ くまゝ口ごうしやなとりにくゝは往ずといゝヨ。ヨウ小言をいふと濟した貌で居るが大かた其方の腹の中ちやア元主人だといふ氣だらうがそりやアなるほど六七年いぜんにたしか一年ほどよんどころなく頼まれて唐琴やの女郎衆の世話アして居た時もあるが何も奉公人ときまつて勤めて居やアしねへヨへ、何すぎた昔がこわいものか 長ナニ私がそんな事を思つて居やアしませんヨト口にはいへど心には無念といふもあまりあるお阿が雜言娘氣に迫るなみだのはらはら／＼折から表の格子戸あけ武家の使と見へたる男「ハイチトおたのみ申ます梶原のやしきから參りました蝶吉さんの迎ひでござります くまゝハイ／＼これはモウ大きに御苦勞さまサアヨ蝶吉はやく支度をしねへかマアお茶でもあげませう今日はお客さまは大ぜいさまでござりますか 使、エイお客より藝者衆の方が澤山でござります櫻川善好櫻川新好湯又話家では龍調に柳橋清元では志津太夫に壽女太夫延津賀踊りでは西川扇藏義太夫は此方のお蝶さんに小てん何でもマア大さわぎさす くまゝ「ヤヤ／＼そりやアマアおもしろからうね 使、イヤ／＼まだあるはへおらが旦那の御ひいきの福多川の米入梅次トいふおからからお蝶はしたくして二階よりおりきたりこれを聞いて 長「ヤヤ米入さんとやらも

春色梅兒譽美卷之六下

お出だとかへ くまゝマアそんな事をきくよりわすれものでもねへやうにしるさやうならモシどうぞ願ひ申ますモウモウ餘所の子供と違つて氣が付ねへてこまり切ます 使、ナニサおツ母そう言なさんな娘子供のでき過たはわりいおぼこな方がかわいらしくつてよふござりますサア參りやせう子 長、ハイいつて參ります 使、ハイさやうならイヤどうて今日は晝夜になりますヨ くまゝ「エイそれは有がたふお蝶氣をつけねへヨ 長、アイと出立風俗は梅我にまさる愛敬貌上着ははてな島七子上羽の蝶の菅縫紋下着は鼠地紫に大きく染し丁子菱襦袢の衿は白綾に朱紅で書畫の印づくし袖は緋鹿子帯はまた黒びろうどに紅の山まゆのくじら仕立しかも目につつ三升格子の腰帯はおなんと白茶の金まうる勿論巾は一寸三分五分でも透ぬ流行に野郎びんなる若衆鬘げに羨しき姿なれどもお蝶が身にはつづれにも劣る心で樂まぬ是も浮世かまゝならぬ座敷へこそは出にけれ

梅兒譽美二編序

夫聖人は物に凝滞せず今狂訓亭の主人は物に仰天せず騒がしき市中に住ながら悠々然として能與世推移る人情を著せしは和漢の理窟くさき事を奪體換骨したる物にあらざ又衣を盗て小袖に仕立し様に先哲の力を借し物にもあらずこは只意氣と世の流行を專としたれば色も香もある梅唇春を知らず這小冊今三編に到て首尾全く整ひかく綴し言の葉に花の作者の毫すさみは悉意氣にして賤からず且わかりよくして優なる所あり實に奇々妙々と謂つべし然を爰に予が序を添るは所謂玉に漆を塗り黄金に箔をおしの強くも毫を採て可惜幣を費はこれ皆蜻蛉の所爲とみゆるし玉へかしといふ

故十返舎一九門人

癸巳の孟春

金鈴舎一寶述

春色梅兒譽美卷之七

江戸 狂訓亭主人著

第十三齣

戀ゆるにやつ姿も誠と實。彼婦多川の米八が。今日召れたる梶原の。抱屋舗の龜戸村。茶會に寄來る客人へ。酌取役の彰簡。一座揃ひし大寄のその供部屋にしよんぼりと。人目つくろふ箱持に。なつて來りし丹次郎。待草臥て勝手より。庭につゞきし花畑月の明にうかれつゝ。思はず庭の端のかた。小高き岳に物好せし。放れ座敷の縁側に。登りて見れば泉水の。向ふはさざめく廣座しき。終日過せし酒宴に。客も亭主も打混じ。取亂したる無禮講。手にとるごとき大さわざを。詠て在しがうとくと。寐氣もよほす時しもあれ。息も聞しく欠來る人俤。何事やらん素足にて此方の枝折戸突ひらき。欠込むはづみ立上る。丹次郎に行當り。互にびつくり月影に。すかしながめて「丹さんかエ丹ヲヤ〜お長か。どふして此所へと問れても。しばし泪に口ごもりて。返言せざれば丹次郎。障子をあけて小座敷の。うちへ抱入れ介抱し。丹ヲ、大そうに動氣がするのト。胸なて下せば心をしづめ。長吉「ア、寔にこわかつた。それはそふとどふして丹さんおまへは此所にお出のたへ。丹「エおれか何ヨエ、長「米八さんを案じて此御屋敷へも一所においでか。丹「ナニ〜そふいふ譯じヤアねへが。米八にすこし頼んだことがあつて來たのだ。そんなことよりおめへはマア。どふしてこゝへ逃て來た譯だト聞れて。お長は丹次郎が膝により添。長「今こゝへ逃て來たのは。此御屋敷の御用人。番場の忠太さまの若旦那。忠吉さまといふのが。いつもわちきにいろ〜なことをいつて。無理に自由

になれとつて。寔にモウ／＼否て／＼ならぬのに。今日お客も何も酔きつて。正體なひのを幸ひに。先刻からつかまへて。こまりきつた所へ。隠ぼが始まつて。私が隠れたお湯殿へ丁度また。忠さんが隠れに來て。いやおふならぬ手詰といひ。眼をすへて脇差に。手をかけたから。一生懸命に突倒して參つたが。いつまでも此所にはいられず。どふしたらよかるふやら。丹「そふか。それは困つたものだ。しかしこの御用人の若旦那なら。始終おめへの爲にもなるだらふから。機嫌の直る様に。長「お兄いさんといひながら。丹次郎の顔を見つめ。長「それでは私がお客や何かのいふ事を承知でもすると思ひか。宅へ歸つて斯ういふわけと。咄せば邪見な母さんゆゑ。金になるなら心に隨へ。言事きけと欲心ばかり。殊に常々旦那を取の。宅へ遊びに來る人の。中もお錢の有人へは。おもしろおかしく挨拶して。何ぞもらふ胸算用でもしろのといつて。朝夕否なことばかり。それもわちきはおまへさんへ。およばずながら。志を盡すつもの奉公と。泪を隠す座敷の勤め。どふぞかわいそうだと思つておくんないヨ。丹「そりやアモウ少しの間もおめへのことを忘れやアしねへけれど。米八と違つて。奉公先へいかれもせず。遠慮して居るから。猶々戀しひはつるがどふも。長「よいヨ。私はどふて今に死してしまふから。米八さんと中をよくなさいまし。丹「なぜそんな事をいつて腹をたつのだ。長「なぜといつて兄さんは側にお出でないから。御存はあるまいけれど。今私が居る宅の母さんといふはね。元は遣手のお態どんでありますヨ。そしてモウ／＼意地がわるくツて口やかましく小言をいつて。寔につらくツてならないけれど。その中にはどふかしてお兄いさんと。一所になられる事もあるだらうと。當もないことを便にして。辛抱してゐるのにおまへさんは米八さんばかり思つて斯してお屋敷へまで送り迎ひにお出だものを。とても私は苦勞したとつていけないからはやく死んでしまふヨ。丹「そんなつまらねへ事をいふもんじやアねへはな。斯して米八のはうへ附て來るのも。金の都合をはやくさせて。おめへをお由さんの方へ一旦歸さねへけりやア男がたたねへ。といふは表座敷。實はどふも氣がもめてならねへ。長「なにがエ。丹「何がといつて一日増に仇になるおめへを他

中へ手放して置が氣になつてならねへ。どふも他が只はおくめへとおもふと夜も夢に見たまらねへ時なんぞがあるものを。長「ヲヤ啞ばツかりにくらしい。丹「ナニ啞じやアねへ。丁度今夜の様なことがあるから。油断はならねへ。長「イエ米八さんが氣にかゝるものだから附てお出のだヨ。丹「ナニそうじやアねへ。おいらの事よりおめへがだれとか約束して。此數寄屋で待合せるのだから。邪魔になるとわりいから。おいらア供部屋へ行ふト立あがればすがりつき長「ナゼマアそんなかわいそふな事をお言だねへトいひつゝ、泪はら／＼。身をふるはして泣貌の。目元にほんのりあかねさす。それさへおぼろにわからねど。いだきよせて丹次郎。丹「じやうだんだヨ堪忍しな。ほんに今までしみじみと。二人ではなしもしなんだが。おいらゆゑに此苦勞。さぞつらからふが辛抱してくんな。其うちにはどふかしておめへをとりかへすから。長「ナニ今無理に兄さんの。お側へ行ずとよいけれど。二日置三日おきぐらひにちよつとて。貌が見られる様にしたいねへト抱付たる鶯かづら。色づく秋のすへつかた。小夜ふけわたる虫の音の。外には座敷のはやり唄古きをまたも繰返す。糸おもしろく連弾に

丹「尊にも氣だてが粹でなりふりまでも。いきではすはでしやんとして。桂男のぬしさんにほれたがえんかエ、丹「ありやアたしか婦多川の政吉さんと。大吉さんではねへか。長「ア、そふでありますヨ。丹「おめへは何ぞ語つたか。長「ア、仲町の今助さんと掛合で。琴責をかたりましたヨ。それだけれど今夜のような。そふ／＼しいお座敷では。義太夫はどふもじれつたいやうでありますヨト。○○○○○○○○。前後わすれて貌見合。何かいひたき心と心。また座敷にて。ド、一の。間ほどもさすが藝者の調子。

うた惚れてこがれた甲斐ない今宵あへばくだらぬことばかり
 へおもふほど思ふまいかとはなれてゐれば愚痴なことだが腹がたつ
 長「アレお聞よ。うたにさへあのよふに唄ふものを。殊にお兄いさんは米八さんがあるから。私の事はどふしても

みなそうすると此おしろいは能薬がはいつてゐるから顔のこまかい腫物が治るよそして此繪をやるから坊さんにならねへか 秀「わちきやアいやト顔をしかめ 仙女香ばかりおくないまし 青「ヤヤ／＼この子はヨ坊さんにならねへと その頭の瘡腫が治らねへヨそれが今に眼へてもはいつて眼くらにでもなつて見ないけやアしねへ言こときいて坊さんになんたト言れて秀は考へて居る青坊さんになるとおいらが又可愛がつてやるヨ秀「そんならぼうさんになりますから 實正に仙女香も晝もおくんなましエ 青「ア、いゝ子だのうサアいたくねへやうにすつてやるからトいひながら明さしきへつれて行てたちまちくり／＼坊主にする秀は頭上に手をやつて見て泣出し 秀「わちきやアいやでございませ繪を返しイすから前の通りにしておくんないましヨウ引トなく 青「ばからしい剃てしまつてどうなるものかトわらひながら「千代春さん／＼ちよつと来て見なましトかけて行跡に秀はおろ／＼涙折から聞ゆる外座敷の唄へ憂ことの數やつもりし戀の山登りつめたる二人が中 略○此方のさしきのおいらんは年ごろ十八九きりやうは故人の路考を生うつし髪は割唐子に結てさしものも立派に見え袴元雪より白くあらひ粉にて磨あげたる貌へ仙女香をすりこみし薄化粧はことさらに奥ゆかしく唐更紗の額むく黒びろうどと白茶北京毛織の平帯をしめ夜具をたゝみて座敷きれいに片寄疊の上に片ひざ立て居る客は息子株 尤妻子のある身分風俗はこゝに略すはやくも九ツの時至り家内何となくそふ／＼しく番々の新造内しやうの床を延て聞をつくるふ亦も聞ゆる外の淨るり 無量壽の佛のをしえ聞ならくさればはかなき朝貌も千年の松に枯残る無常の風の吹とちよお花をつれて半七が△答「アレあの淨るりはお花半七が情死のところ名も似寄たるおめへは花山 女郎ぬしも似た名の半兵衛さん 半「ア、身につまされた文句じやアねへか 花「他に知られいせんうちに早く殺しておくんなんし 半「ホンニそれ／＼人の見ぬうちちつともはやく少しの苦痛しんぼうしやト屏風を手はやく引廻し刀を抜て半兵衛は既にこうよと見えたる所にたれとも知れず障子の外にて「了簡ちがひさつしやるな死て花は咲ませぬこれを見たうへ兎も角もト障子をほそめにおしあけて二人が中へ投込一通これ花山が年季狀半

兵衛は手に取上とツくと讀てほつと息 半「こりやこれそなたの年季狀 花「たしかに今のしはがれ聲は花町さんの客人で宵に上ツた番頭風俗私キのことをいろ／＼と聞なましたお方でござんす 半「ハテナアそれじやア忠七があいもかはらぬ信切か 花「その人さんはなんさんすへ 半「家内のしまりの重手代親父が秘藏の白鼠その名も忠義の忠七がハテ心得ぬ此場の始末 花「この證文が有イすれば死なてもよふおす半兵衛さん 半「ホンニこれでは死すとも誠にこれは（作者曰）めでたし／＼

ト讀おはつて米八が 米「ヤヤにくらしい作者の癖だヨモウ此あとはないのかねへと獨言いひ藤兵衛を見れば酒ゆゑ正體なくねむるいびきの聲ばかり 米「ア、此本を見るにつけ心が／＼は此糸さんアノ氣性だけ今更に引もひかれぬ繪岸の半さんお二人ともにひよつとマアこの本に有やうなことが 藤「サアあるめへともいはれぬへ 米「エ、藤さんお目が藤「とふから覺て開てゐた。よし聞ずとも知つてゐるアノ此糸が突出しから世話にもなツた繪岸の半兵衛零落しても突出さず義理と端手とは二道に諸分を知つたおいらんと氣性を買た此藤兵衛をふして見ればヨウ米八マア此糸に義理はいるめへ 米「よもやと思ふことまでも行届たおまへさん心は惚ても女の意地どふも返事の出來ない義理と相かはらずだが堪忍して 藤「成程情のこわい子だぞトいふときしも堤の上にて子どもの聲「おつかアや御免だヨウ引 作者狂訓亭がこの草稿をつづるの日わが草庵にあそびうしやの駕向越の舟の文段をよまれて友人のざれうた

枯野見て牛島かへる舟さむみ
乗かへたきは馬道の駕籠

琴通舎主人

春色梅兒譽美 卷之七了

金龍山人 春 水再識

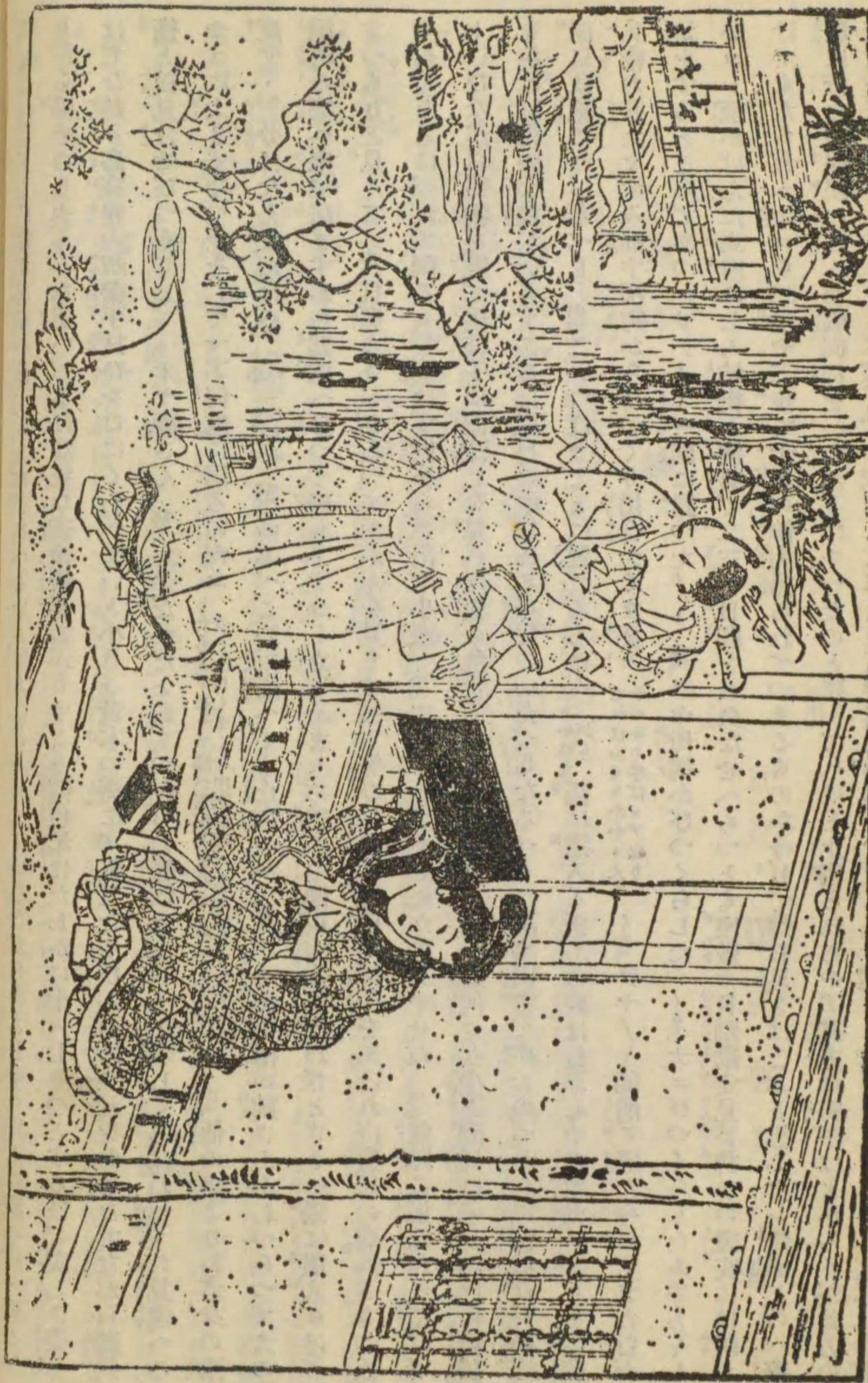
春色梅兒譽美 卷之八

江戸 狂訓亭主人著

第十五齣

住ば繁花の諺も今は誠の並家鄙にはあらで雛人形の姿に等しき美婦人の隣垣歩行は梅が香の傳ふ堤の春の風竹屋も呼て向越自由自在の釜の湯が風雅と洒落た茶會亭に。何某隱居何の寮と横木の垣根建仁寺柴の戸漏る、鶯の聲うるはしき初日影朝湯が出来るを自慢とはすこし開けぬ片折戸密と立出ねむさうな貌に莞爾愛敬をこぼせし水か薄氷駒下駄ならず田圃道音さへ高き左り棲は小梅あたりの名取の娘通ひ稽古の朝がへり所かはれどかはらぬは根下番島田の當世風品やさしきはおのづから江戸者の隅田川呑明したる平伊輪の庭下駄はいて木場の藤兵衛幸富久寺の垣にそひ朝湯の出来ぬを口小言 藤、どうもこつちが無理だけれど朝は湯へ這入らねへうちは氣がすまねへをりをいくちなくしながら申、モシどうも湯は豪質が一番ようござへますしかし今朝はおめへさんすてきにお眼がはやくさめました手 藤、呑倒れたけれど寐入りはしねへものを時に湯は出来たらうか 申、モウ明きましたらうそのかはりまだ女湯が湧ねへだらうからわるくすると腫眼縁の藝者が箱まはしに浴衣を持して来て今朝は化粧をするのも太義が船で前へ歸りたいねへなんぞといつて居て狭い流しを糠だらけにして居ませうぜふけへきな 藤、といふのは假名實はその藝者がおめへの貌を見てオヤ由さんおまへもゆふべは此方かへ何處にお出だかさつぱり知らなかつたヨ悔しいねへといはれるつもりで内

藤、イ、ヤなんぼ櫻川善孝の息子でも女ぎれへといふ請人はあるめへトいひながらむさしやの向ふの湯の前へ来るをりから湯やのしやうじを明いづるは意氣な若衆湯あがりすこき櫻色年はたしかに十六七ぞつとするほど美しき姿もはてな替り島寐巻の細帯手拭ひを口にくわへていと小さき黄木の櫛にて亂れたるびんのほつれをかきなでながら藤兵衛と貌見合せびつくりして「オヤ藤さん 藤、オヤだれだとおもつたらお蝶ばうヤレ」久しくあはねへうち見違へるやうに大きくなつたそしてマア何處に居るのだエ トちとまりて藤、おめへさんおめへのしんせつも 申、他の事よりわが身の落度サ、言分はなんとだエへ ト小こゑにい 藤、ゆふべこの近所へでも止宿のか 藤、イ、エ小梅の姉さんがわづらつてこの横町の寮へ来て居ますから其處へ參つて居りますヨト立とどまりて咄の中櫻川由次郎はわざとささへ湯に這入りはづすつもりと見えて 申、旦那さきへまゐつておかんを見ますぞト笑ひながら湯屋の障子をあければ敷居の溝あさきゆゑぐわらりとほづれて倒るゝを構はず内から飛出す小童 小、こちやかまやせぬかまアやせぬ 申、氣障に遊ばれるやツサトいひながら着物を脱て出格子に置流しを見れば板の色青くして井戸がはの如く通例より少く溜桶に遣ひかけの糠袋をかけ紅梅の小枝がいてあるは風呂の中にある小兒のいたづらなるべきか萬事因會て亦おのづから風流に江戸の湯屋には絶てなかるべし 申、こいつはまことに透てゐるはへトいひながら湯に這入る折から表はむかしやの垣根によりそふ藤兵衛お蝶たゞずみ咄す横町からびつくり出合おくま婆を、これはおてらをかえし、くま、ヤヤ、能所で逢た今日もまたむだ足をするところであつたサア、一同に歸つた、藤、ヲヤ母御かびつくらした、くま、ナニびつくらしたふさん、しいコレ能かげんに馬鹿にしる姉御が病氣で二三日日間をお臭なせへもつとも座敷の日割勘定見番拂ひの晝夜には降かけてもたらねへ金コウ二歩や三歩で十日の餘引揚られてつまるものか今日で幾日足をはこぶと思ふヤレ醫者どのへ薬取に行たの保里の内へお張御符をいただきにやつたのと延引てへほど止留られちやア其方の勝手はよからうが此方の腹が日ぼしにならアサア、直に連れて歸る ト立かゝりたる悪婆が邪見お蝶はかほを、藤、大きに延引になりましたが看病する伯



母さんが兩三日の中に来るはずだからどうぞそれまで くま「イ、ヤならねへ途方もねへ ときわけなきを願ひま コウお
 ばさんくはしいわけは知らねへがこの子は子どもの事だから姉御とやらに掛合て連れて行なすつたらよからうじやアね
 へか くま「ハイおめへさんは 藤見わすれたか知らねへが唐琴屋の二階じやア少たア人に知られた藤兵衛紋目物日も
 相應にして置た。コフ此糸が座敷では随分おじぎを澤山させたぜ くま「ほんにあなたは木場の旦那 藤おれを旦那と
 いふよりはお喋は貴さまの元主人それをなんだか口ぎたなく子どもとおもつて輕しめたらあんまり冥利がよくはある
 めへトいはれてしよげたるおくま婆々少しひるみて見えたりしが心をすゑて藤兵衛にむかひ くま「モンおめへさんは
 この子の世話でもなさる氣で御親切におつしやるのか子元はともかくも今じやアたがひに得心づくて表向は親子まさ
 かの時は抱への奉公人しかも一切わたしがまかないで手取りに渡した二十兩喰雜用から元利の金がすつかりそろつ
 て返つたら證文をあげやしやうしかしこれでも小さいやらしく密男があるから御勘辨ものだト齒に衣きせざる一言にこ
 らへかねたるやまとだましひまけぬ氣性の寛活富仁者をも藤兵衛が今さらに途中で出合たれば ぬ意氣地となり 藤「コウ
 おれにやアさつぱりわからねへが遣手婆々や引手の伯母御にはりこまれちやア男が立ねへトいふのはやぼなはなしだ
 が實はおめへが可愛そうだ乗掛つた船じやアねへがもやひの綱を引とめて濟すましを付けてやろうコウ母御今日はマア
 お喋をおれに預けなせへ といふところへくる日良伊輪の女ゆかたを 女「ヲヤまだお湯にいらつしやいませぬか 藤「ワイゆかたか
 こりやアお世話イヤ調度いゝ處へ来た けは女はそうくかけ出してゆく 藤「藤さんまことにお氣の毒でございます トおじく
 風呂よりはさくら 由「旦那わたくしはモウあがりませぬ 藤「ワイ由孝チツト面倒な事が出来てきた。マアおらア湯は後に
 川が格子をのぞき しやうヨ トいふところへくるいぜん女かみに包みしものを藤へ 藤「サアいづれおれが仲人になつてやるから二三日これ日延
 をしな トわたせしかねはたしかに壹兩お くま「イエナニ是じやアあなたへお氣の毒だナニわたくしだつても理さへわかれば
 何もさうやかましくいふ氣はござりませんが 藤「よしサ〜いづれにもおれが呑込だから兩方の爲にわるかアしねへ

トおくまをばおひはらひお蝶をつれては 蝶「まことにマアひよんな事でお氣の毒な。どうぞ御堪忍なさつて 藤「なにつまらねへあやまるわけもねへ。さだめて意味も有たらうが此方が氣ぢやアお阿めは此糸なぞも目を掛たおめへの處の遣手じやアねへかたとへ何でも元主人の娘のおめへをあんまりこなしした仕打だから持めへの積にさわつていらざる世話をやき身の上をくはしくはなせば元來富福の寛活ひかぬ氣性の男達小梅のお由が仁俠の噂に猶さら捨られぬ同意の合しも縁の糸引と知らねど藤兵衛が 藤「そりやアマアとんだ苦勞な身のうへだ可愛さうにしかし案じねへがいゝ是からおれが姉御にあつてどうか婆々方が方を引離てやらう トいふうち酒さか 藤「コウお飯をはやく持て來な此方はいゝが此子にはお飯の方がよからうトキニ由孝はどうした 女「牛の御前さまの所に 藤「さうかなぜだらうハ、アわるく氣どつてはづすつもりだなはやく呼んでくんナ 女「ハイ——ト勝手へ 蝶「お酌をいたしませう 藤「ナニ〜かまはずにお飯をはやく喰てさきへ行な姉さんが案じて居るだらう 蝶「イエナニ上專寺のお祖師さまへ直に參つて歸るつもりにそう言て來ましたから 藤「ナニ朝湯から婦多川へ直にか 蝶「イ、エナニ土手下のアノお屋敷の際の 藤「ウ、やつぱり小梅の瓦を焼手前だのしかしそれでも餘程あるの 蝶「三町ばかりありますやうが此所等では衆人隣家へ行ぐらゐに思つて居りますヨ この時膳も出 斯て是よりやゝしばらく酒宴ありて後 申「旦那今日は少しの中おひまを戴いてもよろしうございませうか 藤「ム、なぜ何所ぞ約束があるのか 申「イエ鯉丈と茶利屋と私を一座にするおざしきがあるからと此間中から里八がやくそくをいたしました 藤「ハアそふかそんならてうどいゝおれもお屋敷の御用があるから今日は一日まじめにならふモウいゝから直に行ねへ 申「イエマアお晝過からてもよろしう 藤「ナニ〜おれもモウ爰を出かけるからいゝよそのかはり一寸ひとつおたのみが有やすこゝから向ふへ乗切て濱の宿の川岸へ言傳をしてくんねへナ 申「へイ延津賀さんの所てございませうか 藤「そうサ〜夷講には間違ひなく來るやうにそしての宮戸川のお鐵も來るはづだからな

らふなら一所にさそつて川岸から船で來てくれろといつてくんナ 申「へいかしこまりましたそんなら御免を願て欲ばりにイヤ姉さん御ゆるりト 藤「五がかほを見てほり出しものをした 藤「コウ〜惡推ばかりせずと濱の宿へ寄てくんナよ土手から向ふへわたりは渡りましたがツイ失念をとお株をやつちやアいかねへぜ 申「ナニつまらねへ事をおつしやいましその御用ばかりで乗切ますものをイエ向島も自由になりました手渡り越の舟が今じやア六人でかはり〜に渡しますぜ 藤「くわしく穿つの船人の數まではおれも知らなんだ昨今まで竹屋を呼に聲を枯したもんだツけそれだから故人になつた白毛舎が歌に〇 文々舎側にて當時のよみ 人なりし萬守が事なり

須田堤立つ〜呼と此雪に
寐たか竹屋の音さたもなし

藤「この哥も今すこし過ると。こゝは山谷舟を土手より呼て堀へ乗切し頃の風情を詠りと前書が無とわからなくなりやすイヤこれはしたり出舟のもやひを引けるやつサ 申「いつそ今日はよしませうか 藤「ナゼ〜 申「すこし跡の幕が氣になるやうで後髪を引れるやうな心持に 藤「馬鹿をいはずと早く行ねへ 申「さやうならば思ひきつてへイ御機嫌よラト立出る土手へ出口の木戸の口 内大勢にて 男女「へイ御きげんようへいさやうならヲヤ由さんばかりお歸りのかエ旦那はお跡からかへ 申「そうよ 女「どうりて出しぬけにお立たと思つて 申「旦那を歸しておれを置たからう 女「ヲヤマアあきれた 申「うちばな子だらう 女「藤さんエ由さんがあんな事を申ますトおくざしきの方へ 時まさば春正月十日あまりのことにして。南枝やう〜ほころぶる梅曆のころになん寶福寺の巳の時の鐘ボウん〜引瓦焼烟霞と俱にうすく消今戸に河岸揚の材木の音聲風の間に傳へて遙に定使を呼ほらの貝の音ブウ引〜

第十六 齣

さて小梅の里に住し於由は久しく病床で洲崎の邑の伯母なりし寡婦の宅を假住居家主の伯母は古郷の本家に據
 なき用ありて此程家にあらざれば留主居がてらの出養生今日は少しく病氣の怠りしゆゑ徒然をなくさむ爲の物の本開
 く兩戸に春の日の閑和なるは影うつす障子の梅の粹な身もさすが女のこしかたを思ひ出してつく／＼と心ほそ音に鳴
 鐘は金龍山の巳の時にて耕地を過る商人の聲 辻賣白酒／＼引本ようかん／＼。木精にひびきて遙にきこゆる折こ
 そあれお蝶は木場の藤兵衛に打連立て竹垣の開戸明て 蝶姉さん氣色は何ともないかへ歸りがいつもよりおそかつた
 らう子トいひつゝ這入中戸口藤兵衛にむかひ 蝶「ママこゝへお上りなすつてくださいましたいひながら奥へ行およし
 に藤兵衛が譯をくわしくはなしければ 申「フウムさうかへそれはママ御親切に有がたい事だはやくこちらへお通し申
 な 蝶「ハイトお蝶もうれしげに次の間へ立出 蝶「藤さんどうぞこちらへお出なすつて 藤「よししかへお氣持の悪いに
 申「イエナニ今日はモウ大きによろしうございます御遠慮なさいませんでどうぞこちらへ取亂してをりますからお出
 迎ひ申ませんコウお蝶ばうやそこへはやくママお茶の支度でもおしヨ 藤「イエ／＼おかまひなさいますなトあいさつ
 しながらお由が座敷 藤「御免なさいト坐につけばまづこちらへと上の座へすゝめてたがひに貌見合といぶかしき風
 情なりしがお由は胸をおししづめ常には似氣なく涙くみ 申「あなたはたしか七年以前佐倉の宿の榎屋の宅に成田かへ
 りの御泊りて 藤「ほんにそうだつて降込られた奥二階酒の相手と頼んだがかへつておめへの難儀となつて 申「ほんに
 その時あなたには何にも御ぞんじない事を外目妬心の押掛喧嘩なんのはかない旅藝者とわが身でさへも恥かしく思ふ
 わたくしに浮名を立られさぞおにくしみでございませうとお詫をしたのが縁となつて 藤「おつなはづみと思つたがま
 んざら木竹の身ではなし終おぼつかない當座情 申「江戸で逢はふとおつしやつたを樂しみにしてその後はわざと氣隨
 の俠客心の中でははづかしいと知りつゝ旅から歸るより三味線捨て結つけぬ女髪結となつたのは萬一おまへさんに
 逢つた時薄な活業いたしたませぬ男の機嫌は猶の事とりそうにも仕まいとは自惚過た操とやらどうぞ御推量なすつてく

ださいましと誠をあらはすお由が風情思ひ餘つて遠慮する涙の眼元言葉かずいはぬはいふにいやまさる情の色香粹な
 程察し心に藤兵衛は 藤「ほんにママ夢を見るやうな心もちだ佐倉で逢たその時はたしかおめへは十九の歳で厄年だか
 ら成田さまへ參詣に行路次親子連の旅かせぎと聞てたしかに薄情の風に吹流されてすれからしと思ひの外に藝も身
 も立派な座敷の取廻しトいはれておよしはにつこりわらひうれしうに 申「アレママにくらしい七年跡もその調子の
 嬉しがらせを眞にうけて今日まで盡した心の操有がた迷惑とお思ひだらうがどうぞかんにんしておくんさいましヨ
 初へん二へんにしるたる お由に似合ぬその風情こそ世の中の女の情にてよきもあしきも強きも弱きもこれとさだまる
 事はなしその逢方の男しだいて色氣しらはも年増氣のじみになるあり年増にてうらはづかしき端手姿もみなこれ男を
 思ふよりその時々うつり氣にて更におかめの評判に野暮と律義のうわさにて男女の情をしらずといふべし 藤「ナニ
 堪忍しなとは此方といふ事成田から歸ると直に間もなく大和めぐりに友達が行と聞きより好の道母親ばかりであまやか
 され我儘承知のなまけ癖同氣求めた友達の浮氣連中の長旅に阿房盡して伊勢浪花京の女郎で長崎の味も衣裳も見物し
 やうとうかれあるきの月と日に江戸では大事の伯父の病死留主中出入のお屋敷を五軒までもしくじりが出来て御用止
 それも知らずに道中を遊びちらしたその跡は 懐づくておさまらぬ金の工面に西國中國御出入の御國家老へ十兩二十
 兩と無心の借も十七八候それが残らず江戸へ知れ金を遣ひちらして遊ぶもいゝが百里二百里遠所に居て親をも家をも
 見かへらねへ不孝といふがあるものか伯父の死んだに葬式の供にも立す捨置と世間へも聞へて不濟第一伯母へ濟ねへ
 といふも 尤伯母といふは家付の娘で母の姉義理ある中の言わけと内評定があるとも知らず遊び倦てお江戸入のそ
 の日に直に内々勘當しばらく上總の親類へ預けられて居た時分おめへの事を折々は思ひ出して仕方はなしそれから
 やうやう二年程過て宅へ歸つたところがおめへの所が氣になつていろ／＼さがして見たけれど少しもしれずにしまつ
 たが實にわすれる間はなかつたぜ 申「どうりでしれないはずでありましたねえあれから佐倉を立て小見川へ行て東の

方を廻つて江戸へ歸ると父様がいひますからはやく宅へ歸りたいとおもつて氣がせいたのにわたくしが風邪をひいて寐たり父親が亦煩つたりしてやう／＼六七十日過て宅へ歸つておまへさんの事をいろ／＼と噂を聞てもどうしてござつぱりわからずにしてしまつてその中おとつさんも亡後し伯母の世話でやう／＼とくらして居ても醫者や何かでゐた時は萬一おまへさんにおめにかゝつた時情もないやうに思し召てはとおもつて女を相手の髪結ははかないけれど女の身で男の世話に下いふところへお蝶茶をこしらへきたり 蝶姉さんエお茶が出来ましたが子お茶菓子も 申、ほんにあいにく何もない手 蝶、いつもの物でも取て参りませうか 申、ア、そんならどうぞ行て来ておくれな秋葉さまの裏門をぬけずにむさしやの横手を眞すぐに行と近いさうだよ 蝶、アイ此間もさう通つて行ましたヨどちらを買てまゐらうね 藤、ナニ／＼わたしはモウおかまひなさんそれより今にひらいわが何か持て来るはずだ 申、オヤさうでございますかそれはマアトいいさ お蝶ばうはやく行てお出よ 蝶、アイ今まゐる所でありませうヨ 申、そんなら手兩方とも買て来ておくれヨお祖母さまへもあげるからトいいふをきゝさし出て行はずす心とはづさせる心の中は當り合色の手とりと知られけり。それはさておき藤兵衛とお由はまたも顔見合せ手もちぶさたのその中にお由はいと嬉しさとまたはづかしさに胸さはぎいひそゝくれし身の上の貞も操も七年餘り證據なければ今さらにくやし涙にくれにける必竟二人がこの座の埒はそもいかならんそのよしは十七回をよみて知るべし

春色梅兒譽美 卷之八了

春色梅兒譽美 卷之九

江戸 狂訓亭主人著

第十七齣

消て除寒さもありて梅の花開くや笑の眉のあと春の霞の青々と苔の花に猶まさるお由の側へ寄添て脊中をさすりながら 藤、ヤレ／＼マア知らねえ事とはいひながら澤山苦勞をさせたツけノモウ／＼斯して奇會からは憚ながら大丈夫だと思ひなせへ 申、さうやさしく被仰と眞に嬉しく思ひますけれどどうもおまへさん方に限らず男子達といふものは浮薄なものだからいととおもひがますやうな事がこの末ともに有うかと案じられますは 藤、ナゼ／＼なせうたぐるのだ 申、なぜと被仰けれどわたくしが心からとはいふものゝおまへさんの御親切を身にしみ／＼と思ひ込て一生再會ないでも女の意地を達とほして未來とやらではせひ／＼と仇念深く心を定めて女伊達だの俠夫だのと朝夕苦勞をして居た中おまへさんはわたくしの事はわすれてしまつて唐翠屋の此糸さんと深い和合と妹のお蝶が常々の噂それも男の名聞ておいらん買も藝者の情合も。無理とはぞんじませんけれど久しぶりでお目にかゝつたお蝶もどうか可愛がつておやりなさりそふだからサ トいふときしも平岩の女と若者同持を三ツほど 申、ヲヤ／＼マア大造に種々とお蝶ははやく歸るといゝのにト片寄て力ななさうに亦床の上に来る 藤、ヲヤ小用かと思つたら平岩の使かおれがはこんで遣うものをそしてまだ用が有たツけ 申、ナニ今あの子が歸りますヨ 藤、ほかの用じやアねへがおめへの好きな玉子蒸をこしらへさせやうと思つてサなんとどうだエ情なし男と思ふか知らねへが七年跡の相宿に三日一座のその時に惚た氣からはたべもの

てお酌をしてもらひやせうと猪口を取あげこれよりしばらく酒くみかはしてその日は爰に遊びくらし夜にいらてお蝶が給金を返済て身まゝにせんことを相談なしければお蝶がよろこびいはんかたこそなかりけるされば藤兵衛は終夜お由が操の節義女の身にして七年以來の俠勇活業の苦心實に清潔の行ひは梅のお由と異名せし世間の噂に知られたればいさゝかも疑はずこれより心を傾てお由をいたはり月毎に何不足なくすべしと思ひの條をいひきかせしとぞ。さてこれまでの風俗とは藤兵衛お由二人ともすこしく違ふ趣向ありその心にてよみ給ひね斯て藤兵衛は其翌日立歸りて五七日音信なければお由お蝶は夜晝ともに待あかしては噂のみ障子にうつる鳥蔭もそらだのめなる春の雨花の爲には乳の恩千々に心をいためつゝ案じ煩ふ門の口四十歳ばかりの一人の男理窟ありげな勿體面 男「ハイチトおたのみ申ます千葉の藤さんは此宅にお出なさいますか ときいてお蝶は 蝶「イ、エまだこちらへはお出なさいませんが私どもでもおまち申しておりますから是非こちらへお出なさいます何ぞ御用なら左様申ませう 男「ハテこまつたものだからと六ツケ敷なるが里長縣きたになつたら藤兵衛さんでもマア明白の立まては聞い所へ行ザアなるめへ今の内はやく内済をたのみなさりやアいゝがト立かゝつたる獨言不問語の口占もあじなせりふにお蝶より奥で聞て聞とお由が胸へギツクリ當る男の身のうへよもやとおもへど若ひよつと難儀の懸る大變を仕出したるかと案じられ 由「お蝶やマアそのお方をこちらへお通し申なナ 蝶「アイ〇モシおまへさんマアこちらへお上んなさいまし 男「ハイそんなら少し御免なさいましア、コレどうぞお目に掛て内分にしてあげてへものだが 茶わんにかあやしきそのことばおてうは 蝶「ハイお茶を一つ 男「ハイエモウおかまいますナ トいひながら家内をじ 男「誠に結構なおすまのどうも藤さんも諸方へ金が入なざるから終無理なこと仕なさる筈だト聞えよがしの壁訴状お由は次へ立出て 由「マアチトこちらへお出なさいまし 男「ハイ、アイエおほきにお世話さまでございますお邪魔ながら少しお置なすつてくださいますししかし今時分まで此宅へお出なさらねへくらゐじやアモウお出も有めへかそうすると猶々むづかしくなるがトしきりに氣をもむ其風情傍聞するお由は

第十八齣

更なりお蝶も何やら胸さわぎ案じてお由と顔見合せホツト吐息をつくくゝと思へば聞も捨られぬ彼藤兵衛が身の落度何事やらんと問もし問ぬもうしや牛島の其角文字や碌々に齒もりの假言聞とれぬ折から表へ立掛り臺所を差覗く古温絶の破落戸が わる者「アイモシ五四郎さんチヨツト ト以前の男を 男「ライ岡八か何だ頼んだ理ならモウ少しわる者「とても内々にはなりやせんぜ 男「ハテこまつたものだからト立か、そもこの一事は何事ぞ第十九齣を看て知るべし

梅一りん一りんづゝの暖さ春の日向に解やすきゆきの中裏なかゝゝに浮事つもる假住居それさへ兼て米八が三筋の糸し可愛さの女の一念宿實に思ひ込だたる仕送りを請て其日の活業は世間つくる丹次郎文使とは名ばかりの所作なきまゝに俳諧や五文字の點のいとまには二上り亦は下、一の新文句をこしらへて友達の寄會所茶番の落の師範とは昔は絶て聞もせず嗚呼此土地の風俗たる意氣と情の源にて凡浮世の流行を思ひ辰巳の伊達衣裳模様の好染色も實婦多川が魁にて端折藝者の多き中別て當時の名題には政吉。國吉。淺吉。小糸。豐吉。久吉。今助。小濱。是につゞくはまた稀にて七場所噂の一粒撰客人此藝妓の名を知らずば婦多川通とは言可らずとはいへ狂訓亭は知己ならず十目の視ところ十指の指さす妓藝を算へて他國の人に知らずるのみこれはさておき丹次郎が宅の障子をそつと開路次の左右を見かへりて出るは歳齡二十二歳洗髪の島田の番ほつれて少し横にまがり湯あがりの素顔いやみなく美艶にて眼の縁櫻色にほんのりと今猶逆上せし風情溜息をついて莞爾と笑ひ障子をメながら捨ぜりふ 女げいしや仇吉、オヤその甚介はあべこべだヨトひながら浴衣をかゝへし左り棲まじめになつて出かゝる路次米八と行向ひ 兩人「オヤ 仇、今湯へお出かト口にはいへど心にギツクリ米八は兼てよりかぎ付たる二人が丹次郎と仇吉が色情ごとはちよつと似た中何くはぬ貌にて米八は右に持し浴衣を左りの脇に抱へ銀の筭の首に付しさんご樹の大玉を細き指にてちよいと持肩毛を八の字にして

らなんと言わけも思案もつかぬその所へ吳服屋の若者障子を明て 若へいお着衣が出来ましたと越後袖のねずみの棒
 島へ黒七子の半衿の懸た袂のある温袍を出す 丹「ヲヤおらアあつらへはしねへぞ 米「仇吉さんでもよこしたろうは手
 トいひながら呉 服やにわかひ たしかに請取たヨ羽折の衿をよく返るやうにしてはやくしておくれとそういつてくんナヨ 若へいモウ
 お誂へなすつてあるのでございますか 米「ア、モウ五六日前にたのであるよ 若へい「かしこまりましたト歸り
 行 米「サア御ふせうでもちよつと着てお見せ丈や行が間違やアしないか 丹「エそふかそいつはありがてへト氣の毒そ
 うにちいさくなつて着物を引掛る米八はうれしそに見て 米「なんだへそんなにこわく着る事もない子繼子が美服
 でも拵へてもらやアしめへしといふ所へ櫻川由次郎障子越に 申「米さん此宅かへ 米「ヲヤ由さんお早い子 申「ナニモ
 ウはやくはねへヨみんながそろく出かけるそうだおいらア少し用が有から高雄の茶屋へ行てゐるからそういつてく
 んなヨト行過る 米「ドレおいらも支度をしようや丹さんおまへ今日今の所へ行ときかないヨ 丹「ナニ行ものかこんな
 かわいゝものゝ〇〇〇〇〇〇 米「およしなふけへきな小兒をだますやうな丹「藤こうに責落されちやア御免だぜ 米「お
 まへじやアあるまいしト心残して出て行

○作者曰此情人の喧嘩こんなことでは治らずどうしたもの歎

春色梅兒譽美卷之九了

開くや花の寒紅梅とホ、敬て申とは顔見世のせりふなりけんア、つがもなき梅唇の評判は伊勢ごよみのこまかに
 穿りて綴ごよみの讀易く柱唇にあらずして萬年中の御重寶百年の後當世の人情を知るよすがにもならんたゞし巻中
 の婦女艶容戀情を旨として更に教訓とするにたらずとそしれる人もあるよしなれど道にそむきし姪婦はしるさずいづ
 れも浮薄を表とし心に操を守事鐵石のごときのみよくあぢはひてよむときはをしえの端となることあらむと親びるき
 連の櫻川小梅の兄貴が柴の戸をたづねて梅ごよみの巻末をふさぐものなり

辰巳の遊人

櫻川善孝

深雪をもしのぐ功や魁に
 手がらを見せん春のやり梅

金龍山人爲永

梅兒譽美四編序

子細らしき顔て息子を禁制親父も。功德池の内より涌出たるにもあらず。殊勝がましく數珠爪ぐる母親も。菩提樹の二股より生れもせず。されば色好まざらん男は玉の扨の當なき心地すべきはづ也。兎角當世の姫殿達の瓶弄に具ふもの。色情の草紙に非して何敷右に出ずなん。世の流行書肆の米箱をうるをす事。是將に小説家の戯作の種蒔萬よしによれり。今茲に開ける梅曆は爲永大人の吉書始にして。書房が金神の金得利は。天おん得たる家のふく日。とる。たつ年の春の新板。嗚呼趣向の新しき事。室咲の梅も遂に及ばず。變生女子の新工夫は。青漬の梅のすいにして。過ちなしの延喜吉慶。惠方に向ふて出方題に。阿房な事を序めかす而已

九返舎主人戲述

春若みまだ鶯も片言に

ほゝうくゝとほむる梅か香

二代目 十返舎 一九

酒の名の白梅に来て鶯の

てうし高くも初音づけけり

假名廼末成

吾妹子が袖かと思ふ閨の戸の

あくるおそしと匂ふ梅が香

松亭 金水

文好む名にめでゝこそ梅ごよみ

ひらかせたまへ四方のちご達

三亭 春馬

江戸 狂訓亭主人著

第十九齣

十七回次お由と蝶吉は彼藤兵衛が音信を待に甲斐なきその人の噂も何やら氣にかゝる風聴に心を定つゝ申「モシ五
 四郎さんとやら今のお言葉の前後をお聞まうせば藤兵衛さんに何ぞ濟ぬ事が出来たのでございませうかと開れて得たり
 と膝を寄 五四郎「イエモシどうもとんだ事さアノ藤さんは千葉の材木座で第一ばんの福有人殊に俠客なお方ゆゑ世
 間も廣く誰一人指さすものもねへところが今度は少しむづかしい理窟といつても外ではない餘り諸方附合が廣によつ
 てむだ金が際限もなく入たゆゑ大分内證がまはつたそうさまづそれは兎も角も今日わたしがお尋ねまうすは外じやア
 ない寮防町のお阿といふばアさんの抱お蝶といふ子の給金を下聞てお蝶は胸さはぎ姉のお由と顔見合せはや涙くむ娘
 氣の先くゞりせし安じ貌五四郎は心に笑 五四「さてその給金を藤兵衛さんが残らず勘定してばアさんに渡しなすつた
 とところがその金を藤さんが歸るとその晩盗人が這入てぬすんで行たつてつても藤さんは構いもないとおほしめそうが
 その盗人の這入た跡に藤さんの鼻紙袋中には證古の名前の書物をこて老女も氣が付て渡した金を藤さんがまたその晩
 に盗みに來たと推量ゆゑ紙入を證古に表向にするといふところへ丁度行合して聞ばまんざら藤さんとも知り合たわた
 しの事聞捨にもならねへときのふから藤さんをお尋ねまうしたわけだけれどモウ内々にはならねへと聞て見りやア仕
 かたがねへがどぶぞお阿に金をマア半金でも渡して取留て貯蓄にしたいものだといふ折からに表の方阿八は藤を執

阿八「五四郎さんそんならお氣の毒だがお代官さまへお阿さんをやりやすぜ 五四「ツイ／＼阿八手めへどぶか今日一日
 延すやうにはなしちやアくれられめへかア、これこんな事とは藤さんは知んなさるめへこまつたものだ 申「モシどう
 ぞ内々にする仕やうはございませうか手下さすがに利發なお由でも身にかゝりたる藤兵衛が噂に心もくらみてやお
 蝶はもとより年ゆかず途方にくれたる女同士 申「ノウお蝶よもや藤さんが其様な事はありもしまひねへ 蝶「アイどう
 してそんなこわい事が他の物をとるなんぞといふ事は 五四「サアモシねへは知れてゐるが紙入といふ證古があつてお
 阿ばアさんの心の底にも藤さんがわすれて置て行たろうと少しは思ひもしようけれどうぬが鹿相でとられた金取つゝ
 しまがねへゆゑに邪も非もかまはず藤さんを相手取氣になつたのは持まへの強欲ものどうも仕かたがございせんト
 聞てお由は五四郎に相談し貯の金少々と衣類その外取あつめ十五六兩ほどの品々を風呂しきそへて淺はかにも渡せ
 ば五四郎請取て 五四「ヤレ／＼はやわたしは藤さんをおたづねまうすばかりに來たがどぶも仕かたがねへ乗掛つた舟
 だこれをそんなら七ツやへやらかしてマアざつと半金だこれでおくまをなだめやせうとはいふものゝ藤さんは一向知
 らねへわけて外から盗人が出た日にはたちまちかへる此代物よくマア數を書附にでもなさいませんか 申「イエナニ大
 界おぼえておりますヨそれよりは早く濟やうにその内藤さんがお出ならおまへのお咄しをいたそうがおまへのお宅は
 どちらでございませうか 五四「エへいわたくしはアノお阿ばアさんの直に裏長屋におりますすいづれまた明朝まで此方
 へ参りますト風呂敷を負ひ出かける門口お蝶が方をたづねつゝ爰へ來かゝる丹次郎五四郎と突當り 丹「イヤ久しいな
 松兵衛能所逢たマア下に居や 五四「ハイ今少し急用がト逃出すを引戻し「此盗人めエふてへ奴だうぬがお藤で丹次
 郎が日影をよける今の難義畠山さまへ引ずつて行ておはらひに出た賈の行衛知れてはあれど金子の行道主人の判を似
 た重罪サア一所にうせおれと立懸ればふりはらひ 五四「古主といつても五日か三日下から出りやア付けあがり覺えも
 しねへ賈の金のと畠山はさておいて鎌倉御所から呼に來ても行たくなけりやア行ねへト欠出す五四郎組付く丹次あら

そうところに岡八が丹次郎を引倒し 岡この晝蔭めエ何をするのだ顔に似合ぬ荒かせぎサア五四郎さん急ぎなせへト丹次郎が顔をこぶしにて二ツ三ツうちなやまして欠出す二人それと見るよりお蝶は走出 蝶お兄いさん丹さんお惚我はなさいませんかどうなすつたのでございますト泣聲すればお由も門へ出る向ふの繩手道今欠出した五四郎と彼岡八が袷がみをつかんで投出す千葉の藤兵衛

○そも／＼五四郎といへるは元丹次郎が養子に行たる養家の番頭松兵衛といふ悪漢にて丹次郎が以前の養家唐琴屋の鬼兵衛となれ合丹次郎をだまして主の養子となし忽ちその家を押し借金其外を丹次郎になすり付島山家の拂物を梶原家へ賣その金を取逃し酒色とかけ事に遣ひなくして隠れまはり近頃千葉の藤兵衛が方に番頭となりて有しが藤兵衛此ほど上州信州の山方へ急に商賣用にて行ねばならぬ用事の出来て山方のものと同道し旅立時しも此五四郎にお蝶がことをくはしくはなし金子を預け寮防町のお阿が方を掛合せまたお蝶がことお由がことを残らずのみこませてはからはせんとせしにさすが藤兵衛も母親の手前をかねて内々のことなればさらに他は知らざれば五四郎持病の悪念きざし主人藤兵衛がこのたびの旅立なか／＼三十日にはかへりがたしと推量し古支配人の眼をかすめ十兩ばかり見せの金を盗みおくまへは亦々一二兩を渡し置お蝶が方へしりの行ぬやうにしておきて今日偽りてお由が方へ来り同類の岡八と二人にてうまくお由をだまし金子衣類をかたり取しが天誅の時や来りけん藤兵衛は山方の相談ごと途中にて調ひにはかに立歸りて五四郎が取逃の様子を聞お阿が方の埒あかさるまで聞たゞしそれより爰へ来りしゆゑ五四郎をとらへしなりよろしく察してよませたまへ

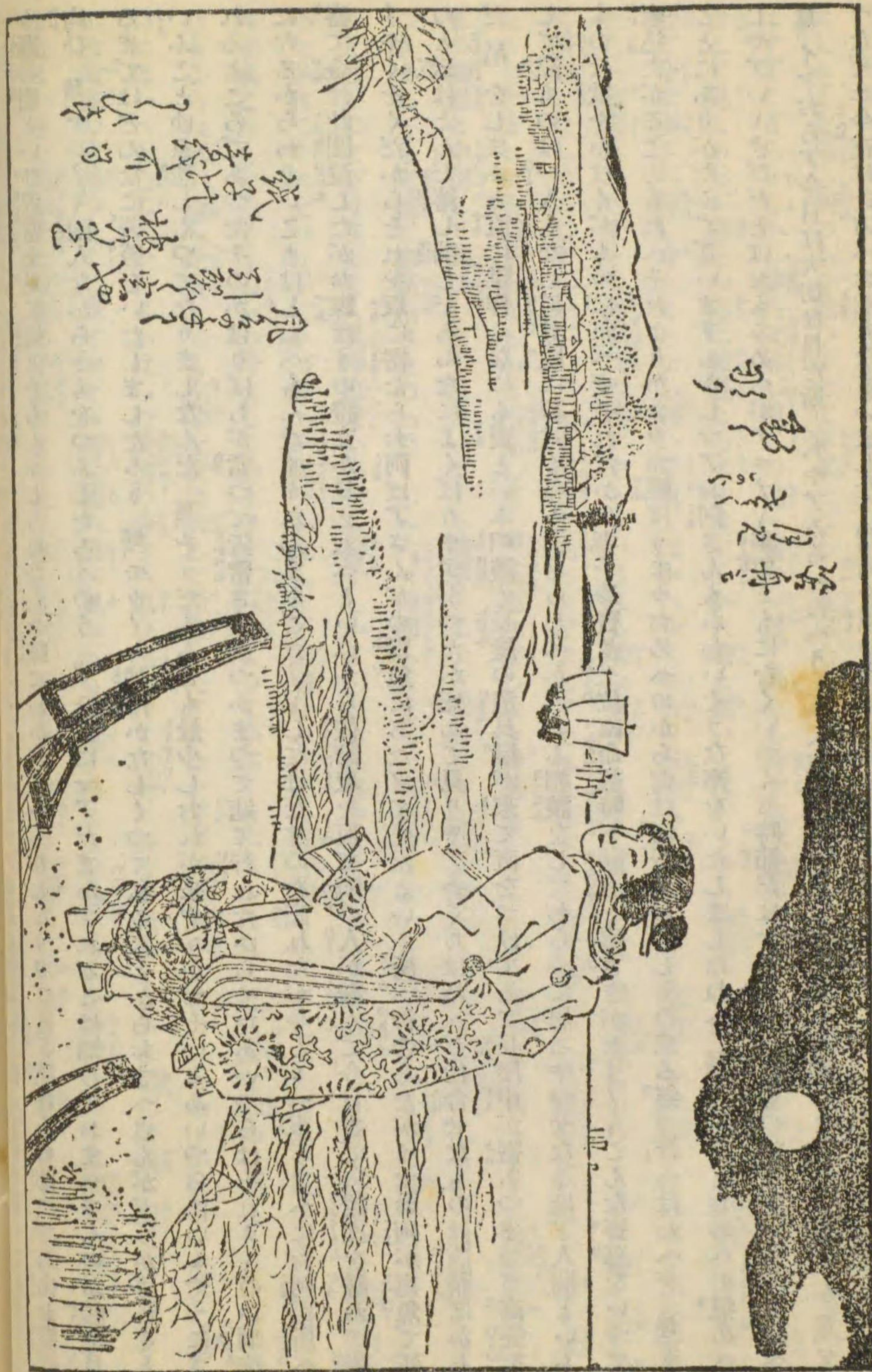
梅のお由と蝶吉は思案に落ぬ藤兵衛がこの場の様子あやしみてたゞずむところへ藤兵衛は二人の奴を引ずりながら藤サアうしやアがれ盗人めらと五四郎が手を捻かえす透間に逃出す岡八の向ふへ来かゝる立派の侍行ちがひさま岡八を手もなくいませしめ此方へむかひ 藤兵衛其腹を逃しするなと懸かけられておどろく 藤兵衛 藤サアうしやアがれ盗人めらと五四郎が手を捻かえす透間に逃出す岡八の向ふへ来かゝる立派の侍行ちがひさま

第二十齣

再説本田の近常は於由が寓居の座しきへ通れば藤兵衛お由蝶吉はおの／＼首を疊に付て不思議の來駕と問ひまうせば次郎は悪漢等を庭の樹立につながせてさて藤兵衛にまうしけるは 本我身只今此岡八を召捕たるは主君重忠の御下知にて兼々詮穿ある白徒なればなり又其方が捕へたるは丹次郎といへるものに難儀を懸たる不忠の手代松兵衛といへるものに似たり何ゆゑに召とらへたるや定めてよからぬ仔細ありて見退しがたき分ならん其義は何か知らねども既に舊悪あるものならば岡八もろ共文注所に召つれさせん其方の手に捕へし彼奴が悪事は何事ぞと問れて藤兵衛此程の一十をまをしければお由蝶吉はいふも更也今入り来りし丹次郎も蔭すして五四郎が其悪計におそれけり斯る處へ近常が供人凡三四人垣の外より差覗き控る風情に本多の次郎これを門より呼いれて五四郎岡八を引渡し牢屋へつれよと言ふくめ来りし家來は先に歸し其身は跡にとゞまりて 近トキに藤兵衛かねて頼みし義はひそかにたゞしくれられたるかたゞしははまだ其實否をさぐりがたいやうすかなイヤそのことはともかくも此家を見れば女主の住居の様子長座いたさばさだめて迷惑また内々のことを他人中でたづね申もいかゞしい 藤イエ／＼これは私が退れ難い内縁の者の宅少しも御遠慮はいりませぬしかししばらく皆々には遠慮いたせ申ませうといふを聞きより蝶吉於由は勝手の方へ立て行跡に藤兵衛膝すり寄 藤彼お頼みの一件はくわしく詮索いたしました唐琴屋の養子にて又々他家へ養子に参りその家破滅の折からに難儀を請し丹次郎どのこそ素性は例の血すぢに相違ござりません 近スリヤ榛澤六郎が隠し

子にて薬のうへよりその母諸共他へ遣はせし小兒なる丹次郎にてありけるか六郎成清が頼みしにはあらざれど同役のよしみ子を思ふ親の心を思ひやつて年来たづねし我誠心行とゞいて満足いたす時節を待て親六郎へ對面いたさせつかはすてござらうしかし彼丹次郎が浪々の宅へ實の一義で参りし時十五六歳の容儀よき娘が深き中にてあるやうす参り合して見とめしが猶その外に彼是と心まよはすうかれ者と聞いてはどうやら物堅い六郎どのへ親子の對面此近常が請合て今は妻さへ持し身ととりなし難い浮氣てはかへつて年倍の成清へ恥をあたる同前じやが親子のりをいたせてたとへ家督とならずとも榛澤氏の嫁じやともいはれる様な女子でもござるかな 藤其義もいろ／＼手を盡し品を代て詮穿いたしためしましたがいづれも實義と見とゞけましてそれとはなしに丹次郎どのへ見續心にいたした義も大かたとゞきましたる様子猶又しかと相正して 近萬事如才のなき貴殿このうへとも何事も 藤へイエエ毎度御屋敷さまの御恩と申別して御ひいきくださいまする榛澤さまなり尊君なり此様な御用ぐらゐは百分一にもたらぬお禮それにつきまして先達て御新造さまのわたくしへ内々仰聞られました事貴君さまにも御召仕ひの女中に御手をつけられましたことのござりましても其時姫身いたせし様子しかとわからぬ事ゆゑに捨おきしが後々きけばその女中お種を安産いたされてそれをつれ子でいづれへか縁づかれしまで御聞なされその御行衛もわたくしへたづねくれよといふおたのみゆゑこれもいろ／＼心をつけましておりますが只今もつて手がよりがトいはれて近常面を赤め 近これは／＼ぞんじもよらぬ妻が頼み此後とも左様な義は決して詮穿いたすにおよばず何十五年も昔のこと心にかけもいたさぬ義と口にはいへど心にはたれもかはらぬ愛情の今さら思ひ出られて何所にあるか無事なるかと案じは顔に顯はれしがさすがは武家の意地つよく 藤イヤナニ藤兵衛六郎が見かへらぬ實子の心をもち詮穿いたすは同役の好身ばかりでなくいまだ榛澤氏に家督の子息なきゆゑに第一主君へ不忠なり彼人の先祖へも不孝なりと思ふによつていたすわけこの近常は愚妻の腹より出た小兒も二人まであることなればかならずとも藤其義はねをりけるにござらぬ

義くれ／＼捨ておかれヨト是より家内を呼いだしていねいにいとまをつけ譽田の次郎は立歸る亦丹次郎はこれよりさき藤兵衛といひ近常を見て何とやらんうしろめたくお蝶にわかれてかへりしなりさて藤兵衛はその跡にてお由お蝶に向ひ 藤ヤレ／＼兩人ながらきもをつぶしたろうのう 申ほんにマアだまかされるとは知らずおまへさんのお顔を見らるまではどんなに苦勞をいたしましたるう 蝶モウ／＼誠になしくつて私のことからおまへさんがどうかされるといふことゆゑ悲しくつてなりましたんだ 藤そうだろふとも最少しおれが來やうがおそいとあいつらにいゝやうにされるるところであつたそのかはりばちが當つて近常さまにつかまつて連れて行かれたからモウあいつらはそれ／＼のお刑法になるからわるいことはしねへもんだイヤあんまりごた／＼してはなすのを忘れたが今こゝへ來るまへにお阿が所へ寄て金は此間渡したがお蝶ほうの證文が見えねへといふから假請取を取て隣の人が請人て今日までに證文を尋ねて歸すやくそくだからそれを取に寄たらお阿ばアさんの毒魚にあたつて死だといふ所へ行合したがイヤお阿が毒魚で死ぬと云はとんだ落し咄しだあんなによくばりやアがつたが死んで見りやアいくぢはねへせ仕合せなものは店請ばかりだ 吊をしまふと直に雜作もなにも賣といふ相談で長屋の道具屋が來て直をつけてみて長屋中が寄あつまつて高笑をして泣ものは一人もなし道具屋に葬式ぐるみ引とらねへかといふ相談をしてわらつて居るやつサなるほど人間といふものは欲をかかくがものはねへせそれだから妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と佛さまがホイ／＼こんな野暮をいつて老込たがることもねへそれよりカウお蝶ほうモウおめへのからだは何所からもしりの來る氣づけへはねへせ 蝶まことにありがたふございますしかしまアお阿さんもかわいそいな事をいたしましたねへ 藤なるほどおめへの氣めへじやアいゝきびだとはおもふめへがナニ／＼善惡ともにむくいにくる時節だはナ 申こわいものでござりますねへ 藤イヤお阿今日は大切な日だ斯しちやアおめへられねへしやへ駕籠をそう云てイヤ／＼駕籠より舟にしようか 蝶ヲヤなせエ今夜は此方へお泊りなさいました 申何を思ひ出して急にお歸りなさるのだねへ 藤實は此方へ遊びに來た



のだけれど今思ひ出すと今日は巳の日だ是非洲崎へ参詣ねへければならねへ 辨天さまかへ 藤七うヨ 藤七さん
 と私と同道につれてお出なさいな 藤七イヤおそくなつたから今日はよしねへ餘程いそがなければならねへといふ折か
 ら七ツの鐘ボウン引 申ほんにモウ七ツだ子 藤七なんだか今日は日がみぢかいト急ぎあわてゝ歸りゆくこれは借おき
 米八はいつぞやよりして仇吉と戀の意恨のもつれにて丹次郎とも毎度か口舌をせしが此頃は浮名の立しのみならず仇
 吉がために八幡の社内にてうちやくされ人前にて恥をうけ其しかへしの覺悟をきはめ今宵洲崎の辨天へ夜詣りをする
 仇吉が跡をしたふて磯つたひ巳の日なれども夜なれば人目あらぬを幸ひと欠出し行しろから米八まちやト聲かけて
 帯引とらへる者あればこれはとおどろく米八がふりかへつて顔見合せ 米七ヤおまはんは藤兵衛さんどふしてこゝ
 へ 藤七、さだめてびつくりしたろうが今途中で聞いた喧嘩のやうすくやしかりうがコレ米八マア氣をしづめてよく聞
 ツし何ほ傾城水滸傳や女入賢傳が流行ても女の喧嘩は色氣がねへゼハテこれまではともかくも聞捨見捨のならねへゆ
 かりマアこん夜はおれがいふ事をきいてくれるといつたところが日頃口説のわけじやアねへこれ今まで心を盡した丹
 次郎を大事におもつて連添氣ならば藝者の意地や引立はこの藤兵衛に任しておけ今櫻川とも相談した立派に手めへの
 顔の立つ仕方はおれがして見せるトおもひがけなき藤兵衛の言葉に米八ふしんがほ 米八そんならいつもわたくしへ
 藤七かれこれいつたは氣をひくためいよゝ丹印を大事にする心と知れては藤兵衛が肌をぬいて世話をするマアその
 つもりでこゝから宅へ歸つて時節を待がよいと無理に引つれ立歸りその後藤兵衛がはからひにて大勢の藝者をあつめ
 其うへ仇吉丹次郎が手ぎれ米八が顔の立かた等残る處なくはからひける
 この喧嘩の前後はことながくしてなかゝ限りある丁敷には説盡しがたしよつて三編の口繪にその風情を見せし
 のみ近きにいとまあらば此草紙の追加としてくわしく貴覽にそなふべし則ち外題は

梅うめごよみの餘興 春色しゆんしよく辰巳たつみの園その 狂訓亭きやうくんてい作 全部六冊
發市の時を俟て御高麗のほど奉希ねがひたてまつらるる 飲

春色梅兒譽美 卷之十了

春色梅兒譽美 卷之十一

江戸 狂・訓亭主人著

第二十一齣

再わかりて見しやそれともわかぬ間に雲かくれにし夜半の月それならなくに逢見あひみての後の心にくらぶれば昔はものを思はざる身にしあらねど此頃は苦勞求めて牛島の寓居にお由がもの案じ憂をかたりて姉妹と誓ひし例の蝶吉が姉を大事と心付 蝶アノウ姉さんおまへさんは此節は誠にふさいでおいでだが子なせて有ますエ今じや藤さんといふ後見が出来たから氣が丈夫じやアありませんかチツトうき／＼となさいナねへ 虫アイヨおまへも他の事を苦勞にして氣をもむ性だから私が元氣のない貌をすると直に案じて同じ様にふさぐだらうと思つてもツイこり性だから胸がつかへる様になつて今までの奴な氣まへが出なくツて只心ぼそく計りなるヨトはなしなかばへ勝手口四十歳あまりの内儀風たしかにこゝと合點つゝ 内儀ハイチト御免なさりましお由さんとはこちらでございませるかトおとづるゝ聲お蝶は立出蝶「ハイどちからからお出なさいました 内儀アノ 私わたしは千葉の大和町から参じましたがお由さんにお目にかゝつてくはしくおはなし申したい事がございますがどうぞおむづかしくもお逢なさつてくださいましといふを聞より奥の方千葉と書いては藤兵衛が方よりならんトお由は聲かけ 虫お蝶さんこちらへお連もうしておくれといひつゝ出迎ふ中の間へお蝶とともに入り来る内儀お由は貌見てふしんの體内儀は何やら眼に涙互ひにその座が定まればまづはじめのあいさつにしばらく有て彼内儀 内儀早速ながらお由さん御遠慮なさるお方もなくばチト込入た私がおはなし亦おきゝも

うす事もありト見かへる側にお蝶はさとり勝手へ立て行跡に心がよりとお由は摺より「大和町からと御仰からはたしかに千葉の藤さんの 内儀」さればサそのことでは有ますけれどマアこれを御覽じてト取出したる一品は昔蔭繪の織部形好みを盡せし三ツ組の懐中盃下重ねしかも世に知る下の句の「ほととぎすといふ五文字にて高尾が筆をうつせしなりお由はこれをいぶかしく手に取あげてその身もまた手箱を出して八重封じ上に記せし書附をあくるを止めて彼内儀その書つけはわたくしが手でみまがひもない後日の證古と半分いひて涙聲お由は聞いてびつくりし 申「エ、そんなら私が五ツの歳お別れ申した母御さんでございませうか 内儀「サア。アノ」と返事も出来にくいわたしが胸を推量して邪見な母と思はずに堪忍してと泣沈むお由もワツト聲をあげむせかへりつゝ寄添ひて 申「イエ、何の勿體ない堪忍どころじゃございませぬ親父さんの存生な節さへ戀しかつたおつかさんまして常々氣にしても尋ねる當もないおまへがどうして私の在宅が知れてモシマア夢ぢやア有りませんかと取すがりたる親と子の道理さへしれぬ愁歎にお蝶も耳聞もらひ泣障子を隔泣障もへだてぬ中と知られけりやゝありて二人とも涙をばらひ 母「ホンニマア私としたことが歳がひもなく泣たとてかへらぬむかしと今の身をくはしくいふもはづかしいことではあれどわざと今日来た仕儀の前夜よく聞わけて合點してと過越かたの物語拙き筆に言葉書てはしるし盡さんよしなければ左にしろすを見て解したまへ

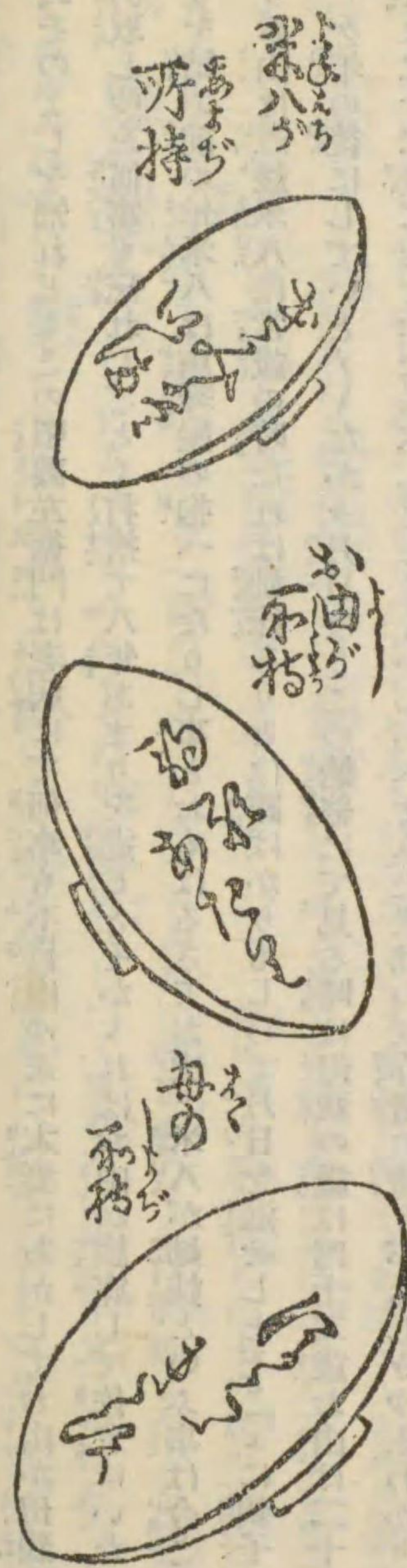
○そもお由が五歳の時この母親は歳わかやくやうく二十一歳にてお由を産しは十六歳の暮のことにてありしとなんかくて乙子をまうけたる二十一歳の頃にいたりてその亭主薄命わろくして夫婦より談合し夫はお由を伴ひて田舎の縁者を心あたりにあきもあかれもせぬ中を離別なしつゝ乳呑をば母の手元にゆだねつゝ終のよるべもそらだのみはかなく親子ちりぐににりにし後にこの母は我子を里につかはしてその身は乳母に出しかど心づかひの期なれば忽ち乳の上りしゆゑ當惑したる折からに彼藤兵衛が父なりし藤左衛門に思はれて心ならずもまたさちらに結なほしたる島田番附れ女にはなりしなりかくて里子にやりたりしは是ぞお由が親にて今多川に全盛の盛

者となりし米八なりさて米八は里親の養育にて成長り母はさすがに藤左衛門に子のあるよしを隠したれば手元におく事ならずして終に里親に任せしゆゑ十三歳の時米八は里親難儀の事ありて唐琴屋へ藝者に賣られ身儘にならぬそのよしを知れどもこの頃藤左衛門は老病にて何事も不自由ゆゑに本妻にあかしてお由か母親を千葉の家内に引取しゆゑ何事も忘れしごとく打捨て八年あまりを過しとぞかゝればお由が旅寐して佐倉にいたり藤兵衛にちぎりを結ぶ前の年米八は唐琴屋の抱へになりし事とおもはるさてお由と米八が姉妹といふ事は今この母が知るばかりお由は五歳米八は當歳の時なれば姉妹ありとは露ばかりもしらで月日を過せしとぞこゝに親子の對面は凡二十一年の後にしていとくながき月日なりこの始終にて見る時は母親の歳は四十二歳お由は二十六歳にてかの米八は二十二歳におよぶなるべしよくかんがへよみたまはねば作者の綴りがあしきゆゑわがたかるくたりもあるべし凡予が作意の癖は發端にいふべきすぢを後にしるすが常なればよろしく察して高麗をねがふのみ

斯てお由と母親は前文の一條を問つ問はれつ時うつる漸に果もなかりしがやゝありて 母「ノウお由今までいふたは過た事今日わざと來たわけはチツトおまへに頼が有が聞とゞけておくれかといへばお由は膝すり寄せ 申「アノ改たまつたその言葉たとへ別れて育つても産の恩ある母人さん頼むなんぞと被仰は他人がましいなんのマア親子の中じゃアございませんか 母「サアそうでは有けれど此盃の三組の一ばん小さひすゑの所を別るゝ時に遣つたのは今はなした米八が證古の品母の此身は二十年にあまる恩義の大和町藤兵衛さんの兩親に今もまかせし義理あるこの母藤左衛門さまからそのお子の藤さんの代へかけて一方ならぬ深い縁にかゝればつながらる姉妹が姉も妹も藤さんのお世話になつて居た日にはたとへ兩方知らぬ同士藤さんとても其様なれど此身になつては朝夕に他目にしれぬ心の苦勞大旦那が死去られてモウ八九年になるけれどやつはり旦那の繁昌の時にははらぬ本妻さんわたしを實の妹と思つてゐると信切づくめ何も不足のない宅で本妻さんの御苦勞は只藤さんのお身のうへまだ嫁御さへとられぬは唐琴屋だの和哥町

じやのまたそなたじやのといふ者が三方四方にあるゆゑと聞てはどうもその儘に捨ておかれぬ藤さんの身持勿論是ま
 ていろく洞樂の止間がないゆゑ母御の苦勞は無理ならず何の縁でか親子三人千葉のお宅の厄界になるもふしぎな
 事ながらお米なり米八がこと其方なりいつそ私がすゑんまで知らねば知らぬで済しすれど別れて居ても親子の情
 案じてくらす月と日にだんく知れた今の身のうへ知つてはさすがよしくならぬが浮世の人情づくこの所の
 くみわけてどうぞしばらく藤さんが本宅に腰の落付やう其方の仕打でどうでもなるお由もこうだと米八に是から逢て
 はなしたら得心しないことも有まい此頃聞けば唐琴屋は少し遠ざかつてお出もないとそふして見ればお米は商賣外
 の座敷へ行日もあるうお足の近いはどうでも此方それゆゑ頼む此母が無理であろうと聞わけて愛相つかすほどではな
 くともおもしろからず會釋て遠ざかるやうにしてくだされといはれてお由は口のうち只アイくもないじやくりしば
 しは答もなかりける

三ツ組盃の圖



これ親子三人が別る、時後の證古とせしものなり。因にいふ織部形とは古田氏の好にして凡の道具小器を珍重せら

れしゆゑ此小盃をも織部形といふ古き椀久の唄に「思ひざしなら武藏野でなりと何じや織部の小盃トつくりたり
 武藏野といふは大盃にてのみつくされぬといふ謎なりとぞ

第二十二齣

さてもお由はつくく過越かたの物かたりに去にし親父の事さへも胸にうかみて悲しさの猶いやまさる浮世の義
 理亦藤兵衛と米八が中をくわして知らざれば現在姉の契りたる男と知らねば兎も角も五歳の時に別れしより。二十年
 まで隔たりし母のたまさかめぐり合頼むといはる一言は思ひ切らねばならぬ仕儀とはいへその身は七年前いまだ姉
 も此糸も逢はぬ前より言あはし縁あればこそわが身さへあはれぬ中とあきらめて心にあらぬ女丈夫一生やもめて活業
 と思ひしものがはからずもお蝶がことよりめぐり合ひむかしにかへる女氣の他よりわけて實正の心をまたも入かへて
 どう縁切てこれぎりになられうものかなりもせじならねば母へ不孝ぞと千々にくだくるもの思ひ折から隣の垣根ごし
 清元入の下、一を娘が唱ふその一節

梅に鶯アレきかしやんせきよ元すあなゆかりとわれながら我つま琴を掻ならす思ひの丈の尺八
 も一夜ぎりとはきにかゝる一爪の糸目も花の邪魔

他の端唄も身にあたる縁の糸目の切よとは花をちらさぬ辻うらかとは思へども藤兵衛とわかれてなんのながらへて
 また来る春を待れうぞと繰かへしたるお由がなげき母は義理ある藤兵衛に身を保せんと思ふゆゑ無理を承知のねづり
 言「母、モウ、能からなきなさんな親とは云ぜう二十年産だばかりで恩もなしたま、尋ねて来るよりはやく親子の
 名對面をするやせず思ふ男と縁を切れ母が恩ある家へ對して濟ぬのなんのと得手勝手みんなわたしがわるかつた姉
 他人のはじまりとやらずるぶん姉にはり合て男をとられぬ用心しな年とつたそなたがその様子では姉もなかく得心

しまい人なみくの親ならば親の威光もいふけれど薄命ゆゑ子どもにも口のきかれぬ生がひもない此母が死んで萬事のいひわけしますとすげなく立を引とめて申アレ母さんお氣のみぢかひマア堪忍して私のまうす事を一通りお聞きなされたさつてくださいますと涙ながらに七年以前佐倉で逢し時よりして心を盡せし操のやもめ神や佛の恵にてふたゝび合はる今日の今浮氣で惚て身のために男を釣寄せくらすかとおぼしめすのが恥かしいモウさつぱりと思ひきつて是までつけた髪ゆひと小梅の宅の貸衣裳損料夜具の活業でその日を過して故人たおとつさんの命日には現成菴へでもお参り申て一生をおくりますトいはれて見れば母親も無理と承知で言出して今さらなんと善悪を定めかねたるこの座の模様折から隣に續たる四疊半の小座しきの縁の障子を押あけながら「イヤノウ姉おそのとの義理をおもふて藤兵衛が身持に付いての心づかひはかたじけないが由女は私が大事の戀嫁御吉辰を撰んで藤兵衛が家の内義でございますトいふこゝろ聞ておどろく二人入り来る姿は歳のころ五十歳あまりの尼御前にてさも上品なるその出立御納戸加賀の羽二重に花色ちりめんの裏つけて下着も對の花色無垢 尼おゆるしなさいと手を膝に珠數つまぐりて座につけば お申あなた此間お隣でお目にかゝつた御隠居さま 母思ひもよらぬお姉エさんどふして爰を御存じてトお由が母とお由とが右左りから問よれば尼はにつこりうち笑ひ 尼さぞふしんなどと思ひなさるふ今日來たわしが心のうち釋尊さまでもござんじあるまいとはいふものゝ案じたより産が易いと世の諺産ぬ子どもの身の素生わしが年來姉ぞと思ふてくらしのおそのどのゝ實の娘のお由女郎それと知らずに藤兵衛が深くやくそく堅めたは一方ならぬ縁者の中何心なくお隣からつよく庭ゆゑ不遠慮と思ひながらも來かゝつてふと耳にいる咄し聲品こそかはれ藤兵衛が爲をおもふておそのさん血をかけた子に縁切れとはまことに義理の深い事わたしはそれに引かえて子にあまいゆゑ藤兵衛が是までつよく胴樂わがまゝ今さら嫁の詮穿も里のしうとの氣々さまゝそれよりいつそ子どもの氣にいつたら女郎藝者でもかまはぬ方が當てかと思つて見てもそれはない三日月の夜は女は世にいとわづらひられずと不慮の災に逢はぬやうに祈りて

見えたゆゑだんくの理をはなして世間のひろい善孝の事どうぞ伴が遊先たがひに始終眞實に添ひとげやうといふわけの女があらば一日もはやく宅へとたのんだところ唐琴屋は藤兵衛も繁く行たは一盛どふやらこれはない縁といふゆゑそれから米入が方はときけばはつきりとわからぬあいさつさりながら元此糸と同じ家に居た時どうかわけあつてふた川へ自賣とやらになつたは不殘藤兵衛がした事と去人のはなしそれゆゑわたしが米入をたづねて直に心根を聞ふとおもふその中に噂を聞けば丹次郎といふ人に操を立て表向は男ざらひと風聴をさせる藝者と聞て見ればこれも此方のものではなし。それほど馬鹿には産つけぬと腹は立て見るものゝ男の意地とか達引とかでふりつけられても幾度か通ふ遊びもするものと聞ばまんざらだまされて世話を置いて置わけも有まいといろくゝ氣をもむその中にこちらの様子を聞出して幸ひこの頃お参り申現成菴で心やすくなつたお隣のお袋さん打明しておはなし申それとはなしに此間知己になつたお由どの元は小梅の女伊達強人じやと噂とはうつてかはつたそのやさしさ殊にすぐれた美目形容これにて心はすはでなくば藤兵衛が嫁には過ものどだんく近所の取沙汰から氣だての様子何ひとつ不足はないと思ふゆゑ今日直々千葉の宅へ這入てもらふ相談をと來かゝる爰への庭傳ひ願ふてもない縁つゞきおそのさんの實の子と始めて聞て嬉しさに罪深いといふ不聞もわれをわすれた此よるこびしかし此方はその氣でも心々の人の望お由どのはじめおそのさん藤兵衛が本妻にするのは心にそまぬかへトいはれて飛たつうれしさは何にたとへん方もなくおそのお由が喜びにも涙さきだつ夢ごゝろしばらくあつて母その「思ひがけない御隠居さまの有がたい思召今にはじめぬ事ながら勿體ないやうにぞんじます 申いやしい此身を有がたいお慈悲のお言葉ではございませうして見ると藤兵衛さんのお蔭で世にたつ米入さんが俄にどうか前後の都合も違ふ心あてたとへ姉としらずとも女の心のはかなひをぞんじましては是も亦心にかゝる成行の藤イヤそのことは遠慮におよばぬ申そうおつしやるは藤兵衛さん 尼ヲ、藤兵衛が來たのかへしやうじをあけて藤兵衛は尼のまへにすはり 藤お歳よられて母人さん私ゆゑに相かはらずさまゝのお心遣ひモウくこれから氣を入かえ

て急度身持を改ます殊にお由を添せんと深いお慈悲のお志野暮らしい御氣性だとなか／＼出来ぬ今日の仕義お由
 やよく御禮を申なゝおそのさんもうろ／＼と御信切しかしこれからきまじめでみんなに安堵をさせ申やす又米入が事
 はその始此糸が頼によつて自賣の身にしてやりましたがそれから後にお出入やしきの畠山さまの御家老職譽田の次郎
 近常さまから頼れまして心にない無理なことまで言かけて心の底をさぐつて見ましたが中々亂れぬ心の操歳のゆかぬ
 女にはまた有まじき氣性ゆゑ此藤兵衛が證人媒人丹次郎どのゝ内室と始終をはかる深いわけしかしこれは今こゝでち
 よつと申てわからぬおはなしまづその事はとも角も私が爰へ來かゝつて控へて居たもやゝしばらくさだめて母人さん
 も御食前だろウト次の方へ向ひ 藤ヲイ何やお蝶ぼうやちよつと來てくんのお蝶さんいねのかと呼べどお蝶は先刻
 よりお由が事をイ聞して案じ煩ふそのあげく彼米入を丹次郎へそひとげさせると藤兵衛が言葉にハツト當惑し涙に返
 事もなさぬとはしらでお由は次へ出 申ヲヤ此子はやお出でないかと思つたに藤兵衛さんがお呼だヨト言れてアイと
 立上る娘心にいとせまき袂をぬらす憂思ひ一ト間へだてゝ悦びと歎きと變るお蝶が胸必竟このすゑいかならんそは
 第二十四齣にいたりて滿尾の段にくはしくしるすこれよりはまた此糸が傳にうつれば前後を繰返しつゝよみたまへ

春色梅兒譽美 卷之十一了

春色梅兒譽美 卷の十二

江戸 狂訓亭主人著

第二十三齣の上

戀ゆゑに心のたけをつくし琴亂れそめにし此糸が結れとけぬ部屋の口 禿おいらんエお湯が出来ました 此いとア
 イ直に這入るヨ糸花さん氣をつけてくれなましヨ 糸アイお案じなさりイすなお杉どんが今泥溝店へ行イしたからま
 だめつたには歸りイせん早く湯からおあがりなんして頭痛がするともいひなまましてすこしお休みなんし夕べはあい
 にく客人が落合なんしてさぞじれツたふ有イしたろう子 ならずしてときをりは仲の町であふさへもうす／＼しれて氣をつけられ思ふに
 まかせぬことのみゆゑきのふよりして 半兵衛をひそかにへやにかくして置也 このいとアイさまことにさつしておくんなしエと目を見合せて戸棚の方心残して湯どの
 へと出行跡に糸花は部屋の戸棚をそツと明。いとほな半さんさぞ氣づまりておツしやう子 半「おれが氣づまりより萬
 事おめへの心づけへコウ手を合して拜でゐるヨトこそ／＼ばなしの後の方いつの間にやら遣手のお杉 糸花さん
 糸「エ、イ 杉ヲヤ仰山な返事のしようだちよくり私が部屋へお出 糸アイなんぞ用さますかうツかりしてゐた所を呼
 なましたからびつくりし伊した 杉すねに疵もつて笹原を走るとやらサ何でもないゝからちよつとお出 いとアイサア
 参りイせうト立ながら明かけた戸棚をびツしやり立つて見ても心おく遣手を先へ糸花がつゝいて出るらう下より引
 違へて此糸の座敷へ踏込若者下ばたらきやら寐ず番やら大勢一度に欠入て戸棚に忍ぶ半兵衛を引ずり出して口々に
 大ぜい「此糸さんのお座敷には盗人がすまつて居やす不殘さんのお座敷で御用心なさいましヨ 若者「サア／＼みせしめ

の爲に此盗人を下へ引ずり出して内所の前で筋骨を抜ほどの目に合せてやれあんまり人をめくらにしたトぶつやらふむや
 どのうちやく半兵衛は身のあやまりに手ざしめならずことに大ぜい 半「コウ」喜介どんどぞ拜からおんびんにしておいらはと
 手あしをおさへ身うごきならぬ此ばのなんぎやう／＼かた手を合すまね
 もあれ此糸がかはいそうだコレこの事が内所へ知れては 喜介「イヤあきれもしねへたわ言をいふぜ盗人を座敷へ置お
 いらんも同類だア何かわいそうがいるものか高金出した奉公人をいけふさ／＼しい色男めよはいのが當りめへとぶる
 ぶるするも胸がわりいぶつて／＼ぶちのめして恥づらか／＼して此廓へ足ぶみのならねへやうにサア／＼此奴を引かつ
 いてはやくはしごをおろした／＼トさしづに合點と二階より引ずりおろして内所へも見える所て亦聲々悪口なして半
 兵衛をいと情なきちやうやくに湯どのの内に此糸がそれときより氣も狂亂ハツトばかりにさしこむつかへ胸を
 押へて湯どのより出んとするを抱藝者秀次といへるが引とどめ耳に口よせ小聲にて 秀「アレお待ないましおいらんさ
 ぞくやしいとも思ひなんしやうが家内中向づらになつておいらんに恥をか／＼せる此しだら内所てたしか言つた様子
 で見ればなま中に今おいらんがあのせきへ出なはいまして半さんのます／＼お爲になりイすまいマア辛防して此場
 をすまして跡で恨をおはらしなんしといはれて此糸心付この糸アイ秀次さん親切におありがたふおツすも 口のうちくや
 ら／＼ 上り口には半兵衛をおもふま／＼に打なやまし表の方へ突出して一度にどツと笑ひ胸にこたゆる此糸が無念と
 思へど詮方なく藝者秀次にいさめられ素知らぬ體にもてなせど面目なさと口惜さ兼て手當をせしならんが誰告口より
 顯れしぞ今は二階を止られても元は内所や若者みなそれ／＼に目をかけて心遣ひもせし人をいかに不實な家業でも
 あまりといへば非道の仕方よし半さんが忍んで居たはわるいにもせよ此糸が自惚らしい事ながら五丁の内てかぞへら
 れ仲の町でも評判を取たればこそ相應に家業の爲にもなりしもの少しは免容に見るはづを目下にならぶ子供にも貌向
 ならぬこの始末どうして恥をす／＼がんと胸をいためて湯どのより出るらう下の中の間にしやにかまへたる彼鬼兵衛そ
 の片胸に判人蔭八何か談じて居たりしが此糸を見て 鬼「アイ此糸ちよつと來な この糸アイ湯どめのしないうち仕舞

をして参りイせう かげ八「イエマアちよつとお出なせへ この糸ヲヤなんざいますエ 鬼「モシ蔭八さんマア見なさる
 通りの始末だがこれで唐琴屋のお職といはれやせうか後見なまへのわたしたとて斯ふみつけにされちやア外の子供の
 しめしが出来やせんマア兎も角も連れて行てくんせへ私が代に抱へた女だとおもいれ仕置の仕法もあるが親方にはま
 うけさせた事も有そうだからそれに免じてマア何がなしに濟代をさせやすしかし此糸はその方が勝手だらうけれど他
 のうちへ行ていままでの眞似は出来めへサア此糸蔭八さんの處へ行ツせへ○此糸は心をすへ 此糸ヲヤそうさますか
 そんならなにかの支度をししてト立んとするを鬼兵衛は引止 鬼「イヤ二階へはモウなりませんコウ子どもやお杉
 どんにそういつて此糸の寐巻とうちかけを一枚よこしなせへとそういつて來や。エモシ蔭八さん座敷や部やのものは
 此糸が物だといひやせうがあんまり馬鹿にしたしまつただから何もかもよく調たうへで渡すわけになつたら渡しやしや
 うまづ今日はこのまゝおまへにあづけますとさもにく／＼しく言はなして奥に入たる跡見送り彼蔭八が此糸と顔見合
 せて小聲になり かげ「エ親方振やアがつて大造なつらアしやアがる。モシおいらん丁度願つたり叶たりだ御不自由
 でも直にマアお出なせへましと氣もかろく斯る事にはなれたる判人殊に指折かぞへられし日の出の此糸濟かへは能幸
 ひと駕籠を入させまづ我家へ引取ける亦唐琴屋の二階には遣手の部屋に此糸の新造糸花を引寄て何やら小言をならべ
 立叱るふりにて其間にひそ／＼をしゆるお杉が聲 杉「サア今の理ゆゑ濟けへにさせるは私が情でざいます鬼兵衛ど
 んの腹じやア此糸さんをおかみさんに直して手めへの後見を位をつけて旦那といはれてへ了簡それが出来ずとも働の
 あるおいらんだから半さんは突出しても座敷のをばことなり 今までの通りで置つもりそうして見ると此糸さんが二枚
 も下へ押さげられるか無理な都合で新造出してもしなさるゝアなるめじやアないかへそれもあんまり馬鹿を々しい
 と實においらんの爲を思つて何もかもぶちこわしてしまつたわけでありませよ 糸花「アイお有がたふおツすそうなら
 おいらんの大事のものや首のものは 杉「私が立合てしらべるつもりで座敷へ行からはやく手まはしをして着替や何か

は此糸さんと中のいゝおいらん達に内證で預けないまし糸花、さしものはどふしいせう子エ 糸花の（秀の名）なりよく言つて尾張屋へ持してやつて金にして濱の宿へ（藤八が方の）しれないやうに届けて上なさいましトサア手ばしかくしなさいましト面は鬼と見せかけて内にふくみし情のはからひ遣手にまねなる真切（心）もの心よからぬおいらん達へはかへつてかくすこのはからい人目をいとふ遣り手部やわざとお杉は聲たかく 杉、イエ、おまへがたにめくらにされちやア私が役がすみませんサア、一處に座敷へ來なせへおいらんはじめおめへまでこれまでのしだらをいち、わけにやア内所のまへはいふにおよばず二階中へ口がきかれませんモウ、ぐち、ぐち、したいひわけをしなさいますなトあたりへきかせる小言のかず、内々にては此糸やこの新造の爲にのみなるやうにこそはからひけり

第二十三齣の下

淵は瀬とかはるならひに川竹の流れを留めし山の宿假宅長屋の裏住居日向もわろき藤八が判人なれど石に印堅いが疵と活業に只正直の首さへやまのかみとか世になふ妻女結の儉約もたらぬ世帯のその中に折節風邪の煩ひに女房お民が手一ツてまはらぬ暮し常なれどこのせつわけてふてまはりし中へ此糸をあづけられたる其日よりさすが廓で全盛にはかに今日は零落て三度の食の榮耀には魚吉の臺も飽たりし口にするめの醬油焼はまづい物屋の立看お職といはれし此糸も浴衣の上に寐巻着て北夷出錦の巻帯は隣家の人も振かへり目に辰巳屋の貸蒲團それを敷寐の柏餅猿屋で買し口取も最中の月と賞、翫すべし夜晝わかたぬ不自由は此雜文にて知察たまへ女房おたみこ 民、ヲヤ私はわすれ切て居ましたが今表へ出ましたら兼さんがお津賀さんの言傳を頼まれたと申てこの蓋物とお金をよこしましてこれではぶしつけだからおいらんが何ぞ給たいとおつしやるものを買て上ておくんなさいましと申てコレ御覽なさいこんなおもしろいものが参りましたト蓋物をひらいて出せば此糸は 此糸、ヲヤ御信切に嬉しい子エそしてマア延津賀さん處は

遠いじやアありませんか近いと行て逢たふおツすねへ（かげ八はびやうにんながららるゝ）かげ八「コリヤアいゝ言をお言なさるなる程おいらんの足じやアむづかしい爰からお津賀さんの處まじやア仲の丁を半分道申するほどありやせうハ、ハ 此糸「ヲヤそうさいますかばからしい私やアまた大造遠いとおもひました八にむかひて 民「モシエ此お金はおいらんへ上て置ませう子 此糸「アレサおかしい私を持つてをりイしたとてしかたがおツせんおまはんそれている物を買なましヨ民「それじやアわるうございます かげ八「コレサ、お民つまらねへ事をいふなへ延津賀さんの信切は藝者に稀な事だけれど壹歩の金をおいらんに持しておいたとはじまらねへ今にだれぞ來て泣ごとをいふかくるしいはなしをして見やそれこそ自分の事は忘れて持て行なましなんぞとてほふり出して仕まひなさらアそれだからお津賀さんが何ぞ買て上ると兼さんにそう言てよこしたのはおらが宅の不都合を知つてゐるからだアな 民「そうさねへトはなしに此糸氣のなか此糸「ヲヤ私の好きなものをくれさしツたヨ（トわらふはよく、きにいりしものかすべておいらんといふものはいろけはあれどおもしろい）を見て此糸「ヲヤ私の好きなものをくれさしツたヨ（トわらふはよく、きにいりしものかすべておいらんといふものはいろけはあれどおもしろい）民「ほんにねへモシちよつとお見白魚と玉子をいりつけて海苔をまぜて山葵が下すばかりに皮がむいて有ますヨかげ八「そんなにびつくりしねへがいゝ一ツて五貫目ある琉球芋のはなしを聞たやうに 民「ヲヤ何もびつくりしは仕ないは子外聞のわりいかげ八「エ、イヤかましいそれよりはやく煮花をこしらへておいらんにこれでお茶漬でもあげる支度をしねへな 民「ハイ、直に小言になるからいやだ かげ八「いやだもおしがつゝ、此糸「アレサモウいゝにしないましヨしかしはやく夫婦喧嘩がして見たいねへそうなりイしたらさぞ嬉しい事でありイせう子 かげ八「イエモシおいらん達や娘子どもの了簡じやアはやく思ふ男と一所になつてとき、はすねたり喧嘩をしたらさぞたのしみだらうなんぞと思ふのが世間のあたりめへてござへますがサアそうなつて子どもでも出來てごろうじろ立派にくらす御新造さんでも色氣も戀情もさめてしまつて。エあれがかと見違へられるやうになりますぜいはんや貧乏世帯をもつてごろうじまし昨日まで町内の若衆が血道を上てさわいだ娘でも直に大腹を抱て味噌こしを袖に右の袂へ燒芋の八文も買て歩行

やうになるとまだ島田であられたものをなんぞと後悔して泣のがいつくとも有ますぜしかし今の娘は親のしつけがわりいからはやく亭主をもつて子どもでも出産のを恥かしいとは思はねへて手がらのやうに思つてゐますイヤそれから見ると女郎衆はマア十人が九人めつたに小兒を産ねへから通人は兎角おいらん達を引ずり込たがりますぜトはなしの中に辨天山の七ツの鐘ボウ引く 民「ヲヤ〜モウ七ツかねへ かげ八「ナニヲヤ〜なものかいつてもお晝と夜食と一ツにならアおいらんがなんぼ朝おそくツてもおひもじかるう 此系「イ、エなんだかおまんまなんざアたべたく有イせん實は先刻ツから胸がいたふおツす かげ八「また半さんの事でふさぐわけて有ませうがモン今にどうかありませんヘナとはいふものゝ半さんもぜひ今日あたりは來なさりそうなものだテ 此系「イ、エわちきが斯なつた事とは知らずまだ廊にゐると思つてたゞ面目ねへくやしいこれといふも私のおかげなんぞと今じやアにくんで居なんすだらうと思ひイす トさすがりはつなおいらんも懸 かげ八「たとへなんでもかても友達をたのんでも廊のわけを聞なざるはずでござへます 此系「それに便りの有イせんはもしや此間の時に打所でもわるくツて途中か宅で萬一の事がありはしまひかと案じられてなりイせん かげ八「ナニ〜それほどの有ますめへ トはなしのうちに女ぼうが膳だてを かげ八「そして半さんは何處に當時お出なさいます子やつぱり繪岸とやらか子 此系「イ、エそうじやア有ません矢義の城さん所にかくまはれて居さツしやるといふ事で有イす かげ八「ハテ子その城のさんお宅はへ 此系「たしかに巢鴨とやらでおツす かげ八「そいつはたづねるにも急な事にはめへりますめへこまつたものだとはなす折しも入口の障子の外に女の聲「ハイチツト御免なさいまし 民「ハイどなたエ「アノウ廊へよくお出の蔭八さんの處はおまへさんでございませうか かげ八「ハテナ娘の聲だか何だ知らん この系は丁とくま 民「こちらでございませうお這入なさいまし「ハイト障子を明ながらも遠慮をなして這入らねば 民「サア〜こちらへお上りなさいし何の御用でございませうか かげ八「御遠慮なくこちらへお上りなせへハテどうか見申たようなお子だがといふかねば 民「ハイ久しくお逢申ませんわちきは唐茶屋の かげ八「ハイどなた

だツけ子 嬢「ハイアノウ久しく本家に居ましたんだから かげ八「エハ、アやつとおもひ出したお蝶さんでございませうか 嬢「ハイ かげ八「ヤレ〜〜〜さうでございませうか御免なせへ此間はチツト病氣が トいひながら 少し見申さねへうちに大そうつくしくおなりなすつたコレサお茶を上げか時マアどうしてわたくしどもへたつねてお出なさいました今じやア何處にお居なさいませうエ 嬢「ハイ小梅の方に居ますヨ かげ八「ハアそして私に御用といふわけもあるめへがそれともなんぞ廊へ使にでも参るわけか子 嬢「イ、エそぶじやアありませんがトしばらく云そ〜くれしが思ひ切て嬢アノウおまへさんにチツトたのむ事があつて参りましたがアノウ私を何所ぞへやつておくんなさいなかげ八「エイそりやアノマアとんだはなしだ何ぞおめへさんが其中でお育なすつても敷から棒にそんな事をおもひつかツしやるとはよく〜なわけでありませうがマアどうなすつたのでございませうエ 嬢「ハイすしお金が入ますからサかげ八「サアその金のわけまた當時のお身のうへをくはしくお聞申たうへは兎も角もだが何にしてもわりいおほしめしだてへげへの事ならそうせずと外に 嬢「イエアノウ今じやア私の身は自由になつて何にもかゝり合はないから かげ八「そして金の入用なわけはへ 嬢「それは手廊に前年居たお兄いさんが今度實正のお宅へ歸參とやらが叶ふについていろ〜お金の入といふことゆゑそれを私がこしらへて トいふこゑをきいてこのいとが 必竟此すゑいかならん次の一齣の終りをきくべし

第二十四齣

さてもお蝶は丹次郎が本家へ出入身を立る其手土産に先達て松兵衛が横取せし金子を今少しなりとも調達したしといふ内心をきいてその金のために身を賣て男に操をあらはさんとせりかくして見れば歳ゆかねどその心ざし貞勇にていはゆる俠氣の娘といふべしわづかの間に身を再度代んとするは尤 かんしんすべき事か時においらん此系は二階より下來り 此系「ヲヤお蝶さん誠にめづらしうありイすねへ 嬢「ヲヤ〜おいらんかへどうしてマアこゝへヲヤいつそ苦

勞をさしたそうておやせなはりましたは 此系「そうざいますか此間中からいろく」と苦勞をいたしいすがおまへは
 マアどうしてこゝへお出のわけでありイすへトいはれてお蝶は繰返したんくのわけをはなし 善「おいらんエなぜマ
 ア私はこのやうに苦勞症でありますだろうねへそしておいらんの御苦勞なさいますのはやつぱり半さんのわけで有ま
 すかへ 此「ア、そふさますそれに今までと違つてモウくくやしめにあひイしたからいまだに胸がさけるやうでな
 りイせんとこれも身のうへをくはしくはなして互に愚痴をかたり合折から表へ雪踏の音「ハイチト御免なさいまし
 八さんのお宅はこちらでございますか子「ハイこちらでございます「へいさやうならば御免なさいましト入來る人は
 櫻川「此系は目ばやく見とめ 此「ア善孝さん 善「ヨウ引おいらんヤレくくこりやア有がてへおめへさんがいら
 ツしやりやア何もかも直にわかるわけだイヤまづ御免なさいましト上る かげハ「サアくくこちらへお出なさいまし
 善「へいへいエモウおかまひなさいますな時においらんマアとんだわけてござへました子 私「アさつぱりぞんじ
 ましなんだが此間千葉之助さまの御分知の千葉半之丞さまといふおやしきへはじめて召れましたが是までついぞ參る
 様な御えんもないがどうして召てくださるかと存て見ますと旦那さまといふは繪岸の半さんだからきもをつぶ
 しましてだんく御様子伺ふと是までは御部屋住なり御病身ゆゑ若隱居なされてござつた所急に親御さまも御見さ
 まもおなくなり遊ばして半さん御家督とおなりなされたと申す事それも御次で承りましてそれから御内意おいらん
 の事をわたくしにとりからはからへとお頼みゆゑ唐琴屋の方へ其後參つて掛合の中昨日まゐつて見ると亦びつくりいたし
 てやうく今日こちらへまゐりました 此「オヤさうでありますかマアく半さんの事は便のないもつともとわかり
 ましたが唐琴屋はどうし伊した 善「まだこちらではさつぱり御存でないわけか子 かげハ「こちらからまゐると申て置
 ましたからまだ何とも 善「イエくおいらんの事くらゐな事ではございませぬ大變サ 此「オヤなんざいますエ 善「イ
 エモシ誠にきものつぶれたおはなしサ今の旦那は後見ださうだがありやアモシ古鳥左文太といふ盗人の頭ださうてこ

ぜえます 善「エ、イそんなら本店からつた鬼兵衛どんは盗人でありますとへ かげハ「そりやアマア大變な事てござ
 います 善「それがどうして知れたといふと千葉の藤さんの御家に居た男が松兵衛の五四郎とかいふわる者がそれが重
 忠さまへ召捕れてそれからだんくあらはれて來たさうでござえますそれゆゑ唐琴屋はどうもむづかしい様子どうか
 立さうもないといふ噂でございますしかし今また他ではなしをきけば榛澤六郎さまがそのまへからのおしらべて唐琴
 屋の家の娘を内々でおたづねなされたそうだが古鳥左文太當時は鬼兵衛後見ゆゑ家にはかまひなく家財はその家付の
 娘と本店へくださるだらうといふはなしをききましたかそうして見ればおいらんのお身のうへもどうか手軽く方が付
 ませういづれおいらんは半さんの方へお出なさるわけござへませう子 此「そうなりイすと嬉しいねへ 善「それさへ
 お聞申せば直に方をつけますがモシわたくしやア此本の作者に憎まれても居りますかしらん野暮な所といふと引出
 してつかはれますしかしマアく善悪の差別がわかつておめでたいいづれ近日何もかもおさまる様になりませうとい
 ふてそこく歸る善孝其跡に此系お蝶がはからずも悦びいさむ春の色めでたく開く梅ごよみ吉日占てそれくにお
 さまる家の大略をこゝにするせば彼お由は藤兵衛が妻となり又此系は半之丞が方へ行お蝶が素生はこれより後六郎成
 清の正しにて近常が種なるよし相わかり丹次郎が事を内々世話になりし恩といひ操めてたき娘なれば魚略にならずと
 我子丹次郎が別段に名跡をたつる心願かなひ繁昌の基をひらく時に臨んでお蝶は本妻となり米八もひとかたならぬ貞
 實なれば親の六郎へはれてお部屋さまとやまはれいづれもその中睦しく新造系花遺手の杉判人等善人はいづれもす
 るずゑめでたくさかへまた悪人はそれく罪をかうむり四人の女子はお由を第一とし此系を二ばんとなし三番目を
 米八とし四人目をお蝶とさだめ歳のじゆんにて内々は姉妹のやくそくをなし子寶おほくまうけつゝ幾代かかほる春の
 梅實いりをこゝに壽てめでたく筆をおさめはべりぬ

春色梅兒譽美 卷之十二大尾

梅
こよみ

餘梅
興曆
春色
辰巳
園

梅曆 餘興 春色辰巳園序

黃帝は曆の本来元にして。是より義氏和氏と云二人の番頭。命を受けて猶曆を改む。帝舜是にのつて亦羅賣取次を
 多くなし。既にして本朝に出見世出てより。貞觀の始。大春日眞野麻呂。又天徳年中司曆博士。加茂保憲といふ間
 屋達。廣く傳へて曆なる事久し。こゝに狂訓亭の主人。先に梅曆の匂ひよきを世にひろめ。成事四編にして筆を止。
 夫彼は。天地陰陽。變易交易。順逆相尅。吉凶得失の大仕掛にして。天下の重寶又是にならぶ物なし。是は男女の
 姪樂を誡むるのをしへにして。勸善懲惡の世話狂言也。されや世の見物是をあかずめてけるものから。書房の欲心
 其かくはしきに現をぬかし。今一花咲せんと。頼にそが餘興を需る事切なれば。ふり捨てたき梅が香の。匂ひも深き
 川の世界。題而春色辰巳園と云。よくその穴をさぐる事。川太郎も終に及ばず。嗚呼趣向のいきなるや。意氣張強
 き戀路のたてひき。かけ引のよき筆のあやに。釣出したる三筋の糸。互の胸に忍ごま。ばち利生ある撥皮の。厚き意
 の仇競ねじめはあぢな一調子。變たすちは新工夫。すいと甘きを味はふた。作者が料理即席即案。ぐつとひねつた獻
 立の。うまみを味はひ給ふたなら。亦二の全部を待たまへと爾云。

于時天保四巳春狂訓亭にかはつて述之

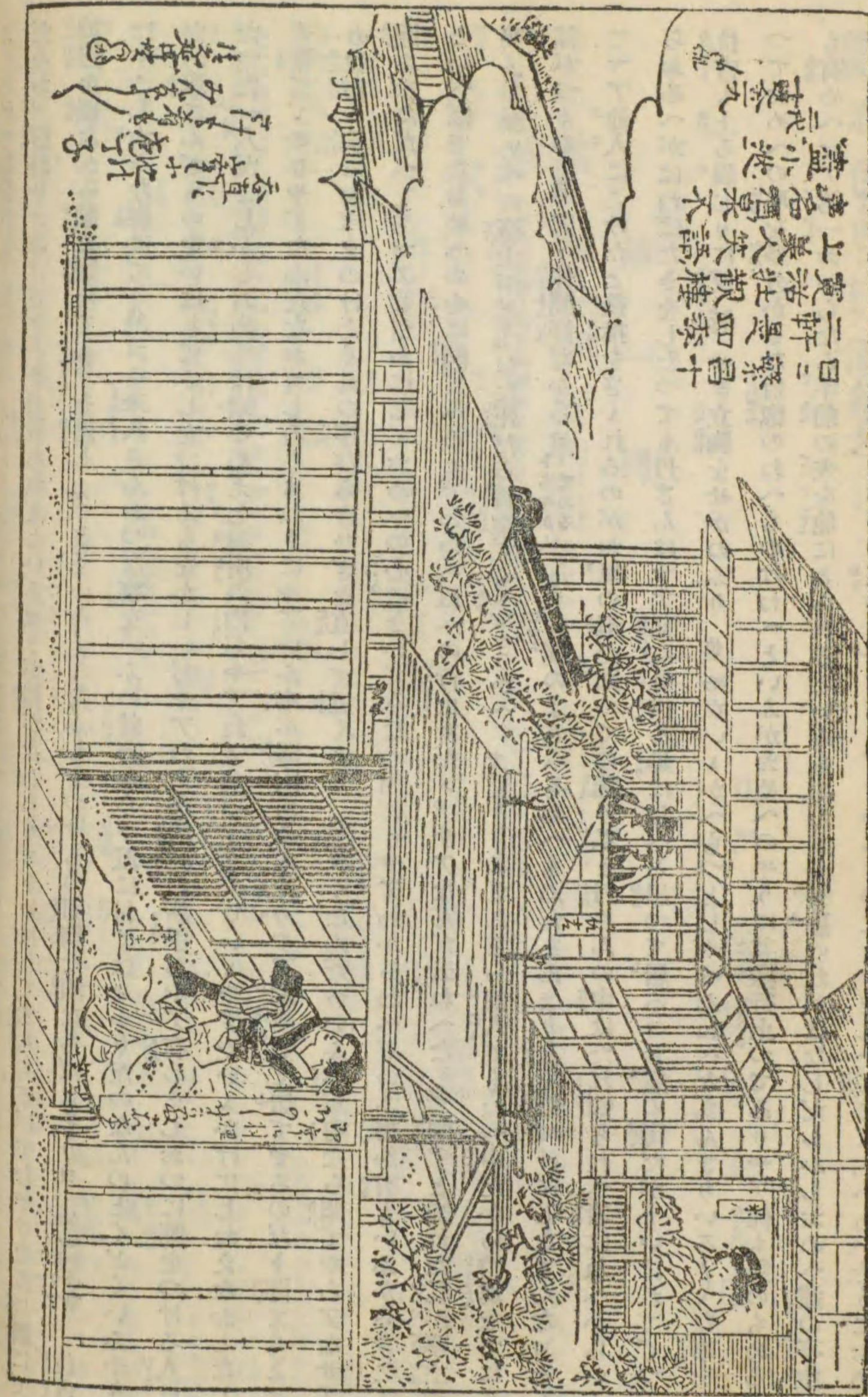
三 亭 春 馬

第一回

「それも鳴音の鶯も梅に三うらの小紫粹なゆかりとわれながら我つま琴とかきならす思ひのたけの尺八もれんぼながしは權入がし、トウたふとなりの海よりはてうしもこゑも清元のその十二軒の會席に小池と呼れし一ト構世事で丸めてうはきな中に實意を見世のかゝりさへ直な柱も杉皮附つくろはねどもおのづから土地に合たる洒落造如在内所の咄し合また吞直して意氣にする客の絶間もなかりしが今日も尾花か梅からか此家にしばらく酒もりも程よく吞て歸りたる跡に残りし女妓の中に何かもつれて亦残る彼梅曆にて看官のおなじみなりける米八仇吉善悪わからぬさしむかひたがひに酔て仇吉は二階さしきの中窓から庭を覗きて 仇「ヲやお熊さんちよつとお出なはなしがあるから この小池の娘おくま二階のかたうもの仇吉にむかひてわらひながら手のひらへよの字をゆびでかいて見せかほふくらしして見せる是は くま「今まゐるヨト云ながら勝手者にたしかに仇吉丹次郎がわけをこのほどはよね八が知つてはらたちあるだらうといふしうちなるべし

何か用事を言付て居る仇吉は元の座に行おとなしく小聲にて 仇「米八さんちよつとはどかりながら上ませう よね八はきりすな 仇「モン米さんいやかへおいやかへ よね八は氣がつい 米「オヤわたいかへちつと 仇吉ははな 仇「フン私かへどころか最前から猪口のやり所もねえやうにはどかりながらのおそれいるのと下から出りやアおそろしい高へ唄妓衆だのはおりさんだのが開てあきれらア 米「オヤさうかエ。私やア此方にちつと考へる事が有たからきがつかなんだサアいたゞこ

よくそれで押動のなるほど違つたもんだ 米「オヤ仇吉さん吞れねえとは云やアしねえヨ 仇「さうよのう氣がつかなんだのか。猶わりのい。いッそまだ吞れねえといふはうが罪がなからうヨトいはれて米八もさげすむやうなる口調にて前髪を搔ながら顔を擧めて 誓を落し 米「よくいろ／＼なふしをつけるの面倒な酒ならばよそうヨ ただんまほ也 仇吉はすこし大きな聲にて 仇「コウ米八さんおつな事をいふの此方から下派に付てはどかりだのなんのとくどくいふやうだが腹さんざものをいはしてふしをつけるもをかしいぢやアねえか清元の新手ぢやア有めえしおつに節をつける人はたつた一人だよしかしおめえは知るめえ七場所の内ぢやアねえがの 米「モウいゝやアやいゝかげにしねえなおとなしく請てゝやりやアなんだなおもしろくもねえにやアいふ事が澤山あるが此方やア勘辨して居てやるのだト聞てもとより仇吉も胸におぼえのけんくわの序びらきひぎを直して近くより 仇「ヲヤなんだへいふ事が有なら聞てやらアなサア聞ふなんだへ 米「マアしづかにしておめへの心にきいてみな 仇「こりやアわからねへぞいふ事か有といふからきこふといへばまたおめへの心に聞てみると。わからねへの行止りだノ。サアなんだ云ねへな 米「聞ずと知れた私が亭主サ 仇「ム、おめへの亭主がどうした死だら香奠ても上さうかへ 米「そ、うよまんなら他人でもねへ中だから香奠までにも氣がつくの 仇「ア、仲間好だからヨ トちやかし 米「仲間のよししみもねへもんだあんまり人を踏つけにしなさんヨそしてマア他人にこけたと後指をさゝれるのがお氣の毒だ知つての通り私と丹さんの中はたれ知らねへ者はねへからいくらおめへがはねばたきをしたつても丹さんはマア私に見代る鳥はねへと思つて居るヨお氣の毒だがトいはれてぐつと仇吉も上る眼じりに反唇せき立胸をせかぬふり 仇「モウいゝかへもつとしゃべんねへなあんまりいろ／＼な事をいつておめへの恥を多分かきな自惚のねへものはねへといふがおめへのやうに其様行止つてありやア何も氣のもめる事も有めへマア第一おいらなら手前の夫を他にとられるといふもあんまり智慧のねへはなしだしおめへ達の亭主を他がなんと思つてやつたら有がてへ事だと思つて居てうどよかうのにトすました顔にて「かわいそうにおめへ



日三繁昌十
二軒長田奈
上美人笑語
實活壯觀糖
名獨果不
盡小池
二代
櫻川

もまだ洗ふて見たき沖の水だの 春なるほどおめへも餘程世話役だの妙正さまの坊さんじゃア有めへし念をいれてお
 加持をするの清元の節づけからうぬほれの御異見まで澤山聴聞いたしましたがマアよくつもつてお見ヨ私だつてもど
 うやらこうやら此處の土地では少しは他人も知つてくれて居るのに丹次郎が事を此所彼所ていはれたり笑はれたりし
 てもちつとやそつとの事をやかましいと心ですましてしらねへ顔をして居るのもおめへなり私なり斯いふ活業してゐ
 るからにやアちつとやそつとのちよい色ぐれへはあたりめなわけだはずそれだけのおめへのやうにちよいとした
 事にも何か突かゝつて見たがつたり出合せへすりやア氣障を云たりするもんだからどうも三度に一度は此方も心持の
 わりい事だらけだらうじやアねへか何も私が通人かゝつた事をいふ事もねへが此末ともに仇吉さん止ておくれと無理
 はいはねへからずいぶん穩便におたのみだヨ仇ム、なるほど粹とやら通人とやらいふ人はおめへの事だろウヨウウ。
 よせと云のじやアねへ穩便にくれろとへおつな福清だのこのかしく六三の福清をいふ也。そしてマア一體何を穩便にす
 るのだへそりやア私にいふのかだれにいふのだへおめへどうした大造酔たのこゝは十二軒の小池だヨ櫻川の善孝でも
 來てもらはふか善孝に來てもらはんといふなるべし。チツト氣をたしかに持なヨ丹次郎だの亭主だのと何だかおめへ氣でもふ
 れて居るやうだぜ逢橋の毘沙門天へ日參でもして御利益をお願ひ申な
 これは此頃逢はしなる何がし公の御中屋敷に勸請あらせられし毘沙門天の御事にて靈驗あらたなることかくれ
 なく婦多川一同に尊信せるよし依てかくはいふなるべし
 仇、まだわかに氣の毒なトあくまで手づよく仇吉が酒のきげんで突かゝる言葉を聞て米八もぐつとせき込戀の仇そ
 の仇吉の貌を見る顔にもちるや紅楓葉の青かりしより思ひ染辛苦萬苦のその中に見繼男をねとられしと思ふ心は素人
 もそれしやもかはらぬ女の情くやし涙のせくりくる無念をつゝむぞせつなけれ

第二回

偽と思ひながら今さらにはたがまことをか我はたのまんこれは仇なる男などの深くも愛せずすがに捨もやらぬを相たのみたる女の心をよみたるなるべしそれにはあらで米八が常さへばち／＼としたる眼をまたつりあげし見脈にて額に青く筋はだしてもさすが利發な女ゆゑウントこたへて落つたものいひ 米「ヲヤそうかへわりい事をいつたツけの仇さん堪忍してくんなよなる程婦多川の水のしみた唄妓衆はまた格別ちがつたもんだのうトにつこりわらひ落つきはらつて居る仇吉はごうはらそうに 仇「どうもよくそうすまして他をさげすんでみられるのなんだか知らねへが其おんびんのわけを聞せなヨウ。コレサ 米「モウおめへも餘程たけ／＼しいのうい／＼はな其様おめへのやうに強情なら證古を見せやうからそれで何とでも云なヨ トいつたばかりで此時さすが仇吉も女心にギツクリと思ひまはせば過ころ彼中裏にて米八と出合がしらの其節に丹次郎が方へ落たる筈の事を氣がつきしがまたつく／＼と考へるにそれを證古になせばとて云拔ならぬ事もなした丹次郎と私とはなるほど戀情サと云たところがしれてわるといふは世話になつてゐる且ばかり是もむづかしい事はなけれど兎角丹次郎にほれた心のよはみからあんまりたんと云つてのりてもまた丹次郎にさげすまれんもはづかしとさすが歌妓のやさしさは戀意を活業女の情思ひなやみて口ごもればまた米八も心に一物こゝで去頃拾ひ置し筈を出してまづ一番はへこましても此所ではかりはおもしろからずまたこれぎりになりもせまじせけばせくほど戀の意地仇吉ばかりをせいたりとして男のこゝろをとりきめずは益なき事と氣がつけばまた時節をはかりて手をきらせんまづそれまでは捨ておき今までのごとくあやつりてこの後丹次郎をもよく／＼談じてしゆだんもあるべしと心意の二人の手取呼吸をはかる取組も餘情惚たが負になる色の土俵のせきと關四十八手はまだな事新し手をもつてお客をば救もからみもするなれどたがひに惚ては素人にもおとる唄妓の實験いづれおとらぬ仇吉米八女房

氣どりの一文字に無理な横綱横戀慕の行事の團扇さへかたやにとふもあげかねし作者が筆の勝負附しはらくこゝにあづかれば「米双方ともにしばし無言〇折から階子をどん／＼とお熊は手すりにつかまつて 米「さん仇さん米「ヲヤおくまさんたいそう長居をした子エ 米「長居はい／＼がねマアどうしたのだ子おめへさんがたア何を先刻からくぐずいづつてゐるのだへ由さんがあんな氣だから米八さんと仇吉さんはどうかしはしないかと苦勞にするから私が何と直うもしないが二人ながら酔倒れて居なはいますと云ておいたが子おめへさんがたが云合の喧嘩をおしだのといふと直に人が噂をして何かにつけて邪魔になるは子モウ能かげんにして兩方が堪忍おしよ 米「まことに有がたふナアニわけもねへことだはね 仇「おくまさんありがたふトいふうち下より女の聲 女「おくまさん／＼ちよつとお出なはいまし

くま「アイヨなんだへ 女「アノてうちんやの又さん處の何がお出なはいました 米「何がとはなんのこつたお哥さんがお出のか 女「ハイ 米「もの覚えのわりいと言ちやアねへ今もあるからお茶でもあげなヨ 女「ハイ 折からまたも下よりして申「ライ／＼仇吉さん母御が迎ひに來たヨ 米「ヲヤ仇吉さんおつかアが來たとサ 仇「ヲヤそうかへそれじゃア行ふトいひながらお熊と一所に下へおりてあいさつそこ／＼に歸り行米八はしづかにおりて雪隠へはいるそれより仇吉が歸りし跡へ米八は出來り米「まことにモウ酔て／＼い／＼こゝろもちに寐てしまつたヨお熊さん有がたふらひながら 仇「さん酒のうへがわりいかねへ 米「ナアニそうでもないのさ 申「笑ひながら何を喧嘩をするのだ打捨て置ねへナ高くとまつてこりわらひ 米「ヲヤ由さん何ぞお聞かへ堪忍おしヨ寐て居た氣だがねへ 申「違へねへ夢にでもけんくわをしたろう 米「寐言が由さん耳へきこえたかエしかし私等アいとせへいけねへの高くとまつてお見な猶いけやアしねへは子 申「能よおれが肩をいれらアな 米「ヲヤうれしいねへトいふ折から客を歸してお熊も米八が側へ居る 申「お哥さんは何しに來た 米「ナニ何でもないが只ちよいと寄たのサ 申「米さんの處へ相摸屋のはなしはしたかのう 米「アア福田屋中島屋丸本外四間のも聞きましたヨこれはごぞんじの家の事なんの 申「そうかなんだか面倒だのう 米「ア、ねへヲヤま

たわたいは此處へすはりこんで居る氣だそうだドレ行ふト立上る 申「また急いで歸つて亭主をかはいがるヨ 米「ヲヤヲヤ嘘ばつかり何そんなものが有ものかねへお熊さんト顔を見合せにつこりわらひちよいと手がくるくつまをとり門のわきから勝手へもあいきやうをいふ 米「どなたもおつかひたて申ました 申「ごうぎと時代なせりふだの 米「ア、お屋しきものだから子ハイ左様ならト歸りゆく。吹すさむ風な恨そ花の春紅葉の残る秋あらばこそト古人の名歌妙なるかな月に村雲花に風思ひ思ふた其中を水さすあれば欲徳にツイ引さるゝ事もありまた付人のあをりから元木を捨る心にもあらで浮薄な色事も終にもつれて恩と義理わすれて横に行も有眞そこほれた心からたがひに深くうたがひすぎでわづかな口舌が元となり死ね死なふとの約束を今日は見かへて増花の。盛りを見するつらにくさに仇敵の思ひをする中もはじめに結んだる誠の縁はきれやらで互ひに別れて月と日の立にしたがひ男女とも亦うとまるゝ後の色。あるときは有のすさみにつらかりしなくてぞ今は人の戀しきと。過たる事を兩方が思ひ出して立歸る俗にいわれる腐縁はなれぬ縁とは親兄弟も當人も知らぬ再會あればたとへせかれて遠くなり亦是不義なる行ひのありて他人の方へゆくともみなこれ其身の心より出るにあらず何事も滿ればかくる世のならひ逢て別れてわかれて逢ふて中たゆるとも縁あればまたちぎり合時ありて定めがたきが戀の道たゞ何事もあらそはぬ風の柳のしなやかに相籠つかしを言かけたらば。

偽とおもはてたれもちきりけめ
かはるならひの世こそつらけれ

と無常を感じて争はず他も恨まず月日がたてば捨たを悔み捨られたが身の仕合せとなるもありとは云ものゝ萬の事不足を思ふて元をわすれ不義の道へ入る時は一旦榮えを見するとも末は後悔うたがひなしたとへ浮氣な活業にもおよばぬ欲の願ひから他にたばからぬ用心して只其時の事を思ひ親兄弟の強欲にひかれて不實をすることなかれといらざる筆のついでにしるして類との違に異見をするも作者が癖の老婆心嗚呼われながら老成なりけりそれはさておきこ

こにまた所はいづれかわすれしかど壘や横町か稻荷横町の邊りになん日くれてやうく人顔のわかる頃出會がしらの男とげいしや「ヲヤトたがひに立とまるこれ仇吉と丹次郎 仇「マアちよつと爰へ密ておくれなねへそんなにおまへのやうに内儀さんをこわがる事もねへ 丹「何さそうじゃアねへが今内へおれが客をまたして来たからヨ 仇「増吉さん内儀のやうにいふと居れば 仇「アレサマアそれだからちよつとだは子トある家のしやうじをそつと明て 仇「増吉さんちへお這入なせへな 仇「サアおあがりトずいと奥へはいる丹次郎もつゞいて這入る 仇「ヤヤくらいあんどんだト火鉢の側へすはる丹次郎立てる 仇「丹さんおすはりななんだねへ 増「モシおすはらないましたしかし仇さん兎も角も二階へ行ねへひよつとまたうかれ仲間が押込むといけねへから 仇「なアにそうしちやアめねへとヨ強情でいけねへやアな増「マアいゝやアなおめへがそんなことを言てゐるからだサア私と一所にお出なせへヨアノ子にかまはずサ。仇吉はたんでよこを 増吉は先に立丹次郎が手を取て二階へ行ながら下を見て 増「仇の字我慢をするのト笑ひながらはしごを上る色の世界のならひとてはじめて逢し増吉が男をこなす取まはし垢抜したるそれしやの風情それ婦多川の水たるや清も濁るも日に幾度色の出汐に乗込あればまた引汐の思案有にじる程猶深くなるさてさまく水加減は生洲の魚をやしなふとやいはん

梅曆 春色辰巳園卷之一了

江戸 狂訓亭主人著

第三回

京風うたみつの車にのりの道夕顔の宿の破車あらはづかしや我姿梓の弓のうらはづにあらはれ出し佛はむかい
 わすれぬとりなりをアレあれを見よ蝶は菜種。なたねは蝶のつがひ離ぬ妹脊の中を見るに嫉まし亦うらやましわれは
 磯邊の友なし千鳥。仇言ヲヤありやア何所だのいゝ聲だヨ。増言ありやア裏の家へ逗留に来てゐる娘だヨそりやア
 そうとおめへ二階へ行ねへかナ。仇ア、ト立かゝりて何か増言が耳にさゝやく。増ウ、しようちくさうか米八さん
 のかそうか。おいらアはじめて見たヨいゝ男だのト仇吉が脊中を一つたゞく。仇いゝヨたんと遊びなヨそりやアいゝ
 がそのわけだからの。増いゝよ今におつかアが歸るとおめへの宅までそういつてやるからいゝやアな早く二かいへ行
 ねへヨ。仇おたのみだヨトいひながら二かいへ上り仇丹さん。丹なんだ仇ナゼマアそんなにふさいでゐるのだへト
 側へすはり摺寄て丹次郎が手をとらへ。仇外じやアないが子おまへにそう言て置なくつちやアならねへことが在から
 悪止をしたんだア子毎度そんなに無理やアいはなひはず。丹それだからこゝの宅へ来たからいゝじやアねへかそれが
 わりいと云たか仇わりいといやアしねへが氣のすまねへ顔をしてゐるからサ。丹よくいろくなことをいふぜそして
 マア何をいふ事があるのだ。仇ナアに外のこつちやアないが私がいふことだがそれに亦おまへも聞て知つて
 お出だるうが事によれば米八さんには離れぬへけれど少しは意氣地らしい事もいふはなればならぬへ事があるからそれ

をおまへに極ておいて私かなんば離れねへ心で達人を云た所がおまへの了簡がおぼつかねへと私はモ一死んでも生て
 もゐられねへほど外聞のわりい身のうへになるからどうぞ丹さん私のやうなはかないもんでもわりいものにみこまれ
 たとあきらめてはなれる心になつておくれでないヨ。エ。エ。丹さんト男の顔を見て涙をホロリと膝のうへ思ひこん
 ではなかくに案じ過して胸せまる女心ぞ哀れなり。丹なんだそれをそんなにたいそうらしくいふのか死ぬの生る
 のといふほどな事もあるめへ。仇ヲヤそれじやア丹さん私がこんなに氣をもむのをおまへは當座のなぐさみて今にも
 風のもやうによつて直にもわかれる了簡かへ。丹ナニそうじやアねへがあんまりおめへが氣をもむからヨ。仇いつそ
 氣をもんで死でもしたらよかろうと思ふヨ。丹なんのつまらねへそりやアいゝがおらアこゝの宅は知らねへ内だがこ
 うしてゐてもいゝか。仇よくなくつておまへをこゝへいれるものかネおまへは知らねへはづサ今じやアモウ只の宅だ
 ものをお案じてないヨおまへの逢つてわりい人は來やアしないヨそれよりか今のわけだから急度こゝろを定めておくれ
 ヨ。丹そんなにおれを極たといつておめへの身をかかげて見ねへあんまり極め過たらこまるだらうぜ。仇ヲヤなぜ
 へおかしい事をお言だねへ。丹なぜといつて先達てあらまし聞たおめへの身のうへたとへどういふわけにしてもおれ
 が一生女房に持ふなんぞといふ事はならねへ義理と知りながらついた事から日にまして實を盡してくるから自
 由になるなら米八が外に浮薄な事でもあつたらそれを節にと思つて見たり亦おめへの身をかながへればなかくそ
 したわけにもならずよしやおめへはそうしてもさせてはすまぬ浮世のならひ儘にならぬといふうちにもはじめからし
 て今日か翌日切れてしまふといふ事がたがひに知れた二人が中とは神々さんもお知りなさるめへと宅で一人と思ひ出
 して泣て居る時があるよト聞てしばらく仇吉はものさへいはずしやくり上さしこむ癩に齒を喰しばかりかへかねたる
 女の情思はずむせるなみだこゑ。仇私がいふと思ふ事をおまへに今さらいはれてはいふもおかしいわけだけれど正
 直私も時々は思案にあぐむおもひすこし今は斯して中よくしても始終そはれる譯にもならずどうぞすべく別れたら

此ものおもひはあるまいかとおもつて見たりいや／＼どうでうつくしく別れるといふは出来ないわたくしが胸腹でも立て別れたらいつそあきらめにもならふかと思ふ矢さきへ似た人の聲がしてさへ思ひ出す心がたへねへ今日このごろ兄弟分とか親分とかなつたところがなほの事じれつたからと來年の事か今年か知らないが今ツから後の事までかながへるとしみ／＼死たくなるけれどもよくもわるくもおつかアに育られたる恩はあり手まへ勝手をしたならばおまへのためにわるからうしとほんに何かをかながへるとかなしくつてならないヨト取すがりたる仇吉が實意を聞けば丹次郎も有にあらぬもの思ひ心のそこには米八もまたなか／＼に捨られずと途方にくれし男泣しばらく二人はさしうつむき溜息をつくばかりなり折から下より増吉が登る階子の中段にて 増 仇さんサア煮花が出来たヨトいひながらしづかに上り二人を見て「ヲヤどうしたんだへ其様にふさいでからに兩方がだんまりかへト 次郎におかひモシエ初にお目にかゝつてまだおなじみもねへわたいがぶしつけらしいわけだけれど仇吉さんも一方ならねへ苦勞な様子くはしくわけはしらないけれどおまへも米八さんといふものが有と知りつゝ斯いふわけになつて見れば仇さんはいふにおよばずたれしも覺のある事だがほんに命も捨る氣になるのが意地づく色の道たま／＼斯して逢時には恨みつらみは餘所にしてたがひに嬉しい顔をしたたのしむがいゝじやアねへかへそりやア前後いろ／＼とかがへだてをして見たり取越苦勞をする日には氣色を悪くするばかりでまことにつまらねへわけだはね斯いふわたしも今までに小春紙治のお綱じやアねへが面白い事はな事わけのありたけ氣をもんでも縁といふ字の出来不出来望の通りになりはしないがせめて結んで居る中はその日を和合くらすのが第一の事だと思ふヨ餘り何角を案じすごして氣をいためるはそんだは子。ヲヤ心なくお邪魔をした仇さんツツ浮ねへなそんなにふたりが涙ぐんでふさいで居たとてはじまらねへヨいゝころお客の機嫌を取につらくやしい目をするも蔭で莞爾する事が有のでつゞく唄妓の命氣をはつきりと持ねへヨトさすがその身も苦勞人色の諸位をくみわけて異思も手がかるく口癖にいひつゞ下で行増吉には二人が顔見合せ 仇「まことに

増吉さんは嬉しいヨ 丹「ほんに親切な人だのう。イヤそれはそうとおらア斯しちやアあられねへト立を引とめ仇吉は仇「アレサ丹さんマアお待ちそんなにうるたへて歸らずといゝは手まだはなしがあるからもうちつとお出ヨ 丹「それでも宅へ客を待しておいたからヨ 仇「うそをおつきな何お客が有ものか米八さんが待ばかりだヨ 丹「なんのめづらしくもねへ米八にかまふものか 仇「ム、ウさましてたんとおあがりな 丹「コウおめへも素人じみたよしねへなその甚介は此方もあるがそこは我慢しておいらアいはねへ 仇「ヲヤ私はいはれるおほえはないよ有ならおいひサア聞ふ何を私がやきもちをやかれるやうな仕うちをしたへ 丹「また直にじれこむヨかんしやくをおこすと身の毒だア 仇「そのかんしやくもだがわざだへかわいそふだとお思ひな 丹「おもふどころかこの頃は夢もおめへの事ばかりだ 仇「アレサちやかしておいてない他の氣も知らねへでまことに憎いヨ 丹「にくいばかりは地金だろ 丹「いへばたちまち氣しきをかへ 仇「丹さんそりやアあんまりだヨ外に男もねへ様に他人に笑はれそしられてもまた米八さんにくまれてもおまへ一人に情をかけてもらへばすむとあきらめて今まで他には上手もつかはずいつこく者でとほしたのが世間を兼る氣になつてなんだかかたみがせまい様にこれ程つくす私が實がおまへには知れないのかへエ、くやしいト喰つく 丹「アイタ、、、これさ／＼堪忍しねへナおへねへ氣違だア 仇「ア、私は氣違ひさいやがるものを無理やり色にすると言ふ了簡はマアほん氣なさたじやアないのさサア亂心を直しておくれサア／＼ 丹「次郎をこ 丹「もう／＼おれがわるい堪忍したトわらふ 仇「ナニおかしいものかそれよりやア今のこと急度だヨ 丹「きつとでなくツてサ急度でなかつたかアどうする仇「エ。どうするへ斯するは 丹「エ、あぶねへかんざして目を突はな 増吉が聲にて仇さん母人をおめへの宅へやつたからゆつくりと遊びなよをいいてあだ言がこゑ 仇「アイヨありがたふ

第四回

人となる事なかれよしやたま／＼不入情にて一旦榮ゆる者ありとも永き月日の中には思ひの外に零落して後悔する事うたがひなしわけて美人はわが色香にわれとほこりて慢心し彼山鳥のわが姿にほれて水死をするに等しく日毎にうつす鏡臺はおろの鏡のおろかなる心をてらしてうわきをつゝしみ不貞の女となるまじと思ひてさへも親兄弟のために苦み不義不實といはれる時節もあるものなればかへす／＼も娘御達の身にはつゞれを着たまふとも心に錦のはれ小袖操の衣の纏々は肩身も廣しと思ひ定めて正しからざる行ひは親御が欲ゆゑゆるすともかならず迷ひて道ならぬ方へは足をいれたまふなど悪まれ口に娘たちへ異見はいつも作者が癖狂訓亭が老婆心なんと子供衆合點か／＼

其名噂も與志町にさゝやかなりし假住居内にきこゆる三味線は絶て久しき流行の昔をこゝに宮園節

梅川もせきくる泪 チン今こなさんのそのやうな憂身はたれがさすぞいな。あぢな一座の付合に思はれ染て

おもひそめ。いとし瘡にかあいが積。逢たいが色。見たいが病ひ。戀しい顔が薬より。按摩さんより。灸より。氣合が能なりや。わるうなる。お袋さんの御機嫌がそこねて見えぬあすの日を文で繰出し口舌で留。

米八「今日はマアこゝまでにして置ませうあした又逢橋の毘沙門さまへ參から丁度今時分來ますヨどうぞその時分お宅だといゝねへ」官代八「ほんに明日は寅の日だの淺草へ行やくそくが有けれどおめへの來るまでまどふヨ 米八「ヤヤそ

うかへ嬉しいねへ」喜「うれしいほどのこともあるめへが捨りきつた宮園ぶしをならつてくれるがうれしさに誰にてもおしへる氣だがどうも請取の能人はすけねへにはこまるおめへはどうも感心だヨ 米八「ヤヤどうせう一番私が覺えがわるいからお氣のどくてなりません」喜「ナニ／＼どうしておれがこの歳になるまでおめへのやうな器用な弟子はとつたことはねへトいふをりからげいしや二三人ももてからこゑをかける。〇口今米さん引米八さん 米八「ヤヤ／＼どうして知れたエ みな／＼」たの字に聞たが今ツからチヨイと覗くつもりだはおめへも行な。米八「ヤヤそうか有がたふト喜代八

梅曆 春色辰巳園卷之三

江戸 狂訓亭 主人 著

第五回

契情も唄女も元は乙女にて生所が別に有にはあらねど貧しき活業親の爲または其身の幸不幸で娘盛の七變化種々さまざまの世の中に多くは親の不所存と欲と我子の出世を思ひ昨日はそしりし他人の噂今日は我身の不義不實生質たる温厚き娘を末は札付の姪婦にそだてゝもはぢをしらねば氣もつかず薄情ものゝ餌となりそゝのかされて逃隠れなぐさみものなる類ひ皆これ因果の母子にて日々非道に導れ人間なしとなり行のみかは果は不實の報ひにてはじめ思ひし立身の半途にいたりて天の誅男のばちにて一生涯誠の出世はなることならず萬年新造といはれたる花の盛りも永くは保たずそれ人たるもの始終を守るはかたけれどそ／＼女と生れては五障三從の罪深ければ過たることを折節は思ひ出して身のうへをよく／＼つゝしみ花ちりて見るかげあらぬ時になりても心の花のちらざるやうに用心するこそよかるべしこゝに一首の古歌をしるして後悔なからんことを教ゆ

ながらへばまだ此頃やしのばれんうしと見し世ぞいまは戀しき

たる事を知らざる時は只上ばかり見る氣になりて羨しき事たえる間なし我子に錦を着せんとて穢れし行ひさせるたぐひは大略母親の所爲なりけりそれはさておき仇吉が素性をこゝにたづぬれば元は朝夷の切通小島町の裏借家にとおとなしく生立しが幼き節より音曲に器用にてこゝや彼所の座敷にまねかれ譽らるゝのが嬉しさに今まで一度見も

知らぬ方へも遠慮する事なく親は元來不自由なれば娘が他に愛せられて鬚結切よりもらひ初はや十四五歳にいたりては小貳朱包の肴代酒賣二階縁日参りとさそはるゝ儘おごらせる心の底意いやしくも母親お八重が欲心から若者どもがはりに来るを徳を得たりと悦びて色氣のあらぬ仇吉がもそつと男をたらしたらばあの息子は金を出すだらうのにどうかいゝ鳥がかゝりさうなる事もやと朝夕氣ばかりもみ居たりしが娘は親に似もやらず袖褻ひく人多けれどたえてこれをば見かへらずあぢな事から親類となりし人の情にて久しく色氣白齒の生娘いやみなしにて有けるものが年をかぞへて今ははや流れてよどむ婦多川に數へられたる苦勞人今宵もたしか丹次郎と口舌しらせて氣のすまぬ別れの時に増吉と愚痴をならべし門口へ母の迎ひに詮方なく不肖ぶせうに立ちあがり増吉へいとまを告二足三足立出しが仇ア、なんだかおもしろくもねえ母人おめえ先へ歸んねえな私は跡から行からト立止る 母「なんだな此子はをかした事いふのうおれがわざ／＼迎ひに来たのに先へ歸れの何のとじくねずと早く歩行ねへな 仇「いやだヨ私やアまだ用があるから跡から歸るヨ 母「おめへも餘程酔てゐるじあアねへかおれと一處に歩行なヨ 仇「エ、モウじれつてへ何て其様に急ぐのだな 母「ナニじれつてへ此方がじれつてへは此間は旦那も足が遠いじやアねへか勘定しらずめエそりやアはや外に旦那を見付る事は苦にもならねへが一月でも半月でも座敷ばかりで居られるものか親父の方の講中の預り金も晦日にやア揃へて同行へ渡さねへけりやアならねへから二兩はぜび拵へてくれると云てよこすしお八十がこれたしか仇吉るものとは方の一兩もあれが内證で都合してよこしたのだから早くけへさねへとおれが口が聞けねへ 仇「そんなに今ならべ立ねへでもいゝやアな 母「インニヤ言はねへと手めへはいゝ氣になつてゐるからヨそしてマア此間旦那の置て行た一兩二歩はどうした其時から何も買やアしねへじやアねへかそれに叔父さんも二歩呉たじやアねへか 仇「よくいろいろな詮議をするのうよく考へてお見な叔父さんの金が去頭の様にもらつてばかり居られるものか今じやア斯して居るから樂だろ／＼と思つて難談にもこのころは工面がよからう何ぞといふから此間も帯をト筋こせへてやつたらどんな

にうれしかつたらうその勘定に二朱ト三百文たしてやつたから二歩もらつたと云つてそれが何時まであるものかな 母「エ、べらぼうめそれじやア釣を取られたのだア。ナニ今そんな事をせずともいゝ事を。きいたふうな斯して居るうち末のしがくてもしようとはしねへて取れる所ばかりこしらへるもいゝ働きたア 仇「どうしたといつていゝじやアねへか此様な活業をさせながらきてうめんな事が出来るものかなやかましい 母「ナニやかましいものか宅へ行て手めへの了簡もよく聞て親父にしつかりと相談しねへけりやアならねへ 仇「吉は酒のうへとい 仇「なんだおつかア親父に左様いふと何ともいひねへ今までもいれ氣をもましてだん／＼歳を取て少しぐれへな事を何もおかしく云はずといゝじやアねへかな今度叔母さんか叔父さんが来るとわけをはなしてそれでもおれがわりいといふなら死んでしまハア 母「ふざけた事をいはねへがいゝ大勢の兄弟の中で手めへが一番おれに苦勞をさせて成長たところて息をつかずに手めへの自由をされたらいゝつらの皮だ 仇「何を私が自由をしたエ 母「エ、やかましいいち／＼親にさからはずと早く歸るがいゝはな 仇「なんてそんなに急ぐのだナ 母「いそぎやアしねへがはやく歩行なナ 仇「おれが宅へおれが歸るにはやくつてもおそくつてもいゝじやアねへか トくだらぬことをいひながら親子けんくわ 仇「ア、モウ／＼まことにやかましいといつちやアねへ 母「ナニやかましいとコレおいらは先刻から途中だからいゝかげんに聞て居たがあんまりしやれるなヨ 仇「しやれやアしねへが口やかましくつてならねへヨ 母「ヲヤこの子は大きな聲をしなさんな外聞がわりいヨこれでも家内に居てはてへ／＼氣がもめてなりやアしねへはナ 仇「氣をもんでもらはねへでもいゝのにお氣の毒だの母「なんだあんまりふざけるないゝかと思つて仇「ヲヤねつからいゝと思ふことはねへの。まことに私こそ氣がもめてエ、くやししいト茶碗をなげる裏口の障子へあたつてチャラン引 母「コレそのなげうちほだれにするのだサアおれをなげるともぶつともしろ日ましにふざけて親を馬鹿にしやアがる トしだいにつのおや子の 春吉「ヲヤなんだへ仇さん。モシマアおつかア堪忍おしヨ トいふに外の二三人ななへはいりて 春吉「お秋姉妹にてげいしや 春「仇さんおまへマア今夜はたいそう酔たの 仇「な